

(表紙)

忠久公 自貞應元年
忠時公 至仁治二年

前編 舊記雜錄 卷四

貞應二 元仁一 嘉祿二 安貞二 寬喜三 貞永一
天福一 文曆一 嘉禎三 曆仁一 延應一 仁治三
忠久公 忠時公 自貞應元年至仁治二年廿一年也、

309 「島津國史」

貞應元年壬午、是年四月改元貞應、自三月以前猶是承久四年、春二月六日、賴經觀
犬追物於南庭、駿河前司義村檢見、道佛公申次、拋東鑑、中次今云
喚次、犬追物有射手、有喚次、有檢見、詳見林春齋犬追物記、三月八日、賴經有病、命大夫泰
貞、修月曜祭於南庭、使公領其事、同上夏四月十三日

改元、拋大白本史

310

二年癸未春三月十六日、鎌倉執權北條義時、召薩州坊津
飯田備前守・兵庫辻村新兵衛尉・土佐浦戶篠原孫右衛門、
令議行舟約法事、於是三人乃議其法、以上、凡三十有一
條、幕府盡從其議頒行天下、賜三人袖判、其言曰、縱有
以法屈理、不宜有以理屈法、拋得佛公旧譜、按三十一條悉載旧譜、茲不復書、袖判謂花押書、縱
有以法屈理二語、始見於此、夏六月六日、賴經以道佛公爲近
江國興福寺莊地頭職、抛道佛公旧譜、賴經置近習番、擇人爲之、
更日宿直分爲六番、冬十月十三日、道佛公爲近習番、
拋東鑑

「栗野士神田橋氏文書」御譜ニハ助兵衛トアリ
勾當僧蓮慶謹言

(島津庄)讓渡大隅方檢非違使惣官職事

左近將監藤原朝臣

右、件職者、鎌倉故(右カ)大將家始令補日本國地頭職之給志

御代之初、忠久左衛門尉殿補任當御庄地頭代官職、奉
行廿年、其間自御庄內出來喧嘩之訴訟之刻、將軍家御下
知稱、如此無支度計之沙汰者、國檢非違所有若亡所至也、
於今自已後者、以清廉御庄官、令補彼職、可致沙汰云々、
以茲被撰故義任、奉行年久間、去元久比義任朝臣參洛刻、

彼連慶被讓、亦奉行間、至義國左衛門尉殿之時、本庄地

頭代藏人入道殿惡道之被科仁、連慶被押込且、暫蒙御勸

氣之間、年來奉行所職等、被止乎、然而依爲無實、彼御

勘氣無程蒙御免、還補本職早、其中於件惣官職者、依不

致所望、無還補、但譜代朝夕御庄官所帶所職等、子孫相

傳者、是佳例也、仍茲連慶之養甥、朝臣限永年、所

讓渡件證文等也、早稱三代相傳之理、申給當御代之裁補、

可奉行之狀如件、以讓、

承久三年正月 日

勾當僧(花押)

311 「忠時公御譜中」

『東鏡廿六卷』

承久四年壬午二月六日、於南庭有犬追物、若君頼經御入

興、此事讚岐羽林義晴、殊二庶幾被申行、犬數廿疋、駿

河前司義村加檢見、島津三郎兵衛尉忠義二十申次之、

射手、

小山新左衛門尉朝長

氏家太郎

駿河二郎泰村

横溝六郎

312 「全上」

『全』

同年四月十三日、改承久爲貞應元年、

313 「忠久公御譜中」

『在東鏡廿六卷』

(01) 舊譜云、承久四年壬午三月八日、自去夜若君頼聊御惱、仍於御所南庭被行月曜祭、大夫泰貞奉仕之、嶋津左衛門

尉忠久沙汰也、御使駿河太郎兵衛尉朝村云、

(02) 道佛公舊譜云、承久四年壬午二月六日、於南庭有犬追物、若君頼御興行、此事讚岐羽林義晴、殊二庶幾被申行、犬數廿

疋、駿河前司義村加檢見、島津三郎兵衛忠義二十申次之、

射手、

小山新左衛門尉朝長

氏家太郎

駿河二郎泰村

横溝六郎

314 「臺明寺藏」

〔進狀案貞元九月十一〕

〔奉寄進案之〕

明寺衆集院阿弥陀堂種種御勤内毎年二月常樂會

僧供新田肆段事

在小川院二条六里垣本肆段

右、件坪奉寄進之志者、正西既及八旬之餘算□□死期幾年之日月、然則所欣者六八弘誓之弥陀淨土、來而迎我、所憑者五百大願之釋迦本誓、勸而送我、二佛迎送、化儀是廣、豈正西一身漏彼利益哉、爰以正念存生之時、擬没後追善之營、放寄私領肆段之水田、欲濯輪廻四惡罪垢、情以子息者纒一生之報謝也、至于孫子難訪、佛陀者是永代之導師也、生生世世有憑、因茲、爲後生菩提、奉寄進之矣、抑彼新田若有風虫旱水之損亡之時、加大衆恩願之内檢、無下作之煩、弁濟僧供新米者、願主望云可足者欵、仍奉寄狀如件、

貞應元年九月 日

散位大中臣用房在判

沙弥正西在判

315 「在忠久公御譜中」

越前國守護事、任去年御下文之旨、左衛門尉惟宗忠久可令奉行之狀、依仰下知如件、

貞應元年十月十二日

前陸奥守平(花押) 「義時」

「右ノ正文、旧御番所御文書ニ番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ」

316の1 『写在官庫』

しまつの三郎さゑもんたゝよし 「忠義」 かくんこうにたまはりたる所とも、めされてさふらむ事、かへすゝふひんにさふらふ、ことしとなり候てハ、あきたるところとも、おほろけにハ見え候ハす、おのつからさふらふもあさましく、せう所ともにて候つる也、これよりのちにも、おのつからあきたる所候ハ、かならずゝたふへく候とそ、おほせ事候、この御ふみをおなし心に御らん候へし、 「真心元欵」 十一月十三日 「統日義判」 「(花押)」

『目錄二位殿御書トアリ、二位ノ禪尼忠義公ニ報スル書ナルヘシ』

316の2

承久元年七月、頼經下向鎌倉、時年二歳、二位禪尼垂簾聽政、後此四年、則爲貞應元年、所謂所賜於勲功者、蓋指承久三年閏十月十五日、爲勲功賞所賜左兵衛尉忠義伊賀國長田庄地頭也、可追考、

建保五年四月、政子叙従三位、十月、叙従二位トアリ、

317 『臺明寺藏』

「端裏書」 一垣本一段僧円慶法券状案貞応三十二

僧円慶謹辞

奉估渡嚮乃郡内字垣本田二段事

副渡讓狀壹通

右件田、依有用と、停止万雜公事、吉野太子限永年奉估渡處也、若有相違者、以余所田可入立、但件田者、有限大菩薩經講田、師匠自故壹葉御房手、讓給田也、於本券者、依有類地、在久樂名、仍爲後代之證文、沽券如件、

貞應二年二月十日

僧在判

318

『全』

相博

僧重慶經田与覺榮講間事

右、件田者、故妙月御房覺仁之相田所領也、爰妙月御房處分内、重慶得分行原田(片カ)參段与覺榮得分浮免壹町、所令相博也、仍爲後日證文、互令券契之狀如件、

貞應二年三月 日

重慶(花押)

319

「忠久公御譜中」

頼朝卿後室平政子從二位禪尼治天下之際、兄相模守平義時爲執權、丁此之時、徵攝州兵庫辻村・土州浦戸篠原・薩州

坊津飯田共三輩、而使彼等定舟船之法式、其書全記于左、

船法度

一 寄船流舟者、其在所之神社佛寺之可爲修理事、若其船ニ於有乘者ハ、舟主可爲進退事、

一 於湊繫船損たる時者、從在所需たる物をほし、船頭ニ可渡也、爲其帆別碇役仕、湊を爲買上者、爲國主不可有違乱之事、

一 繫船餘多有而大風ならば、其村より加勢をせハ、先風上之舟ニ加勢可仕事尤也、いかに風下之船ニ繩碇ありといふとも、風上之舟流懸らば、諸船不可繫留、若風上之船をのれと繩を切、風下之舟ニ流懸り、貳艘共ニ損ならば、風下之船より風上之船ニ可爲存分事、

一 沖走時風下之船ニ乗懸つきしつむる時ハ、風上之舟ニ一人成共損たる舟より乗移たらば、風上之舟「本マ」けかたるへき事、

一本船多た船之時、本舟之荷物捨、ゑたふね之荷物つゝかなき時者、舟「またイ」ニ配當有之ましき事、右者親のおつかハ子ニ懸り、子のおつかハ親ニ懸事無之故也、但、最

前多た船本舟之積合時、互ニ乘衆約束之上を以、可有沙汰事、

一 船をぬすまれ、或者賊船ニ取れ、北國之舟者西國ニ有、西國之船者北國ニ雖有之、此船を買取廻船不可仕事、若荷物を積、廻船於在之者、船主見合ニ此舟を取返、船頭をも可爲迷惑事、かへらに付たる沙汰者、縦親子之間にてもふかくたるへき事、

一 橋舟をなかし、何方之浦ニ在之共、其在所ニ理可請取事、其故者、橋船ニ者、網碇無之物也、但、本舟之道具網碇ニよらず、其橋舟ニ於有之者、其所より相添可渡也、親之道具ハ子か請取と云沙汰有之、若損たる時者、借船ならば、借手弁たるへき事、但、船と陸との道たるへきゆへに、借手可存事、

一 借船をして、若其舟損たると云共、借手弁さるへき事、但、船床を不濟、船主之無分別所をおさへて、出船仕、其舟損たる時者、借手可爲弁事、但、最前之約束次第たるへき事、

一 借船をし、其船虫食たる時者、借手可爲緩事、但、船付於有之者、借手不及氣遣事、但、船付之者、種々に理處、借手於油断者、可有弁之事、

一 帆柱損たる時者、借手可弁事、但、借請候時、帆柱ニきす有之由、船主理たる時者、不及弁事、

一 綱をきらしたる時者、不及弁事、但、取迎おとしたらば、可弁事、

一 諸道具、船請取たる時の注文ニ引合たすへき事、

一 湊ニ而乗衆^{「船衆イ」}○出船をすむといふ共、船頭進へからず、乗衆水手思案之處ニ、船頭進之出船をして、若^{「イニナシ」}其船氣遣仕時ハ、船頭之けか不可過之事、

一 荷物濡たる時者、船頭之可爲弁事、但、沖ニ而大風ニ逢、大浪大雨之時濡たる物者、緩ニ不可有之、湊之内ニ而雨あかに濡たる物者、船頭弁たるへき事、

一 船中ニ而大小ニよらず、ねすみきりたるもの於有之者、配當たるへき事、

一 船中ニ過分ニ荷物を捨たる時者、水手之私之物ニも配當かゝるへき也、少々之時者、水手^{「夫イ」}可相除事、

一 荷物捨たる時者、其舟ニも配當懸へき事、右者、荷を捨たる故ニ船助時者、舟も配當ニ入へき事、

一 荷物積合^{「之イ」}○時、荷を捨、行先ニ而配當在之時者、先ニ而積荷之賣直ニして、配當すへき事、

一 荷を捨、行所ニ不行、乘戻、配當在之時者、在所之買所之直を引、可配當事、

一 荷を捨、行所ニも不行、跡ニも不戻、中途ニ而配當せ

は、其所之賣直たるへき事、

一 船ニ荷を積、船頭ニ積日記を以不渡物者、縦金銀を捨
たるといふ共、惣之配當ニ不可入事、

一 積日記船頭ニ渡時者、乗來何も加判^{「可イ」}〇在之事、是に迎
たるものハ、聊も配當ニ不入也、但、船中てんげんの
上を以、残りたる時者、積日記不入といふ共、配當ニ
可入事、捨たる時者、曾而不可入事、

一 船を借手、戻^{「イニナシ」}ニも運賃を取たる時者、三ヶ一者船頭之
進退たるへき事、但、借請時、戻之荷物迄も可積由、
理たらは、三ヶ一ニ不及事、

一 船を借、船頭ニ行先ニ而公事有之、舟を被留たる時者、
借船頭可弁事、

一 船を損して、命たすかる時者、縦其内一人之者ハ、金
銀をたはさミたりといふ共、惣中よりいろいろいたるへか
らさる事、

一 糶米を積、又唐物を積合たる時、荷^{「物イ」}〇を捨る時、若唐
物積たる荷主、我から物を捨^{「たらば」}〇糶米ニ配當不可懸事、
あはて糶米積たる荷主、或者船頭、或者水手^{「水イ」}彼唐物
を捨たる時者、米糶を不捨して、我物を捨たる時者、
何を内ニ者積而唐物と申共、不知と云沙汰有之事、

一 船をかり、すゑてたつる時、船を焼ハりたる時者、か
り主弁可申事、

一 荷を積而、或者沖ニ而、或者湊ニ而かゝりて、船に火
を出たる時者、沖ニ而大風ニ船を捨たる同^{「と脱カ」}可爲沙汰事、
但、火を出たる者、可爲越度事、

一 船ニ荷を積而、水手取逃仕たる時者、舟頭弁たるへき
事、但、水手をとらへ、荷主に渡たる時者、縦取逃の
物ちんくたりとも、船頭之弁ニ不及事、

一 船借候而、借手より相違候者、船賃を約束之まゝ相渡
者也、其時者、右之舟上下仕^{「戻イ」}〇間程、右之船すゑ置也、
但、本船主内談候而、少く禮物を以相澄候者、右之船
何方へ成共、差廻すへき事、

一 船を借候時、借手より相違候ハ、右之船程成を借替
相渡、我舟を可請取者也、

右、卅一ヶ條之儀、貞應貳年癸未三月十六日ニ兵庫辻村
新兵衛尉・土佐浦戸之篠原孫右衛門・薩摩坊津飯田備前
守、天下ニ被召出、船法御尋之時申上刻、御袖被成御判
候者也、理をまくる法者あれとも、法を曲理不可有候、
此卅一ヶ條之外ニも、船沙汰有之者、卅一ヶ條ニ曳合、
似たるを以、可有沙汰者也、

『末吉羽島氏文書』

肥後國住人西山九郎道房字有傳、娘紀氏夫相良兵衛尉長繼
与薩摩太郎忠友相論条之事

一羽島浦事

右、如承久二年五月日間注所勘狀者、長繼則令進覽手
繼以下證文等、所申雖似有謂、忠友且得壽永二年紀氏
祖母大藏氏尼之讓、知行經卅餘年早者、依年來知行例、
可令忠友領知彼浦矣、

一牟木浦事

右、同勘狀云、長繼雖有申旨、所詮、如忠友所進承久
二年七月日寺家下文正宮公文所施行等者、忠友可爲牟木浦名頭
職之旨被載之、仍忠友所申聊有謂云々者、可令忠友爲
彼浦名主職矣、

一狼藉事

右、同勘狀云、先日爲國司之沙汰、被成敗之由、被載
之云々者、此上者不及子細矣、
以前三ヶ条大略如此、於勘狀正文者、先日於筑後介秀
朝之許、令紛失了、仍以案文所有御成敗也者、依仰下
知如件、

貞應二年四月 日

前陸奥守判(兼時)

『忠時公御譜中』

可令早左衛門尉藤原忠義爲近江國興福寺庄地頭職事
右人、依勲功之賞、補任彼職之狀、依仰下知如件、

貞應二年六月六日

前陸奥守平(兼時)(花押)

『忠時公御譜中』

可令早停止爲伊賀國守護使乱入當國長田庄事(伊賀郡)

右當庄、前々守護之時、不入部使者之由、地頭所申也、
大番役并謀叛殺害沙汰之外、不可入部彼使之狀、依仰下
知如件、

貞應二年八月六日

前陸奥守平(兼時)(花押)

〔石六月六日・八月六日ノ正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖
之内ニアリ〕

『臺明寺藏』

〔端裏書〕
賀法眼御

「如此御勤等、所詮、以丁寧爲先、(不)可有懈怠之狀
如件、
(花押)」

〔安カ〕慶謹解 申請 執印(所カ)裁事

請殊任樹王房覺有讓狀旨、賜御判、令勤行御寶前御勤
行五箇日仁王講一口并法花經一口子細狀、

副進 證文等

右、謹檢案内、如此職人之習、以相傳付屬之狀、蒙上宣
勤行者、新古之流例也、隨巨細之趣、所進證文等具也、
望請御裁断、任讓旨賜御判、備龜鏡、弥致御勤之丁寧、
爲奉祈請現當御悉地、粗勒子細、言上如件、以解、

貞應二年八月 日 僧安慶申文

324

〔端裏書〕
「樹王丸手紙」

僧覺有謹辭

讓与 弟子持乘房安慶

正宮御前勤内五ヶ日仁王講一口并法花經一口事

右、件仁王講勤者、檢校故瀧水僧良源年來勤仕之勤也、
然良源者、讓与前講衆僧教胤早、教胤亦以彼勤、讓与僧
覺有早、仍數年之後、依爲同法弟子、相觀房存生之間勤

來程、被既死去早、依之本主覺有存生也、不及他人之領
掌乎、覺有進止也、於于今者、爲師弟故、相具次第證文、
讓与持乘房了、爲後日證文、手紙之狀如件、

貞應二年八月 日 本主僧覺有(花押)

325 「忠時公御譜中」

〔東鏡〕

貞應二年癸未十月十三日、撰可伺候近々若君之人、被結
番、號近習番、共有六番、第六番三人之中、忠義有之、于時島
津三郎兵衛尉

326 『正文在官庫』 「手鏡」

伊賀國長田庄地頭所進解狀遣之、子細見狀、守護所使狼
藉事、可停止使入部之由、御下知已訖、雖然、於追捕損
物者、札明可令返付給之狀、依仰執達如件、

貞應二年十二月八日 (花押)〔家時〕

武藏守殿〔家時〕

「右十二月八日ノ正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之中ニア
リ」

327

「正文在官庫」「忠時公御譜中」

可令早左衛門少尉藤原忠義(忠時)爲讚岐國櫛無保地頭職事、右人、爲彼職、任先例、可致沙汰之狀、依仰下知如件、

貞應三年九月七日

武藏守平(家時)(花押)

「右ノ正文、旧御番所御文書ニ番箱中御宝鑑三帖ノ内ニアリ」

328

「忠久公御譜中」

「在東鑑廿六卷」

一舊譜、貞應三年甲申十月十六日、天變御祈被行之、島津左衛門尉忠久爲奉行、又一方供料沙汰進云々、

329

「島津國史」

元仁元年甲申、是年十一月改元元仁、自十月以前猶是貞應三年、秋九月七日、賴經以

道佛公爲讚岐國櫛無保地頭職、拋得佛冬十月十六日、

祈禱諸社、因天變也、公爲奉行、拋東十一月二十日

改元、拋大日本史

嘉祿元年乙酉、是年四月改元嘉祿、自三月以前猶是元仁二年、夏四月二十日改元、

拋大日本史秋七月三日、賴經以道佛公爲信濃國津乃郷地頭

代職、拋道佛冬十二月二十日、賴經始入新第、後隊供奉

三十人、公預焉、拋島津氏

二年丙戌春正月、賴經任征夷大將軍、拋大日本史

330

忠繼

號山「山田氏別祖」田式部少輔 他腹故無家督、

三代久經

初久時 修理亮 下野守古系圖稱 豊後守

嘉祿元年乙酉誕生、母伊達判官入道念性之妹、爲尼白

以正史二年卒

331

件境神官等、不知□□之狀、猥依致非論、令言上子細於京□□日、令停止彼濫妨之由、(御之)殿下政所□□下文

□□軍家御成敗之狀、兩度被成下畢、仍守彼狀、□□國守護

所并御領方惣奉行所八木入道・同惣□□庄司打莅件境、

加見知之處、次第證文与□□無有相違事、神官等之非

論、誠以顯然□□者、爲止後代之非論、所令記錄如件、

元仁二年二月廿一日

左近將監藤原朝臣(花押)

別當 伴朝臣(花押)

右近將監藤原朝臣(花押)

左衛門尉惟宗二代忠時公也忠義

右以人、於彼郷御代官、有限御年貢無懈怠、任先例、可令致沙汰給之狀如件、

嘉祿元年七月三日

334 「在文庫中」

(本案函ハ二九〇号ト同承函ニツキ省略)

335 「忠久公御譜中」

「在東鑑廿六卷」

舊譜云、嘉祿元年乙酉十二月廿日、若君經顯有御移徙之儀、申一點御出、御後供奉三十人之内、忠久在之、于時島津大夫判官

336 『臺明寺藏』

(端裏書)
「倉原文」

僧覺明謹辭

進相博水田參段事

右、件水田者、覺明私領也、然臺明寺彼岸田字車田以件

倉原田參段一色不輸免、限永年所相博也、但依有類地、

本證文者不相副之處也、仍相博之狀如件、

嘉祿二年八月廿五日

僧覺明在判

337 『正本比志島氏家藏』

和与 山門院地頭所務条々

一 地頭狩倉開發事、

止兩方開發、可爲本狩倉也、

一 藪等事

酒藤藪者、令安堵其身、於彼藪有限在家役并地利物等、

可令弁勤之、於源次郎藪者、可爲地頭之藪、於高少野

藪者、半分者可爲地頭進止、今半分者、居百姓可取在

家役并以下紙ナシ

(本文書ハ二四六号文書ト同文ナルベシ)

338 『公』

一 狩倉事

右、如兩方申狀者、云領家分、云地頭分之役、分狩倉

事勿論也云々、然則地頭分之外、不可妨領家分之狩倉

矣、

以前条々、大略如此、抑當御庄地頭得分事、已去元久元

年・承元・建曆下知先畢、而地頭代等各守彼狀、可被沙

汰之處、張行新儀非法之間、於事誼譚、爲庄務乱之由、

雜掌所訴申也、地頭代等所行甚不隱便、自今以後者、停

止自由非法、且守先下知之旨、且任當時成敗、可致沙汰

之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

嘉錄二年十二月八日

(奉時) 武藏守 在御判

(時房) 相模守 在御判

339 「國史」

安貞元年丁亥、是年十二月改元安貞、十一月以前猶是嘉祿三年、夏四月十六日、幕

府有病、命行鬼氣法、使公知其事、拋島津氏六月十八日 藏東鑑

公薨於鎌倉、年四十九、系圖 拋島津是日傳守護職於道佛公、

拋道佛、拋廟堂要覽、五道院在府城北半里余、按廟堂要覽、得佛公、道

佛公、道忍公、道鑑公、道誓公皆葬於此、於是名爲五道院、則公生

五道之名與於道鑑公已葬之後矣、而今曰五道院者、追書耳、公生

三男、長 道佛公、次忠綱、次忠直、道佛公生於建仁二

年壬戌、母島山氏、次郎重忠第二女、拋島津系圖、原文作重忠

伊地知縫殿助系圖云、重忠男女七人、第一重保、第二重清、第三重時、

第四重俊、第五女子、第六女子、第七女子、第八女子即公夫人、今拋男

女異長之礼、改書第二女、男女異長見曲礼、又按公娶於島山重忠之女、

島津系圖道佛公曰譜皆如其說、世世相伝不復疑矣、而本田信次郎系圖云、

本田親恒有女、嫁于公、文書又云、島山重忠是歲年二十六、襲封、

以親恒女爲己子、而嫁于公、此二者異說云、忠綱稱周防守、是爲越前島津氏祖、忠綱居越前、見 忠直稱

掃部助、居甲斐州波加利新莊、見上建曆三年、建長中、事將軍宗

尊親王、三男直經・泰忠・時忠、直經稱太郎左衛門尉、

無後、上 泰忠稱宮里三郎左衛門尉、傳十世至久光、無

嗣遂絶、拋島津支、時忠稱左衛門四郎、亦無後、拋島津冬十

月十日、下文、以道佛公爲守護地頭職、如得佛公狀、

拋道佛公曰譜、按得佛公讓狀云、伝藤原國地頭守護職於左衛門尉惟宗某、

除伊作莊・川辺郡・指宿郡外、官悉領之、又云、伝信濃國太田莊・神代

郷於左衛門尉某、下文云、令左衛門尉惟宗某領越前守護職、薩摩地頭守

護職及十二島地頭職、信濃國太田莊・小島・神代・石村南、津乃地頭職、

如亡父豊後守某讓狀、按公讓狀及下文所言地方、十二月十日改元、

所謂実封者也、実封事、詳見上文治二年註、拋大日、初 公以厚地東俣二村爲丹後局湯沐邑、局嘗遊其

地、望花尾山而賞之曰、吾死、願葬於斯、十二日、丹後

局薨、葬於花尾山下、拋得佛公曰譜、丹後局墓在花尾山麓道右、傍有古墓五六、伝是陪葬、又有二墓、相伝

其一比企判官塚、其一永金阿

關裂塚、道左有局闌維遺跡

340 一嶋津宗兵衛尉と書しハ、寛永系圖ニみゆ、これ寛永之

系圖編集之時誤れる也、古文書之内、往々宗兵衛尉と

稱するあり、これ宗兵衛といへるにあらず、惟宗兵衛

尉といへるを略せる也、寛永系圖ハ林道春吟味せしニ、

道春俄に編集せし事ニ而あやまり多キなり、

一又弟若狭兵衛尉忠季ヲ頼朝の子といへるあやまり也、

是ハ寛永ノ系圖ニも略弁せれとも、言簡ニシテ通シカ

「忠久公御譜中」

たし、これハ八文字ニ嫁し給ひし後もふけ給ひし御方也、それ故寛永の系圖にも同腹とあり、吳父たる事しるへし、

一 治承三年ニ忠久誕生といふ事未詳、

一 建久七年一月薩州ニ下向といふこと覺束なし、これ寛永系圖之説也、

一 嘉祿二年三月十一日六十歳ニ而死せしといふハ、次ニよれハ誤にや、寛永の系圖にハ、嘉祿三年六月十八日四拾九才ニ而卒去せしとあり、同くあやまれるなるへし、系圖誤り有、

一 惟宗姓ヲ名乗しこと弁あり、

一 東鑑建仁三年記ニ、薩摩大隅日向の守護といへるハ覺束なし、忠久守護ニ任せし事不知、

○ 伊地知氏重當、父重昶の三十三回ニあたりし時よ

み給ひし

おもひきや今日まで命なからへて三そし三とせの手向せん(とは)

(本文書ハ三三九号島津国史記事中ニ挿入シアリ)

「在東鑑廿六卷」

舊譜云、嘉祿三年丁亥四月十六日^甲、將軍家頼依御不例、於御所南門被行鬼氣祭、島津豊後守沙汰也、

342

「全」

「在廿六卷」

東鏡、嘉祿三丁亥六月十八日^乙、雨降、辰刻島津豊後守從五位下惟宗朝臣忠久卒、日來脚氣之上惱赤痢病云々、享年四十九、法名得佛、號道阿弥陀佛淨光明寺殿、

343

「國史」

「卷之一補註」

安貞元年、得佛公葬五道院、廟堂要覽云、自得佛公比及四世葬五道院、又云野田感応寺有五石塔、伝稱得佛公以下四世墓、禮記、大公封於營丘、比及五世、皆反葬於周、鄭注、五世之後乃葬於周、孔疏、綱經及注、則六公之外為五世、此云比及四世、語本禮記、大公之外為五世、併大公為六世、得佛公以下四世倣此、

344

譜略云、忠久平居戰々兢々而、恐辱父祖之功業、于文于武左右之、往鎌倉而護柳營、還島津而聞國事、雖暫時無懈、嘉祿三年六月十八日、脚氣之上病痢而卒、忠久嗣子曰忠時、受讓於屬續之前領島津御莊薩隅日、事頼家・實

朝、而及賴經之世、承久之役屬關東、渡宇治川而討七人之敵、武名籍甚加旃、依勲功之賞、伊賀・近江・讚岐等之國內郡縣亦領之、

〔忠久公御譜中卷末〕

私記進獻譜與世錄記有少差異之弁

先是、寬永十九年壬午之春三月、以將軍家家光卿鈞命、令大田備中前司日本諸國諸侯之奉獻系圖、丁此之時、島津氏歷代系譜亦自大祖至大隅守光久、記之以爲一卷、先備道春翁一覽、且請取是捨非而此譜之得真脈、翁既許諾、而後逐一下筆刪小過補不足、而況於文字紕繆大過卑語乎、悉以不日細密成矣、其得草案、則遂清書奉進獻矣、其卷端粗所以記左方也、

賴朝

正二位 大納言 右大將 征夷大將軍

賴家

從二位 左衛門督 征夷大將軍

實朝

右大臣 左大將 征夷大將軍

忠久

治承三年己亥誕生 號島津 左兵衛尉 宗兵衛尉
左衛門尉 判官 豐後守、分國薩摩大隅日向領之、
越前・若狹・伊勢・信濃亦粗領之、

傳稱、初比企判官能員妹丹後局幸於賴朝卿而有身、賴朝妻平政子妬忌以逐之、丹後局畏其被害而出關東赴上方、到攝州住吉夜求旅宿、里人不許之、時大雨甚闇忽有產氣、乃入社邊離傍踞石上、時會狐火照暗、遂生男子、即忠久也、時治承三年也、至今號其石、稱產石、住吉末社有稻荷、蓋其夜狐火者、此神之助也、故號島津稻荷、且島津家以雨爲嘉瑞者、此故也、其後丹後局潛下向關東、以嫁惟宗民部大輔廣言、故忠久亦冒惟宗氏、然實賴朝卿子也、建久七年八月一日、忠久歲十八下向薩州、過京都謁近衛殿、於是賜藤原氏云爾、賴朝初製十文字、以爲旗幕之紋而賜忠久、累世相傳之、旗地白而其中黑書十字、幕地搗塵而白書十字、
嘉祿三年丁亥六月十八日卒、歲四十九、法名號得佛淨光明寺、

能直

大友先祖

忠季

若狹守 於宇治川戰死 關東方 三方氏先祖

忠久一腹弟 若狹島津

忠經

左衛門尉 於宇治川討死 京方

爲貯私家、新編島津氏世錄系圖矣、丁記夫譜之時、

考年序曰、

忠久主者、治承三年己亥、於攝州住吉誕生、母比企判官能員之妹丹後局也、道春翁被記前段者審詳也、

賴家卿者、壽永元年壬寅八月十二日庚戌酉時誕生、母北條遠

江守時政女平政子本腹也、

實朝卿者、建久三年壬子八月九日己酉巳時誕生、母同上、

如此誕生年月各次序明白也、雖然、先是、寬永十九年壬午私家系圖進獻之時、記忠久主於 實朝卿之末、其有奧旨

曰、 賴家卿 實朝卿者、續受賴朝卿之大任、所任 征

夷大將軍不亦尊乎、忠久主者、以生他腹故僅賜日隅薩三州越前若狹以下諸所、遠居西海、不亦卑乎、是以前尊後

卑、是亦所以顯尊卑之有差別也、於此世錄記者、爲流子子孫孫万万歲也、以故不改天倫、不抱貴賤、有少異曲、則改之以歸正脈矣、且復所漏脫於進獻譜之女子及僧共以載之、而深韞置禁他見焉、若後人得恩免有看讀、而考之於進獻譜之寫本、則有大同小異、強勿疑不一順、以此記爲弦直、非恣專私智飾當家細大也、

大友左近將監能直者、齋院次官親能猶子、而 賴朝卿近習幸臣也、文治五年奧州太守伊達泰衡退治之時、東海・

北陸・中路・三道急被攻入、大手中路 賴朝卿自將也、

能直從之、於伊達郡密出寢殿邊、與長井實盛之外甥宮六

謙伏國平國平勇敢故、平氏滅亡之後、爲親能之預屈居矣、今度能直

不足若冠而供奉焉、仍親能達台聽得國平之恩免、所以從能直

進退也、俱抽出于先陣軍中、既獲佐藤三郎秀員父子之首、

揚武譽於陣中、時十八歲也、建久四年之夏、富士野狩獵

之時、曾我氏兄弟匪啻企夜討、且推參于 賴朝卿旅館、

卿將帶太刀出向之時、能直有君邊謂諫言奉扣留、爲天下

之美談、此時廿二歲也、如斯雖曰不去膝下所得君、平政

子無妬忌事、且有一說曰、大織冠十三世越後守能成子、

母大友四郎大夫經家女也、然則非 賴朝卿子明矣、所以

不載此記也、右件件、以短筆記之而不詳密、縷縷不全、念有過不及

誤、無所逃罪、仰冀讀者宥之幸之幸也、

得佛公諱忠久、島津氏之大祖也、幼名三郎、後歷任左兵衛尉左衛門尉、檢非違使、大夫判官、從五位下、豊後守

公鎌倉 右幕府頼朝公清和帝之苗裔孫也、帝第六子貞純親王生六

歴大宰大貳、遷鎮守府將軍、經基生多田滿仲、滿仲生頼信、頼信生頼

朝、幕府乃義朝之第三子也、以近衛帝久安三年丁卯四月八日生京師、

母熱田大宮可藤原季範女、永曆元年庚辰三月流伊豆國姪小島、治承四年

庚子八月起兵、降附郡果、乃定都於相模鎌倉、壽永二年木曾義仲亦率兵

入京師、平家奉 安德帝、出奔攝津城守一谷、元曆元年、幕府使其弟範

頼・義經將兵討義仲、義仲敗死近江粟津、範頼・義經遂進攻一谷城陷、

平家又率 帝走讚岐八島、元曆二年庚辰又進迫八島、大義經家軍、追至長門

壇浦又敗之、帝没海遂滅平家族、幕府 自始舉兵、至于茲凡六年而得志於天下、 長庶子也、 幕府初徵謫

居伊豆北條、通比企判官能員之妹丹後局、而局遂有妊、

夫人平政子北條遠江守平時政女、妬害之、治承三年乙亥歲、局避害

西國行到攝州住吉、天已暮、腹痛甚勢欲產之、傍求宿主

人無肯許者、於是不得已而、踞石于社壇之傍、以生

公、此石号島津誕生石、當時神職等以為神也、而時大雨降、夜亦

甚晦、遇狐火照暗、人以為神、島津氏以兩為祥者、莫不于此、

以崇尊船荷神者、亦職之由也、而此夜狐火照暗者、傍在稻荷社、

社、聞社邊兒啼、怪而遣人視之、遂收育載歸京師、既而

事聞 幕府、於是使人賜 公名三郎、或曰、右幕府者義朝第

遂名一公、乃使局嫁民部大輔惟宗廣言、廣言以八文字氏焉、醍

裔也、承平六年賜惟宗姓、廣言之父曰日向守基言、至廣言領日向國司、

廣言善和歌、見千載集等之書、按市來氏譜曰、廣言晚年從公來薩摩幸市

來院、而其來薩摩之後、復無子故、養左衛門尉國 生三方兵衛尉忠

分友久之男左衛門尉友成爲子、子孫遂以市來爲氏、

季、公後以其異父弟、使忠季領若狹國守護代、故稱若狹島津、忠季生

時間信實次郎忠經、事後鳥羽上皇、承久之亂、忠季屬北條泰時、忠

經從京軍、父子 皆戰死宇治川、

此年改 有 幕府之命至鎌倉、公時七歲、六月十五

日、幕府蜜者登夫人召 公於鶴岡八幡宮、而初加元服、

名稱忠久、任左兵衛少尉、先國史論曰、幕府治世之始、雖故旧之

者、幕府之外勇而且有殊功、然當時但稱四郎、和田義盛者爲得所別當、

然稱小太郎、島山重忠、當時之名士而稱次郎、其余如平三景時之類不可

枚舉、公僅七歲職任左兵衛少尉、 島山莊司次郎重忠爲加冠、

按秩父氏之譜、其先出 桓武帝、帝生萬原親王、親王生高見王、高見王

生高望王、始賜平姓、高望王生村岡良文、良文生志頼、志頼生秩父將

恒、將恒生武基、武基生武綱、武綱生重綱、重綱生重弘、重弘生島山莊

司重能、即重忠之父也、兄重光蚤卒、子季光幼故、重忠立攝家事、元久

二年六月二十二日、北條時政信、乃賜 公以鳩作短刀、長七寸、無

之節、皆以四分一銅彫刻群鳩、且下命、定以重忠之女宜妻 公

之約、而遂使重忠輔佐 公、此日乃賜 公伊勢國須可御

地頭職、西海九國、以筑前肥前豊前為前三國、以筑後肥後豊後為後三國、以日向大隅薩摩為奧三國島津御莊、尋復任

三國守護職、秋八月二日、公始就國都薩摩山門院木牟禮

城、今出水有木而總管三國、仍以島津氏焉、曰臣史平田純正

編錄、公家之譜之命、故編誦、公家古譜文書及諸家之譜系、冥無一事之差謬也、而今按、公家之古譜、為、公以建久七年八月一日、十有八歲

而、乃就國、又按阿多氏、敏島氏、川田氏、鎌田氏、石塚氏、高江氏、吉峯氏、有馬氏等之譜、皆為以文治元年或文治二年八月二日就國、純正

竊謂、文治元年之春平家之門族、咸于西海、而後、幕府始兼統諸國守護地頭矣、於是、先以、公為三國地頭也、然則、當以文治年時為是乎、而今

之正統系、因及元祿十三年、大玄公所獻之譜略、亦皆、故今從之、初、幕府折二

疋龍、而一縱一橫為十字文、以賜、公為器服之章識、旗

者地白而黑書十字、幕者地黑、搗白書而十字、且賜大十文

字大刀、長三尺八寸八分、無銘、赤銅波渡幾、以及愛染明王坐像

是謂五指量像、五指量者、自頭至運台下、其長二寸許、兩手合掌而受之也、嘗聞往古之言、弘法大師奉、嵯峨帝之勅、以谷渡之藤尊連理之処、為

業平、業平嘗有与真雅師弟之盟、故諺之云、真雅又与之在重

之、今制所、八幡大菩薩白旗、文寬上人、銀釜等若干器物、世々

崇尊賜之、相傳以器重之、公之生時有奇徵、以為稻荷大明神冥助也、

於是國事之始、先建稻荷之社于山門院、今見在府城東北半里

以為島津氏社、文治五年、幕府將討伊達次郎泰衡、予守

源義經依奥州泰衡、文治四年十月勅泰衡等討之、泰衡襲衣川館、義經自救、乃歎義經頭于鎌倉、然以泰衡初与叛逆之人、雖及事之急不得已而討之、尚有餘罪、下書徵島津御莊之兵、且召、公來謁、國中固有強

家或不從、公之令事聞于鎌倉、故幕府使北條時政贈書、公、記不享之徒致之鎌倉、公已發兵而亦自至鎌倉拜謁

幕府、幕府時自將討泰衡、以島山重忠為先鋒、軍士等請

使幕府之子為先鋒將、然萬壽君、万壽太子顯、家卿之幼名、今茲僅八歲、

夫人政子以其幼不忍遣之、於是重忠、時重忠之妻、政子之妹也、說政子

曰、幕府通丹後局、而所生之子今見在於惟宗廣言之所、

蓋舉此人以代萬壽君乎、政子喜曰、吾亦聞有此人、未知

其人、請速見之、然蜜妾之子何面觀之乎、卿其圖之、

時、公十有一歲、重忠使之着左折右總烏帽子、此法烏帽子

今、之謂、統直垂之背縫以為標、與諸侯之子弟等同列而坐于

堂上、政子隔簾見之、遂與重忠俱舉于幕府、幕府以其

幼不肯許之、重忠頻請不措、乃聽之遂以、公為先鋒之

將、使重忠輔翼之、於是、公率三國之兵、都督前軍、東

脫此事故、七月十九日、幕府自將向陸奥、泰衡豫築壘壁於

阿津賀志山、伊達、郡、引逢隅河、以為要害、使異母兄西木戶

太郎國衡將二萬人守之、且多城要害之所分兵守之、泰衡

亦自將兵陳于國分原鞭楯、八月八日、幕府進兵攻阿津賀

志山、國衡使金剛別當秀綱率數千騎出逆之、島山重忠、

小山朝光、加藤次景廉、工藤行光、工藤祐光等擊走之、

乃進兵攻阿津賀志山諸壘、小山朝光率宇都宮朝綱之家臣

紀權守波賀次郎、大友某等數人、夜密自藤田驛踰土湯嶽鳥

通潰、唯金剛別當之子下須房カネノボ太郎秀方止城中力戰、遂爲

工藤行光見獲、秀方時僅十三歲、衆咸稱之、和田義盛從

及國衡於大關山、國衡還馬欲射義盛、義盛先射當國衡之

膺、東鑑國衡退避、義盛欲再射之、時重忠亦率衆軍來、

國衡大怖逃奔、誤陷田間汚泥之中、數鞭之而馬不能進、

重忠之門客大串次郎獲之、泰衡聞阿津賀志之城陷、乃棄

營逃走、幕府愈益進兵、次多賀國府聞泰衡保玉造郡、於

是八月十五日、又進兵於玉造、途而親筆書以賜之重忠、告

之以明日軍當次陣原、且此日從軍之士或擄掠村落、侵陵

神祠佛寺、而唯我先軍之士無或敢犯者、此固由重忠之

佐、公使行軍之紀律齋整也、是以書中或褒之、或誠之、

公為前軍之將、故遂取此書以云于後世、今藏在官八月二十五日、至玉造郡圍多加波

々城、泰衡既遁、城中、惟從臣咸束手來降、泰衡欲竄夷

行、至肥内郡贅柵、有其臣河田次郎者、遽變心圍泰衡、

遂弑之、獻首於幕府、幕府惡其不臣、乃斬河田次郎以

徇軍、既而十月二十四日、幕府歸自伐陸奥、公亦從還鎌

倉、乃賜若狹國守護職、後使異父弟兵衛尉惟宗忠季爲守

護代、忠季住居若狹、故稱之若狹島津、東鑑正治以來有

若狹兵衛尉者、即是人也、建久五年、公使本田次郎貞親、

按本田氏譜、貞親本田次郎親恒之子、幕府以公之建鎮國山感應寺幼、使貞親從、公來、隕三國之政、子孫今在府下、

臨濟宗五山派京師東福寺之末寺於山門院、建久中、幕府賜膝丸太刀滿仲以

來世世相傳所以重器、刀也、長二尺七寸許、筑後三池郡光世之作、亦赤銅波波幾以銀鍍十字、名小十文字、其謂小者、以比前所賜大十文字太刀、則其短也、於公、此以來世世相傳以爲重器、正治元年己未

正月十三日、鎌倉、右幕府薨、治世二十年、壽五十三、

太子賴家卿襲位、太子以壽永元年八月十二日生於鎌倉、母北條遠江守時政女從二位平政子、於是十八歲襲位、

平政子雜髮爲尼號如實、建仁三年、將軍賴家卿疾、於是

以關西三十八國地頭職禪弟千幡君、即實朝卿于時十歲以關東二十

八國地頭職及總守護職禪長子一幡君、于時六歲比企能員以

其一幡君之外祖父、不欲與關西地頭於千幡君、竊謀喪千

幡君及北條氏、乃使其女若狹局賴家卿之妾、即一幡君之母也、密請討北條

時政於幕府、且入議謀、如實禪尼窺聞此謀、乃告之時

政、時政輒給能員召之私室、伏兵殺之、能員之一族皆據

小御所、一幡君所居之宮名禪尼乃遣衆軍圍小御所、殺一幡君滅能

員之一族黨類、既而以公亦能員之出、乃連坐罷薩摩

大隅日向三國守護職、然以公在遼遠之國始不與能員之

謀、尋復賜三國守護職、將軍賴家卿聞一幡君及能員等

弑殺之事、大悲憤、與和田義盛・仁田四郎忠常密謀討北條

氏、後又密書機事、使堀藤次親家賜義盛、義盛恐其事之

不就、而殃之將及其身也、乃以書祝時政、時政遂殺親家

及忠常、將軍憂懼轉甚、乃雜髮見老、於是、實朝亦平政子之所生

立襲位、既而禪尼又終放 前將軍於伊豆修善寺、元久元年甲子、新將軍實朝與時政謀、使盜殺 前將軍於修善寺浴室之中、建永元年丙寅十月、將軍以 前將軍之子善哉君爲己之子、建曆元年辛未九月、善哉君薨髮而爲僧號公曉、三年癸未慶和田義盛爲亂、時 公在鎌倉、而與 幕府之諸將討義盛、與有功 將軍賞之賜甲斐波加利新莊、公曉知 故將軍之遇弑者、實 將軍及時政之所爲、而心忿恨之、承久元年己卯正月二十七日、將軍夜詣鶴岡八幡、及深更乃出宮、公曉伏石階之側、窺 將軍之過、輒拔劍擊 將軍及文章博士仲章殺之、持 將軍之首走出、左右咸不知其爲誰、又遂喪盜之所、或曰別當阿闍利向自言、報父之讎也、乃往圍攻公曉之雪下本坊敗之、旁索、而終不見公曉、衆皆忙然、而公曉却竄備中阿闍梨之家、阿闍梨爲羞膳、至于此時公曉猶手不放 將軍之首云、既而公曉使弥源太兵衛尉公曉之乳母子、謂兵衛尉三浦義村曰、將軍之官今已闕矣、吾則源家之嫡宗子也、卿其圖之、義村譏對曰、諾、君其來匿臣之家、徐謀之耳、臣先使兵迎君、乃使長尾定景往殺之塗、承久三年辛巳五月、賜信濃太田莊地頭職、六月近衛相公約 公以爲己之子、於是改惟宗姓而冒藤原姓、或曰、公之初生于住吉也、有近衛相公鞠育之恩、故建久七年八月、自鎌倉歸之日過京師謁相公、乃約以爲己

之子而賜藤原姓、二說不同、未知何是、然平田純正嘗以承久三年爲是也、且諱略亦曰、承久三年六月、近衛殿以公爲契子故、去惟宗姓而冒藤原姓也、以柄及牡丹爲器服之識文者亦實因之、七月又賜

越前國守護職、公後以二男忠綱、以爲越前守護代、公

三子、長即 道佛公也、次曰周防守忠綱、次曰掃部助忠直、忠綱在鎌倉、歷任賴經、賴朝、宗尊三將軍、号越前島津、忠綱生忠行、忠行生行景、行景生忠政、忠政無子、行景之弟忠幹繼忠政之後、忠幹生忠藤、忠藤生忠兼、忠兼生忠親、忠親亦無子、弟範忠繼其後、範忠生忠德、忠德生忠秀、忠秀生忠光、忠光生忠勝、忠勝生忠持、忠持生忠長、忠長以天文三年甲午八月二十六日戰死播磨朝日山、自此以來遂絕、其後二百有餘歲而至元文二年丁巳三月十八日有邦公下命、先是、永金一作榮金阿闍梨、

相地於滿家院厚地山、今郡山建立精舍、號平等王院、且

設三十六僧坊、立金剛之法幢、演秘密之乘教、其壯麗亦

罕比、丹後局一見之、又聞阿闍梨之法論而心深信之、以

爲吾百歲之後願葬於茲、且以阿闍梨爲導師、局乃以天年

終、於是挽輻車葬於厚地山、竟成其初志、建保中又建社、

安 故右幕府之神像、安局及阿闍梨之彫像於其左右、以

祇祭之號花尾權現、且鑄許多寶鏡、以藏之、以爲島津百

世應護之神、而後固封之今不得擅開內殿云、而今正統鑄

模寫神像及寶鏡、以備觀覽、故今載視左方、

(以下神像ナラビニ宝鏡ハ島津氏世祿正統系圖ニヨル)

御長一尺六寸

左



御長一尺五寸
御冠高サ三寸八分

中尊



御長一尺五寸

右



一

十一面

觀音

彫刻像



徑八寸八分

佛長五寸八分

座一寸

華海法印ノ八寸八分ト云七尊ノ一ツ

モ此ナリ、

薩州滿家院厚地山權現御正躰七鉢内

右志者、爲聖朝外朝日本大將軍家御願成就、殊者、爲當國守護所惟宗忠久并小野氏悉地成就、且爲當國惣地頭當院地頭壽命長息、且爲法界衆生同利益、如右、

建保六年大歲九月 日

永金敬白

(右懸仏銘文)

二

阿弥陀ノ

彫付



徑一尺五分

佛長七寸三分

座一寸二分

華海カ一尺五分

大藏臣僧榮金 大中臣眞

久トアルモ有ト云モ此ナ

リ、左アレントモ大藏臣ト見タルハ大勸進僧ノ誤ナリ、

薩州滿家院厚智山權現御正鉢七鉢内

右志者、爲聖朝外朝日本大將軍源朝臣御成就、爲兩家奉省預所當國守護所惟宗忠久悉地成就、且當院并濟使地頭壽命長息如件、

建保六年大歲 九月 日

勅進 大藏臣僧榮金

大中臣 眞久

(右懸公銘文)

三

阿弥陀

ホリツケ



徑七寸九分

佛長六寸三分

座一寸二分

薩州滿家院厚智山御正鉢七鉢内

右志者、爲正朝外朝御願成就、別爲當御莊領家預所御願圓滿、且爲當院并濟使壽命長息、造之如件、

建保六年九月 日

永金

(右懸公銘文)

薩州滿家院厚智山御正鉢七鉢内

右志者、爲正朝外朝御願成就、別爲當御莊領家預所御願圓滿、

建保六年九月 日

永金

(右懸公銘文)



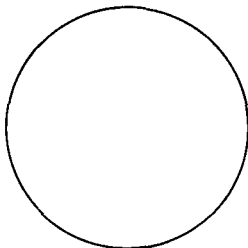
徑八寸

佛長五寸九分

座一寸三分

薩州滿家院厚地山御正鉢七鉢内

右志者、爲正朝外朝御願成就、別爲當御庄領家預所御願圓滿、

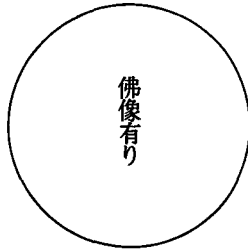


圓滿、且當院司大藏幸滿并紀氏、爲大藏宗頼并宗形氏息
災延命、且爲法界衆生平等利益、造之如右、

建保六年九月 日

勸進僧永金

(右懸仏銘文)



薩州滿家院厚智山御正躰七躰内

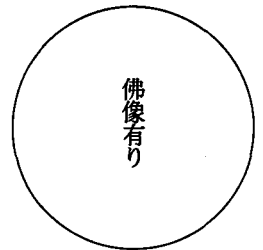
右志者、爲正朝外朝御願成就、別爲當御莊領家預所御願
圓滿、且當院司大藏幸滿并紀氏、爲大藏宗頼并宗形氏息
災延命、且爲法界衆生平等利益、造之如右、

建保六年九月 日

勸進僧永金

(右懸仏銘文、但シ前者ト同ジモノナラン)

千手



薩州滿家院厚智山權現御正躰七躰内

右志者、爲當院大藏幸滿并記氏(トカ)大藏宗頼并宗形氏、

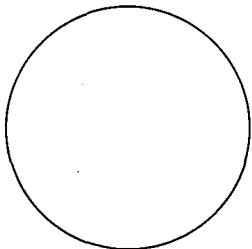
建保六年大藏
戊寅

大勸進僧榮金

大中臣 眞久

(右懸仏銘文)

千手



薩州滿家院厚智山權現御正躰七躰内

右志者、爲當院大藏幸滿并記氏大藏宗頼并宗形氏、

宝永五年四面ノ外
ニ今一面、薩滿家
院厚智山權現御正
躰七躰内トアル有
ト云モ、此ナルヘ
シ、

建保六年 大藏 戊寅 九月 日

大勸進僧榮金

大中臣 眞久

(右懸仏銘文、但シ前者ト同ジモノナラン)

左
阿弥陀



徑五寸八分
佛長三寸三分
座七分
観音左ニ掛之

中
観音

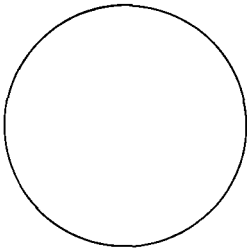


徑一尺
佛長七寸二分

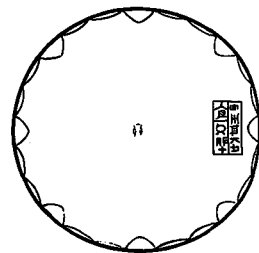
右
大日



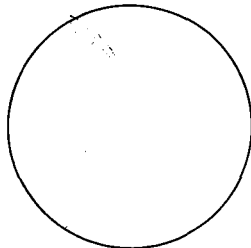
徑七寸
佛長二寸九分



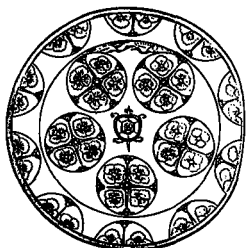
右裏



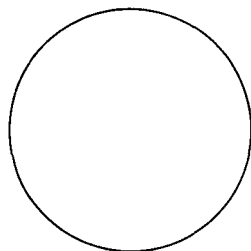
靈鏡



右裏



靈鏡



井上駿河藏 花尾大權現來由



右裏ニ有之、波平かきのき國平丸

此劍今無之、予貞享元年甲子冬極月十八日入院、翌年乙丑春參詣、初拜社内既無此劍、歸來問閑居照盈和尚、和尚曰、何時紛失乎不知云々、覺慧

嘉祿三年丁亥六月十八日、公薨於鎌倉、壽四十九、公本有脚氣疾、今復病赤痢云、號得佛道阿弥陀佛淨光明寺殿、先國史有言曰、公平居戰々慄々夙夜匪懈、乃文乃武乃左右之、唯恐辱父祖之德業、報公不二帥下以躬忠信敦厚庶民率服、

『正文在官庫』

讓渡

薩摩國地頭守護職事

左衛門尉惟宗忠義

伊作庄 かわのへの郡 指宿郡

この三ヶ所外へ、可被致沙汰也、

右、限永代、可致其沙汰之狀如件、

嘉祿三年六月十八日

(忠久)
豊後守(花押)

(殿紙)

〔此正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ〕

348

『全』『全』

信乃國太田庄内 惣政所

(水内郡)

神代郷自余二郷除之、
在判

右件所、左衛門尉忠義所讓渡也、不可有他妨之狀如件、

嘉祿三年六月十八日

349

〔雜抄〕

嘉祿三年丁亥六月十八日丑、島津豊後守從五位下惟宗忠

久卒、日來脚氣之上惱赤痢病云々、享年四十九、法名得

佛、號道阿弥陀佛淨光明寺殿、

350

〔忠時公御謄中〕

『写在官庫』

在御判

下 左衛門尉惟宗忠義〔代忠時公〕

可早領知信濃國太田庄内神代・津乃地頭職事、自余所者
除之畢、

右人、任亡父豊後守忠久朝臣讓狀、可安堵彼職之狀、所
仰如件、以下、

嘉祿三年十月十日

(附札)

〔此正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ〕

351

『全』

『正文全』

(藤原賴經)
(花押)

下 左衛門尉惟宗忠義

可早領知越前國守護職、嶋津庄内薩摩方地頭守護職并

十二嶋地頭職、
但除河辺郡指宿郡伊作庄定、此外泉庄、後家、
給御下文畢、後家一期後者、忠義可令傳領之、

信濃國太田庄内小嶋・神代・石村南・津乃已上四地頭
簡郷

職事、

右人、任亡父豊後守忠久朝臣讓狀、可安堵彼職之狀、所仰如件、以下、

嘉祿三年十月十日

淨光明寺大概由緒書抄写

一薩州鹿兒嶋松峰山無量壽院淨光明寺者、相州藤澤清淨光寺の直末也、開山を宣阿説誠和尚といふ、本鎌倉に住して一遍以前の道明衆也、嶋津氏の鼻祖豊後守忠久(同朋之)頼朝卿長庶子、是を崇敬すること厚し、文治二年丙午の秋、忠久封を薩隅日三州是を惣而嶋津之御庄といふに受て下國するの日、

宣阿も亦俱ニ來れり、因て一寺を建て淨光明寺と号し、是に居らしむ、既にして一遍上人、建治三年九月大隅國正八幡宮に參籠せらるの日、八幡大菩薩御殿の金扉を開き尊容を現、神詠を示し給ふ歌に曰、十詞に南無阿弥陀佛と唱ふれへ、なむあみたふに生れこそすれ、是十念相傳の一流也と云々、夫より上人修行して薩州に來る、此時忠久の嫡孫下野守久經國家を知る、上人の道徳殊勝なるを以、遂に一遍の門派と成る、弘安七年久經嚴考大隅守忠時十三回忌に當り、追孝の志を以

大に當寺を再建して舊制を増し、六時の行法般舟三昧を修せしめ、薩隅日三州の小本寺たる事、本寺世々の證文明白也、遊行上人回國の時へ數ヶ月淹留有而、盡夜六時禮讚の勤行賦華化益の道場也、忠久及び二代大隅守忠時・三代下野守久經・四代上總介忠宗・五代上總介貞久神祇を置て菩提所たり、此寺に住する者へ、世々本寺の免許に依て惣金襴の袈裟を着、且傘・半疊興を免さる、薩隅日へ元來嶋津氏傳領の國たり、故ニ古來よりの法式を以、今に至り淨光明寺末寺頭・組頭たる事、本寺數多の文獻炳焉也、淨光明寺由緒大概如件、

一淨光明寺

右、御元祖々五代迄之御牌所ニ而御座候、

忠久公 得佛道阿弥陀佛 御廉中法名不知 島山次郎重忠女

忠時公 道佛仁阿弥陀佛 御廉中法名不知 伊達入道念性女(妹之)

久經公 道忍義阿弥陀佛 御廉中法名不知 相馬小次郎左衛門尉胤綱女

忠宗公 道義仲阿弥陀佛 御廉中法名不知 三池全助入道道

知女

貞久公 道鑑道阿弥陀佛 御廉中法名不知 大友因幡守道徳

女

右五代御簾中様御牌者無御座候、

一一本云、右五代之御牌所ニ而、弘安七年當忠時公十三

年之忌景、久經公當寺御建立被成、五代之御牌御安置

有之候、御廟所ハ本立寺ニ而御座候、五代國夫人之御

牌無御座候、然處少將繼豊公御代、享保十二年十二月廿

一日、當住持寂翁依願、忠久公御夫人眞嶽院殿元光明一房

・忠時公御夫人得臺院殿忍西生一房・久經公御夫人淨温院

神一房相馬小次郎左・忠宗公御夫人理玄院殿慧照見一房・貞久

公御夫人梅林院殿法麗聞一房大友之御法名致追號、御牌御

安置被成、繼豊公御夫人瑞仙院殿松・前中將吉貴公御女

玉泉院殿澄玄御牌御安置被成候、
心光大童女

353 『水引執印氏文書』

薩摩國御家人鹿兒嶋小太郎康弘申御郡司職事、訴狀遣之、

如狀者、論人忠重・忠光等、承久合戰之時、爲京方云、

爲被札明實否、可令召進彼兩人也、明年四月以前、可參

着関東、若過其期者、就訴狀可有御成敗也者、依鎌倉殿

仰、執達如件、

嘉祿三年十二月廿四日

(奉時) 武藏守在御判

(時忍) 相模守在御判

豐後三郎左衛門尉殿
(忠時)
大隅前可入道殿

354 『島津國史』

道佛公

初名忠義 後改忠時 得佛公之子也 始稱三郎兵衛尉
歷左兵衛尉 左衛門尉 修理亮 任大隅守 法名道佛道
陀佛 阿弥

安貞二年戊子秋七月二十三日、幕府臨駿河前司義村田

村山莊、供奉後隊四十八人、公預焉、拋東

寬喜元年己丑、是年三月改元寬喜、自
二月以前猶是安貞三年、春三月五日改元、

拋大日
本史

二年庚寅、三年辛卯、凡二年事缺不書、

貞永元年壬辰、是年四月改元貞永、自
三月以前猶是寬喜四年、夏四月二日改元、

拋大日
本史、冬十二月四日、

後堀河天皇傳位於

四條天皇、同上

355 「忠時公御譜中」

『東鏡廿七卷』

安貞二年戊子七月廿三日、將軍家賴經渡御駿河前司義村

田村山莊、是爲遊覽田家秋興也、辰刻御出、供奉御後干水

野四十八騎之内、忠義有之、于時島津三郎左衛門尉

356
「全」

しまつの三郎さまもんたよしかくんこうにたまはりたる所とも、めされてさふらふらむ事、かへすくふひんにさふらふ、ことしとなり候てハ、あきたるところとも、おほろけにハみえ候ハす、おのつからさふらふもあさましく、せう所ともにて候つる也、これよりのちにも、おのつからあきたる所候ハ、かならずくたふへく候とそ、おほせ事候、この御ふミをおなし心に御らん候へし、

十一月十三日

「雜目」
判

(本文書ハ三一六の一号文書ト同文ナリ)

357
『野辺文書』

「口裏」
「あんでいのもんそ」

櫛間院

注進 安貞三年御檢注田島數目錄事

合

水田參佰捌拾柒町陸段貳丈

荒田五十二丁

常荒六丁七段加川成四反定

年荒四十五丁三段

見作田三百三十五丁六段二丈

損田九十三丁九段中

得田二百四十一丁七段一丈中

野稻島參段

右、田島數目錄、注進如件、

安貞三年二月 日 公文左近將監平在判

弁濟使僧

書生散位伴在判

地頭

御使兼留守前安藝守藤原朝臣在判

358
『肝付譜中』

寛喜元年己丑九月五日、幕府頼經執權北條武藏前司泰時下文六波羅、以右兵衛尉保久爲島津莊薩之泉莊弁濟使下可職、又罷池田平次師忠給黎院郡司、且收其所領上籠村及石村、使保久代爲郡司、併領知之、十月六日、修理權亮・掃部權助授書傳命云々、

359 『和泉氏文書』

「かまぐらのむさしのせん殿(し脱カ)の御とき」

下 右兵衛尉伴保久

可早領知嶋津庄薩摩方内泉庄弁濟使下司、給黎院郡司

職并上籠・石村兩村事、

右、任相傳、可爲彼職也、其中於給黎院郡司并上籠・石

村、停止池田平次師忠濫妨、保□□

360 『和泉氏文書』

「かんと(し脱カ)の御くたしふみの故ろくはら殿の御しきやう」

嶋津庄薩摩方内泉庄弁濟使、給黎院郡司職并上籠・石村

兩村事、任九月五日関東御下文之旨、右兵衛尉保久可令

領知之狀如件、

寛喜元年十月六日

修理權亮(時氏)平在御判

掃部權助平在御判

361 『臺明寺牒』

臺明寺牒

西光寺齋

來牒狀、被載欲被早任度々返牒狀、散不審、存兩山一

同儀、致穩便沙汰、見性法師雜言無實由陳詞問事、

牒、十二月十六日牒同日到來狀備、云々、子細具也、抑

見性法師申狀、先度返牒顯早、雖似運重(マツ)、未聞其實、其

上重牒狀云、爲沙汰於見性法師者、進宮之由返報早、縱

彼申狀爲實者、付其身可被行罪科云事、此条可然、衆徒

所望也、而雖被進社家件見性法師、不被召決證人之条、

彼法師實言欵、雖然不被行指罪科之間、鬱念弥深者也、

是、次依此事、貴山三十講演延引之条、兩山向背之由、

世間披露、不穩便云事、此条當山者、自以往創草、御願

勤修之御祈所也、爰彼三十講、奉爲 正朝(マツ)府國天長地久并

大將軍家(マツ)社家泰平、每年不關令動來之處、件講衆等身、

依被申付大無實、不遮之前、爭可勤行之哉登令延引許

也、適彼霧嶋寺社家進止也、被召決示一法師之日、何有

遁避哉、乞也、衙察狀而已、仍返牒如件、以牒、

寛喜元年十二月十七日

專當法師

大法師在判

大法師在判

大法師在判

362 『正文在權執印』

八幡新田宮所司神官等謹言

申請 起請文事

宮主大法師

右、起請文申請元者、執印故馬允存生之時、稱□沙

三昧僧在判

汰天、御公驗并調度文書等書留案文等、於者(ト)隨身(ト)上洛畢、

三昧僧

而指無詮下向之處、可被進宮□公驗等之由、所司神官

三昧僧

等雖觸申、寄事於左右、今不被進宮志矣、死去畢、仍付

三昧僧

後家令致沙汰之□、抑留件御公驗、且爲自由之沙汰之條、

執行貫首散位紀□

上神慮有□之事也、然者不被進宮御公驗并調度文書等之

修理行事平□

□、於故馬允之伴類者、所司神官等、令以不可用申□、

散位大中臣□

若件条虚言ヲ申候者、

御馬所檢校□

日本鎮守 八幡三所大菩薩、當國鎮守開門正一位所大明

阿多院田庄司□

神、惣普天率土六十餘州大小神祇冥道乃□、所司神官等

乃身、一々毛穴每可罷蒙之狀如件、

363 「財部延時氏文書」

寛喜二年三月七日

權執印大法師

平忠富讓与

座主兼政所大法師

平忠□相傳之所領薩摩郡内成枝名内水田□等事

殿上檢校大法師

合

殿上檢校大法師

大賀里

殿上檢校大法師

青木一□ 同南邊三反大官司作一反加之、

檢校大法師

小落見久□反 田美上新開二反在荒

檢校大法師

次郎作卅在荒 正明八反 須桃木六反

宮主大法師

柏木七反 中久田原六反 宗原七反

宮崎四反 曲田五反

平礼石里

木下一町七反阿弥陀堂寄進田四反、御前方二反除之、木下七反

奴馬□所々八反卅在荒反廿、御前方除之、

瓦田里

永田二反 竹下一反

羽嶋浦 小苗代四反

已上拾町

同成校名内村々島地

永野村一所四至東限坂口并牟多際 南限小山□并護道坂口 西限山際 北限田畔

久美野 □際限

牟木浦 栗栖山一所四至東限牟多際 南限尾上 北限田畔 西限小山并牟多

平礼石居園一所南限牟多 國領島一所

大平園一所東限田畔 北限田畔

右、件田島等者、平忠友先祖相傳之所領也、然於依爲子息、平忠富讓(渡力)度畢、但於水田者、矢藏河之南仁大山口橋上下五反・悪坂口二反放者、平次之所領无也、仍至于子々孫々、无他妨可令領掌之狀如件、

寛喜三年二月十九日

平忠友(花押)

嫡男平忠茂(花押)

僧湛西(花押)

364 「正文在長谷場氏」

覺成房俊實讓与居園一所并前田事

在南郷門木山

右、園并田、相副本證文讓与之畢、敢不可有異論狀如件、

寛喜參年九月廿日

僧智惠在判

365 『豪明寺文書』

(端裏書) 「山下」

僧永範謹辭

奉沽渡字山下田并倉原内壹段事

四至東限城峯 南限城中路 西限川良 北限川

右、件於經田者、雖相傳所領也、依有要用、直物限永年、相禪房所奉沽渡實也、但於万雜公事本役臨時雜役者、併本名留了、仍爲後日沙汰、證文狀如件、

寛喜參年十一月十七日

(文中前出花押二同シ) 僧(花押)

『執印家威文書』

鹿兒嶋中務丞康兼訴狀如此、郡司職事、爲對決、可被召

進矢上三郎盛澄之狀、依仰執達如件、

貞永元年閏九月八日

武藏守(奉時)在御判

相模守(時房)在御判

豐後三郎左衛門尉殿

(島津忠時)

康友ノ子
○康村

又康兼 鹿兒島太郎 中務允

鹿兒島郡司并辨濟使職 新田宮執印職 迎阿後夫

『權執印文書』

下 勢万所

可早以得田引募例立用職田事

右、於件立用職田者、任先例、令引募得田之、以有限恒

例佛神事之役、可致嚴重勤之狀如件、

貞永元年十二月廿日

康兼(欽) 執印中務丞在判

『國史』

天福元年癸巳、是年四月改元天福、自三月以前猶是貞永二年、夏四月十五日改元、

拋大日本史

文曆元年甲子、是年十一月改元文曆、自冬十一月五日改元、十月以前猶是天福二年、

拋大日本史

嘉禎元年乙未、是年九月改元嘉禎、自八月以前猶是文曆二年、秋九月十九日改元、

拋大日本史

二年丙申、三年丁酉、凡二年事缺不書、

曆仁元年戊戌、是年十一月改元曆仁、自冬十一月二十三日改元、十月以前猶是嘉禎四年、

元、拋大日本史

延應元年己亥、是年二月改元延應、正月猶是曆仁二年、春二月七日改元、

仁治元年庚子、是年七月改元仁治、自六月以前猶是延應二年、秋七月十六日改元、

拋大日本史

二年辛丑、事缺不書、

『臺明寺藏』

西光寺与貴山依各輪之間事、兩山之牒狀并返牒、前守護

所代中務丞書札并又代官右近將監書狀、衆頭之陳狀、慥

給候、以此之旨、可令閔東申狀如件、

貞永二年二月 日

守護所代左近將監(花押)

臺明寺大衆御中

『比志島氏家藏文書』

『比志島氏家藏文書』

薩摩國豊後三郎左衛門尉忠義領荒野事、爲地頭沙汰、開發常々荒野、滅斗代、可令弁勤年貢之由、所申請也、宜爲公平坎、可被申達本所之狀、依鎌倉殿仰、執達如件、

天福元年九月廿二日

(北条重時) 駿河守殿
(北条時盛) 掃部助殿

(奉時) 武藏守 在御判
(時房) 相模守 在御判

『水引執印文書』

薩摩國御家人中務丞康兼申鹿兒嶋郡司職事、矢上三郎盛澄請文令披露畢、而康兼重訴狀如此、盛澄遲參之条、何様事哉、康兼令參向之時、盛澄可參會也、今度若及遲怠者、就康兼訴狀、可有御成敗也者、依仰執達如件、

天福元年六月廿八日

(奉時) 武藏守 在御判
(時房) 相模守 在御判

豊後三郎左衛門尉殿

(島津忠時)

『臺明寺藏』

(端裏書) 『曾乃郡可殿曳文』

しけえたひきわたしたてまつるみやうてん参段か事、
か但

滿家院内比志嶋・西侯・城前田・上原園(但八郎入道屋敷也)、於此所々者、先日大御前被奉付候了、而今上總殿依有被仰旨、爲存公平、又河田村ヲハ上總殿可奉付給之由、智弘・實範・道房三人同心シテ、入道殿并女房兵衛太郎殿各奉向、及心程者、教訓可申候也、而彼人々背各之教訓、件河田村ヲ上總殿不奉付給者、於自今以後者、至此三人者、令兵衛太郎殿事ニモ入道殿事ニモ、雖何所領所職、敵人也、相向一口之問答、不可申候之狀如件、

天福元年十月二日

僧智弘(花押)
僧實範(花押)
紀道房(花押)

爲證人執筆大中臣資用(花押)
「をの／＼をや候ニよて、かわたのむらニをいてへ、
又かつさとのニまいらせ候了、ふちはら
よしすけ(花押)」

しあけのてん貳
石肆斗しろ也

ありつほのなきたさこ、さうてんのつくりなり、このせ
うぬしちのあないおしらぬ人なれへとて、わるくもふほ
うなる田にても候は、さうてんのつほをさして、いら
脱之なくとりかへられまいらせ候へし、又くし、さうやくに
おいては、ほんみやうニとよめおくところなり、そうた
う、なしものも、ほんみやうのやくとして、わきまへか
はり候へし、この田においては、りやうねんをかきて、
（マコ）なに事のわつらい、またくもてあるへからす候、みやや
うやう・こくはう・すこ所の御方、處々につけても、そ
のわつらい、またくあるへからす候、ましてこ・ひこの
すへにいたるまでも、もしさまたけおも申ものあらは、
かへりてとかに、ところよりおこなはれまいらせ候へし、
てんぶく二年三月十六日

しけえた(花押)

374

「正文在長谷場氏」

(端裏書)
「末吉名并門貫本文書案」

僧俊實謹

奉曳渡南郷内門貫山行善園壹所并前田事

副進本證文手継等

右、件園井田者、俊實之相傳領掌地也、而石根丸殿の女
房方の御息米肆石代仁、相副本證文等、限永年所奉曳渡
實也、仍爲後日、曳文狀如件、

天福貳年三月十八日

僧俊實在判

375

「御文庫一番箱他家文書中」

注進 薩摩國益山庄内上野原、爲同國住人別符郡司代

平氏致相論問、賜度々御教書案文目錄事、

合

- 一通 建保二年正月廿一日自故大夫(北条義時)殿益山太郎召符案
- 一通 同三年八月十七日同御教書案 可踏定堺之由事
- 一通 同年同月十八日守護所副文案 同堺事
- 一通 承久三年九月十三日益山太郎解狀 在裏領家下知 并庄官加署
- 一通 同年同月十五日同庄官勘狀案
- 一通 元仁元年九月廿二日守護代書狀案
- 一通 同二年三月廿七日同守護代下知案
- 一通 寛喜二年十月九日同氏女申給御教書案
- 一通 貞永元年三月三日守護所書狀案
- 一通 同年十二月十五日益山太郎給御教書案

一通 天福二年三月十六日氏女申給御教書案六波羅殿可遂問注由事

一通 同年五月廿日益山太郎給御教書案不可遇問注之由事

已上十二通

右、目錄如件、

天福二年五月廿七日

平在判

376 『調所氏恒用譜中』

天福二年甲午、前此建部親高佐汰進士以稅所職、訟于國守、

補調所政所等職、恒用乃使僧行遍陳世襲實、有以所請、

至是七月二日、安堵本職、肥後左衛門尉傳命、八月、國

守平宰相廳宣、復恒用調所政所兩職如故、九月三日、留

守所官人等承旨下文、奪親高職、以補恒用亦如之、

377 『全文書』

在御判

大隅國主神司恒用申調所書生職□□所職等事、去承久合

戰之時、依□□兵催促狀加判之咎、雖有其沙汰、就□□

所令安堵本職也、可令存知其旨狀如件、

天福二年七月二日

禪□□

肥後左衛門尉殿

378 『守平宰相殿御廳宣』

廳宣 留守所

可令早以藤原恒用如元沙汰調(所政所職事カ)

右、件職者、爲稅所職之者、往(古兼帶之所職也、而)建部親高

依訴申、雖被補(之、恒用代)阿闍梨行遍申狀并重代相傳(證文)

明白之上、親高稅所職又自(守護所被改補)云云、弥勿論、然

者、早停止親高(之、蓋妨如元)於恒用職者、任先例、可致沙

汰(之、所宜如件之)、在廳官人等宜承知、以宣、

天福二年八月(日之)

守

379 『大隅國守平宰相殿之御廳宣御施行恒用』

留守所下 主神司藤原恒(用カ)

可早任御廳宣旨、致沙汰調所(政所職事カ)

右、去八月日御廳宣九月三日(未)到、僞、早以藤原恒用、如

元致沙汰調所政(所職事)、右件職者、爲稅所職之者、往古

兼(番之所職也、而建部)親高依訴申、雖被補之、恒用代(阿闍梨カ)行

遍申狀并重代相傳證文道理(明白之上)、親高稅所職又自守

護所被改補(云云)、然者、早停止親高之濫妨、如元於(恒用職者)

先例、可致沙汰狀、所宜如件、在廳(官人宣承カ)知、以宣云

々者、於件兩職者、恒用□明鏡也、而親高橫號望之
(無謂カ)
 條、甚□、廳宣之狀嚴重也、早以恒用如元□(可致沙汰之状)
 如

天福二年九月□(三日月)

目代右衛門□

惣檢□

税所□

田所□

大判□

大判□

大判□

任用

權大□

權大□

目□

前掾

前□

前□

前□

前□

380

『小根占土池端氏文書』

將軍家政所下 氏佐汰進士親高五女
字地蔵

可令早領知大隅國祢寢院佐汰村内田柒段・蘭壹所事
(分脱カ)
 右、亡父親高未處之間、所被配分也者、可令領掌之狀、
 所仰如件、以下、

建長五年十二月廿八日

案主 清原 知家事 清原

令左衛門尉藤原

別當陸奥守平朝臣(花押)

相模守平朝臣(花押)

〔右有所驗乎親高事証故置于此、姑備考爾〕

381

『臺明寺藏』

〔(端裏書) おりはしたのせふもん〕

源篤家 奉沽渡オリハシ田柒段事

富限(マ) 東限野ヘタ 南限野岸
 西限溝井イワ 北限溝川

前□
 前□
 前□
 前□

右、件田者、篤家之先祖相傳所領也、雖然依有要用、限永季奉沽渡事實也、但壹段別ニ肆舛宛、御佃者付田畢、毎年□□於本役万雜公事者、留本名畢、依爲後日、沽券如件、

〔天〕
□福貳年十二月廿八日

源篤家(花押)

嫡子祐家(花押)

留臨時桑役畢、(額篤家花押ニ同ジ)(花押)

382 『臺明寺書』

假名重久謹辭

奉沽渡水田肆段事

在嘈野郡須加尾条之内字石風田肆段、但牛之所分内也、

四至 限東峯 限西谷河 限北峯 限南小太郎檢校横道

右、件水田者、篤明先祖相傳所領、經講勘合水田之内也、而依有要用直物、假名吉祥丸限永年、所沽渡進實也、但於社國兩方所當、本役万雜公事臨時果役本陳役等者、本名留畢、雖爲年來之講田、有限御佃米於一段天者、肆舛合壹斗陸升者付田畢、此外於万雜公事者、本名留畢、仍爲後日沙汰、沽券之狀如件、

文曆二年 歲次 正月十九日 次男牛在判 乙未 藤原篤明在判

383 『臺明寺文書』

〔端裏書〕
「中田のもんそなり」

假名万吉謹辭 沽渡奉水田伍段事

在曾野郡中田井之内字□柴段之内付西伍段定、付東式者上性 段(花押) 方奉畢 (治脱之)

四至 限東上性方田繩 限南大繩 限北定林方田繩 限西大溝

右、件水田者、万吉相傳所領、經講勘合水田也、但柒段内貳段者、上性方沽奉畢、而殘於伍段者、依有要用直物、龜子殿母仁、限永年、本券相副天、所沽渡奉實也、件田者、經講勘合也、但本役蒔段仁壹把付畢、其狀本券具也、 (一脱之) 仍後日沙汰、沽券之狀如件、

文曆二年二月二十三日 假名万吉(花押)

384 『臺明寺文書』

〔端裏書〕
「橋口三郎殿」

ふちはらのあつのふかたくふんのあさなきさこ六段内、 (一脱之) しり参段、しさいあるニよて、六へいたゆとのニ、 (曾野) 其の

郡司
くんしとのへうりわたしたてまつりたまひて候事、しち

なり、それおあつのふか田なれはとて、いらんさわりを
まうすまじき上如件、^(註)よてこにちのためニ、せうもんか
くのことし、

ふんりやく二年三月十六日

ふちはらのあつのふ(花押)

385

『公』

(端裏書)

「六平大夫活券」

うちのふつゝしんでしす

うりわたしたてまつるすいてん、そのこをりのうちあ

さなきたさこ六反内下三反事、

みきくたんすいてん、ようようのちきもつあるによて、

しやうせはうに、やうねんをかきて、うりはたしたてま

つるところしちなり、そたうくうしの事ハ、ほんせうも

んニみゑたり、よりにこ日ためニ、せうもんのしやう、

くたんの事し、

ふんりやく二年三月十七日

うちのふ(花押)

386

『豪明寺文書』

僧教弁謹辭

奉寄進集衆院地藏講祈免水田山下并藏原田伍段事

副進 活券壹通

右、件志者、僧教弁身受病惱、更不知爲方、然今任年來
之蓄念、依日比之存旨、偏爲慈父悲母并教弁往生極樂、

寄進水田於佛前、欲萌善苗於後世、適地藏菩薩者、惡趣
引道之教主也、因茲於没後者、爲大衆分之沙汰、令構作下
行、以有限所當米、可令宛加每月二十四日僧饍之狀如件、

文曆貳年六月 日

施主僧教弁(花押)

387

『公』

僧教弁謹辭

奉寄進集衆院阿弥陀佛、爲教弁忌日僧饍祈北迫下水田

參段事、内半事、

副進證文三通

通曾乃郡司殿與文
通橋口殿去文
通六平大夫活券

有郡司三郎殿活券一通

右、件志者、僧教弁自當山居住之時、偏所奉仰弥陀善逝、
現當二世之利益也、然則縱雖有數多之弟子分、致忌日報
恩之事、纔一代二代也、更不及永代者也、爰以奉施入水

田三段事者、爲大衆分之沙汰、令構作下行、以有限所當米、宛教弁之滅日、經營僧饑、被訪後世者、永代可不斷絶欵、仍奉寄進之狀如件、

文曆二年六月 日

施主僧教弁(花押)

388 『享有官庫』「忠時公御譜中」

仰給候事、こまかにうけ給候ぬ、さい京して御心さしのわたらせ給候し事ハ、いかてかをろかのき候へき、たし御殿人のらうせきして候し事ハ、をろかならす思ひまいらせ候、とてもちからなき事にて候也、申させ給候御をんの事ハ、かみよりも御さた候へきよし、おほせくたされて候し事にて候、(便宜)ひんぎの時ハ、申さたすへく候也、兼又、はたけやま殿(重忠)なんとにも、御ゆかり候へハ、いよ／＼をろかならすこそ思ひまいらせ候事にて候へ、なにしかハ御ふしん候へき、あなかしく、

〔文曆二年 乙未也〕 閏六月廿九日 在判

豊後修理亮殿 泰時

(花押)〔雜目纂判〕

『畠山重忠妻ハ、泰時父義時ノ妹ニテ姑ナリ、忠久公ノ御夫人ハ重忠

女ニテ、泰時トハ外兄弟也、忠時公ヨリ泰時ハ御母堂ノ内兄弟也、俗ニ云從弟連ト也

389 「越前畠津氏元祖忠綱譜中」

「正文在高岡衆指宿左近兵衛忠實」

可令早平重秀領知養父忠秀跡薩摩國揖宿郡ト司藤野字不見 同内九所大明神宮司秋富名田畠名主職等各半分事右、當郡地頭豊後四郎左衛門尉忠綱代官殺害忠秀以下親類所從等之間、如忠秀舍弟字小次郎忠成・同養子平次郎重秀本名二郎法訴申者、非主人忠綱下知者、爲代官身、爭致如然狼籍哉云々、而忠綱一切依不知子細、或召進下手人於六波羅、或斬首之旨披陳之處、如忠綱擬取同郡山河住人字綾三郎延元男申狀者、忠綱上取忠秀同親類等跡名田畠、宛行代官高四郎行重男之由承及云々、忠綱陳詞之趣、涉矯饒之間、被改補所職畢、爰忠成企參上、不訴申子細者、何今可及御沙汰哉、且爲忠秀爲奉公欵、仍可宛給其跡所職名田之由申之、重秀亦稱有養父忠秀讓狀、可惣領之旨、雖令申、子細不分明之上、忠成所申一向難被弃置欵者、件所職名田畠、重秀・忠成各半分令領知、任忠秀之例、可相從地頭所務之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

文曆二年八月廿八日

武藏守平(花押)
(泰時)

相模守平(花押)
(時房)

〔越前國為守護代居住于當國、故号越前島津者也〕

390 『指宿文書』

〔本文書ハ三八九号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔越前嶋津家忠綱譜中ニ在リ、正文在高岡土指宿十郎右衛門トミヘタリ、又一本ニハ指宿左近兵衛忠貞ニ在リ、トミヘタリ〕

391 『水引執印文書』

薩摩國鹿兒嶋郡可職事、論人矢上三郎盛澄参上之時、被

召決兩方、可有御成敗之狀、依仰執達如件、

文曆二年九月十六日

武藏守(泰時)在御判

相模守(時房)在御判

中務大夫殿
(執印康兼)

392 『臺明寺文書』

奉寄 臺明寺衆集院

故長壽房安覺忌日 九月四日 僧供新田事

在 贈啖郡重枝名内字堀切田六段

副進 本主沽券

右、件田者、故長壽房自重枝先名主囉啖郡司篤盛之手、買取之後、領掌无妨、仍相副本主之沽券、限永年所令寄進衆集院也、但於彼忌日僧供者、無缺忘可被勤仕也、仍

奉寄之狀如件、

嘉禎二年二月 日

瀧泉房立者玄榮(花押)
(堅)

〔此原書、旧御番所御文書一番箱中ニ一卷アリ〕

393 『在比志島氏』

(花押)

上總房榮尊申比志嶋・河田兩村農析之間事、件農析者、日吉社上分稻伍拾束十合、七云々、而去年爲大輔房淨尊沙汰、所劝取、於刈田跡農析者、任國例、壹段別参束、爲淨尊之沙汰、可令返与之狀如件、

嘉禎二年九月十五日

〔統日本紀天平十七年ニ諸國正税ノ事アリ〕

394 『臺明寺文書』

僧覺尋謹辭

奉寄進 臺明寺衆集院阿弥陀佛水田陸段事

在曾野郡菅生浦南陸段重枝内

四至 有沽券狀

右、寄進志者、偏爲往生極樂證大菩提也、抑覺尋自生年廿二歲正月一日、至春秋六十六歲八月廿八日、奉讀誦法花經二万二十部供養遂畢、又情思、殘命者不知今日、不知明日、有爲之財實留有何益、爰以爲弥陀如來供祈、覺尋命後、奉寄進水田陸段、欲預來迎引接之誓者也、然則衆徒送代代而雖贅、佛陀与田地、永存而施利益也、但無由緒之煩、每年可有御内檢候、仍勸子細、寄進如件、

嘉禎二年十一月 日 僧覺尋(花押)

〔在口裏〕
〔田臺明寺寄文〕

396 「越前島津氏忠綱譜中」

〔在東鑑三十二卷〕

嘉禎三年丁酉四月廿二日卯癸 將軍家經頼入御左京權大夫亭、御出之儀、殊被刷供奉人、清撰各行粧折花、五十人之内、忠綱在之、
于時豊後四郎左衛門尉、

396 「越前島津氏忠綱譜中」

〔在東鑑三十二卷〕

嘉禎四年戊戌二月廿二日戊戌 將軍家經頼御上洛之後、始御出先大相國御亭、次御參一條殿、供奉行列衛府八人布衣帶劍騎馬之内、忠綱在之、
于時豊後四郎左衛門尉忠綱、

397

〔引返ツラニ〕
「さつまごほり郷ひられいしのさすのけ上」

〔外題〕

〔天カ〕

「任申狀旨、方々違乱止ニハ合安堵、可致弥御祈禱丁寧狀如件、

惣地頭兼守護所僧(花押)」

薩摩國薩摩郡内平礼石寺座主忠兼解 申請 地頭兼守護所裁事
請被殊任先跡道理、御免除當寺領四至内万雜事并檢断

等子細狀、

副進 次第證文等

右、謹考舊記、當寺者是觀音殊勝之靈地、利益廣大砌也、爰以自往古以來、蒙庄國及地頭方之御免判、所致本家國吏地頭守護所御祈禱也、任先規、重申賜御一行、欲備將來之龜鏡矣、望請恩裁、賜御判、弥仰正理之貴、欲致万歲千秋之御祈禱、仍勸子細、言上如件、

嘉禎四年五月 日

座主忠兼上

「蒲生土山内氏文書也」

398

『臺明寺文書』

僧永兼謹言

進上臺明寺大衆御中證狀事

右、件舉狀元者、故智兼經田字白土壹段半、智兼故宗葉房仁讓与畢、自宗葉房永兼傳領、永兼又奉讓与理性房畢、然付彼一段半、智兼尊靈五月廿日忌日僧供加米壹斗、可寄勤之由云々、子細所分抄帳狀明白也、雖然、依无忌日温室析、同朋僉儀備、云温室、云僧供、共爲故尊靈也、須以彼田加米分壹斗、宛忌日温室析之由、同儀定既畢、如是割田地宛置忌日温室析事、限永代、爲不可有每年忌日温室退轉也、仍後代將來領主、宜隨此狀、不可有忌日温室闕如、若致懈怠之時、大衆殊爲被仰沙汰、舉狀證文如件、

嘉禎四年十二月十七日

僧永兼(花押)

同朋加判

僧俊宗(花押)

僧良俊(花押)

399

『正本在水引權執印』

八幡新田宮權大官司大藏種良解 申請 本所御裁事

陳申、爲本万得名主代成俊訴申種良領分水田可被返付

本名内子細狀、

副進 祖父師高(武光)入道沽券等案

右、件水田内松本八段者、自師高入道之手、有指由緒、被賣渡畢、但國方所當米并當名御加地子者、任檢注定田之旨、可令并勤之、至于自余万雜公事臨時課役本郡役者、爲本名之沙汰、可令勤贊(贊)之由、沽券在之、因茲兩方所當、任得田員數弁來事、于今无闕怠、然者、至于種良之身、有功無過者也、所知領掌之道、以令究濟地利之人、爲領主欵、何謂非分之領主哉、次殘四段小淺田二段西口二段者、師高之内持他領、以種良之領田四段、引贊神領田四段之由事、件根元者、牟木三郎丸名内種良所領、以大路田一町、引贊神領田伍段、於万雜公事者、如松本被停止畢、巨細具于沽券之狀也、以大田四段、令相博神領田四段之由訴申之条、虚誕無極事也、此条不可及御叙用者欵、所詮、師高入道活文之面、嫡子師永・舍弟本万得名主師綱加判畢、

「在口裏」
「真亦房舉狀」

400 「西藩野史忠時公」

忠久公の長子、母は畠山莊司重忠女、建仁貳年壬戌生る、初三郎兵衛尉忠義と稱す、左兵衛尉・左衛門尉・修理亮・

而何成俊作爲彼代官、不顧師高之書狀、不知師綱之判形、只以胸臆之狀、可被返付本名之由、可訴申哉、凡存知之企、今案之至、不可勝計者也、如此誇無道、動又成俊就彼水田、爲成俊依致違乱、令言上子細於當名弁濟使所之刻、任道理、度々成賜友行畢、雖然、成俊尚無承引、訴申國之日、尋明治却之實否、任證文之旨、可爲本名沙汰之由、國判明白也、又在廳与判炳焉也、猥非令押領、種良者以方々友行与判爲文書、成俊者構今案爲證據、是則非正義者哉、以大路田一丁自令相博御神領田五段以降、雖段歩不令不作、隨御方御加地子、更以無關念、至于本名成俊之領分者、以不作爲宗之間、兩方所當米、莫不令闕如、是既不能領主坎者、望請本所御裁、且任師高入道治却之旨、且依弁濟使所友行并國衙解題在廳等与判之實、^(外之)停止名主代成俊之非論、於公事者、可勤贊本名之由、欲蒙御下知矣、仍粗披陳言上如件、以解、

嘉禎四年十二月 日 大藏種良上

401 『正文在水引權執印』

寺家公文所下 五大院所司神官等 (花押)

大隅守に歷任す、承久之乱前出づ武藏守北條泰時に屬し、鎌倉を發し、五月二日、山州宇治に戦ふ、官軍川に臨み陣を列ね、繩を水底に張て、渡る事を得さらしむ、忠時公年二十歳、勇壯絶倫、駿馬に鞭うつて川を渡、刀を抜て繩を切、岸に登て敵を破る、終に四人を斬り三人を虜にす、此時忠時公か帶する太刀を綱切と名く、今猶存す、東軍勝に乘し京師に入り、上皇を隱岐國に遷す、忠時公將軍の命を奉して隱州に到て歸る、八月功を賞せられて、越前國生部庄久安保重留の地頭職に任す、按に忠久公今年七月越前國守護に任す、其中にして三庄を忠時公に賜歟、又伊賀國長田郷同年閏十月十五日、近江國興國寺庄貞応二年六月六日、地頭職に任し、嘉祿三年封を襲て、仁治三年十二月二日、越前國生部庄を轉し、和田郷地頭職に任す、寶治中元年十二月十六日、將軍頼嗣頼經の子諸侯二十二人をして、代るく京師に在て省中に宿直せしむ、忠時公も其撰に當る、文永九年壬申四月日薨す、享年七十一、道佛仁阿弥陀佛と諡す、墓を感應寺に、廟を本立寺に、神主を淨光明寺に立つ、

可早止權大官司友綱沙汰、如元令權執印永慶還補政所
職事、

右、當職者、本所進止也、而去年友綱依有申旨、雖被宛
補之、今又永慶備相傳證文、訴申之間、所被還補也者、

早任先度御下文、可令安堵狀、依長吏仰、下知如件、所
司神官等宜承知、以下、

延應元年五月 日 右衛門尉平(花押)

散位平(花押)

少別當法橋上人位

少別當法橋上人位(花押)

都維那法橋上人位(花押)

權上座法眼和尚位(花押)

402 『市來崎文書ノ内』

本正文事、

付本名田同奉讓

八幡新田宮御燈免田壹町伍反^二、相具次第證文、限永代、

字鶴王殿所讓与實也、但有限御燈役并宮方公事、准傍例、
可令勤仕欵、仍爲後代證文、所讓与如件、

延應元年十一月九日 沙弥行念在判

403 『比志島家』

滿家院西俣名内八世井浦田島間事

在四至 限東郡山塚 限南門木山
限北川并山邊 限西河

右、件田島、石谷阿闍梨曳渡元者、比丘尼菩薩房・同生

阿弥陀佛阿闍梨之出舉物、雖巨多罷負、不致數年其并兮、

依之、於彼所者、限永年、於所當米并万雜公事・臨時課

役等者、自本名主之許留處也、至于御加地子地頭米者、

令言上於子細、可被蒙御免欵、然而於彼水田者、早令奉

寄誓尾六所權現、令御節供勤仕、奉祈領家地頭御寶竿年

久、兼可被祈郡司名主悉地者也、然則於後代无他妨、以

阿闍梨隆慶、致方之御祈禱、可令領掌之狀如件、故以辭、

延應二年庚子八月廿二日

比丘尼生阿弥陀佛(花押)

紀正元在判

紀正恒在判

紀正友在判

紀正光在判

依讓狀明白、加署之、
惣地頭并守護所代僧在判

牒、件事子細、去九月廿八日送守護所牒狀明白也、仍爲

送守護所牒狀案

遠江守殿御下文案

副進

如子細狀、

間、當山依回安堵、有限聖朝府國御願御勤、擬及闕

衛門尉、違背御式目并遠江守殿御下文狀、被致沙汰

欲被早任牒送旨、且爲不審、且加御存知、爲守護代左

大隅國臺明寺牒

當國衙

『清水臺明寺文書』

月大念佛・二季彼岸不斷經論義講・每□十度講演三日、十五日、十八、廿四、將軍家并遠江守殿御祈禱、長日二帙轉讀大般

若經并觀音經三卷、此外細々動不遺記錄、然今爲守護御

代官、違御式目背御下文、數使令亂入山内、無誤衆徒等

被譴責之間、付使者雖申子細、不承引、以御文又牒狀雖

雖申、不被取上、動自身令登山、無左右可苛責之由、以

卿公西遊被申之時、衆徒等迷子細、溺悲淚、爰御願勤修

禪侶、企離山趣臥雲之路、耆年長老宿德、失東西、徘徊

悲歎之衢、夫佛法依王法弘之、王法依佛法持之、一山滅

亡無疑殆、誰人可勤仕御願哉、誠一天率土莫靡皇澤之恩

404 『水引執印氏文書』

薩摩國御家人麿嶋小太郎康弘申、御郡司職越訴事、申狀

具書如此、尋究子細、可被申沙汰候、謹言、

仁治元年七月三日

泰時在御判

攝津前司殿

比丘尼菩薩房(花押)

〔附卷〕 『大藏氏永平ノ二女、梅北某ノ妻、菩薩房妹也』

〔附卷〕 『比志島元祖上総法橋榮尊ノ母、父ハ滿家孫太郎大藏ノ永平娘也』

御覽進之、抑當山者、自本無緣孤獨之砌、青葉笛竹貢御

所也、但至貢御竹者、去建保六年五月廿六日、爲龍敗、

一竹不殘損失畢、雖經年序、更不出生之間、天福年中之

比、篠許竹一本出生、爲其根源、每年生加、既大小竹廿

本許見在也、帝德至貴在斯綺、尤以國解可被經官奏欽、

盖此寺者、爲禦鬼氣、於國衙丑寅之方、建置鎮護國家道

場之後、聖朝府國御祈禱、式日恒例佛神事、于今無退轉、

所謂年別勤六月會三十講、碩德靜雌雄、霜月會十講師、明

匠鮮弁花、加之、修正三ヶ日・二月常樂會・四月佛生會・

日吉祭・一座三問論義講・七月三ヶ日夜不斷供花勤・九

月大念佛・二季彼岸不斷經論義講・每□十度講演三日、十五日、十八、廿四、

卅・山王講、將軍家并遠江守殿御祈禱、長日二帙轉讀大般

若經并觀音經三卷、此外細々動不遺記錄、然今爲守護御

代官、違御式目背御下文、數使令亂入山内、無誤衆徒等

被譴責之間、付使者雖申子細、不承引、以御文又牒狀雖

雖申、不被取上、動自身令登山、無左右可苛責之由、以

卿公西遊被申之時、衆徒等迷子細、溺悲淚、爰御願勤修

禪侶、企離山趣臥雲之路、耆年長老宿德、失東西、徘徊

悲歎之衢、夫佛法依王法弘之、王法依佛法持之、一山滅

亡無疑殆、誰人可勤仕御願哉、誠一天率土莫靡皇澤之恩

恤、七道諸國奉仰關東之御威、違背旁御制、依被致理不盡沙汰、朝家鎮護御願之寺、大將軍家御祈之砌、成荒廢之地、事不可不申、尤垂衛察、爲後日、可候御斟酌欵、仍爲被加御存知、牒送狀如件、以解、

仁治元年十月三日

宮主清文法師

預 清源法師

專當應範法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

大法師

〔在口裏〕
〔臺明寺牒 當国衙〕

〔此原書ハ、旧御番所御文書ニ番箱中ニ一巻アリ〕

左衛門尉友成申、爲薩摩國阿多郡内北方地頭、以新儀功宛課役於池邊村、不糺返質物等由事、重折紙如此、之事就先度訴狀、止新儀濫妨、可糺返押取物等之由、去延應二年七月廿三日令下知早、而于今不事行云云、事實者、甚不穩便、早止當時違乱、糺返質物、有子細者、同時企参洛、可被遂對決也、仍執達如件、

仁治二年九月十日

越後守御判
(時憲)

相模守御判
(重時)

地頭殿

大隅國臺明寺守護所使入部事

右、件寺僧等、致 將軍家長日御祈禱之由、依令言上、被奉免守護所使入部於彼寺之天福御下知之狀云、謀叛・殺害・刃傷人・夜討・強盜之輩出來之時、大衆相共糺定犯否、實犯爲顯然之時者、可召渡其身於守護所、雖然、於不令同意之親類并住所者、不可有其煩、此外盜犯人等者、任先例、可致其沙汰云、而守護代(北本朝時)左衛門尉定重背御下知、去年令乱入數輩之使、致狼藉之由、寺僧等企参上、令言上之間、任天福御下知之旨、可成与下知狀之由、

所被仰下也、早止守護所使入部、任先御下知之旨、可致其沙汰、但於不同意之親類以下妻子田宅資財等者、可爲佛事用途物、此条且憑直主、道場之妙文、成等正覺之金言、每年二季彼岸讀誦法華經一百部、至于盡未來際、爲被訪法蓮後世菩提、御下知之上、殊致歸依、所奉免如件、守護代宜承知、敢勿違失矣、

仁治二年九月十一日

(肥後入道)
沙弥(花押)

在口裏
「肥後入道副下知狀」

『姬本文書云、正嘉元年十一月十三日、肥後藤内右衛門殿施行云々。』

忠時公 自仁治三年
至寶治二年

前
舊記雜錄 卷五

〔島津國史〕

〔仁治〕三年壬寅春正月九日、

四條天皇崩、二十日、

後嵯峨天皇立、拋大目二月二十二日、政所下文、以公爲

和泉國和田郷地頭職、代越前國生部莊地頭職、拋道佛公旧譜

公爲生部莊地頭職見上卷承久三年、

寬元元年癸卯、是年二月改元寬元、正月猶是仁治四年、春二月二十六日改元、

拋大目二年甲辰夏四月、幕府讓征夷大將軍於子賴嗣、

賴嗣年六歲、拋大目本史

〔島津氏文書〕

將軍家政所下 和泉國和田郷住人〔大鳥郡〕

補任地頭職事

前大隅守惟宗忠時〔足羽郡〕

右人、越前國生部莊之替、所宛給也者、爲彼職可令領知之狀、所仰如件、以下、

仁治三年二月廿二日

案主左近將曹菅野

知家事彈正忠清原在判

令左衛門少尉藤原在御判〔二階堂行綱〕

別當前武藏守平朝臣在御判〔泰時〕

前攝津守中原朝臣在御判〔前鳥〕

前陸奥守源朝臣在御判〔義氏〕

前美濃守藤原在御判〔親亮〕

前甲斐守大江朝臣在御判〔泰秀〕

武藏守平朝臣在御判〔朝直〕

散位藤原朝臣在御判〔義忠〕

〔在御辭中〕

〔正文在隈之城衆有馬休右衛門〕

薩摩國新田宮所司神官等申神王面破損下手人間事、八幡

檢校法印狀并訴狀給預候之間、尋子細於守護代清秀男候之處、陳狀如此候、仍令進上候、可有御披露候哉、恐惶謹言、

七月二日

前大隅守忠時請文

〔名乗裏ニ有之〕(花押)

〔此御書、前ノ仁治三年二月廿二日ノ次ニ御譜中載タリ〕

411 『蓋明寺文書』

僧亮範敬白

奉寄進 阿弥陀佛

綴納袈裟壹具

右志者、爲師匠父母二親我身後生菩提也、更非現世名利矣、抑袈裟者、是人天海之福田、解脱幢之標幟也、着用之者、蒙三寶之冥助、具則佛具第一之法衣也、爰以每年九月常行三昧念佛引聲之時、爲導師着用、年來所持之袈裟、所奉寄進阿弥陀佛也、仍奉寄之狀如件、

但不出山門、被用永代者、施主願望可足者歟、

仁治三年六月十九日

施主 敬白(花押)

412 『比志島氏文書』

こそその入道ハ、御ハうにそうくなりしものなれハ、たゞすミも、さやうにや候はんすらんと、おほせをかふり候、入道もいかてかそうくのきを存候へき、たとひ入道さやうに候というとも、おやくハおや、こハこにてこそ候はんすれ、そのこをりのちとう御たいくわんもあつかりまいらせ候なんニハ、いかてかかぎり候はんにてをと申候、ひんきの御ころさしことも申さて候へき、せんし候ところ、かけて御らん候て、まことにそうくのきを存候はんとき、めしかへされまいらせ候はんや、^(上カ)すき事にてこそ候はんすれ、かやうの事、まいりてこそ申へく候處、ミのいたはり候間、御文にて申へく候、

仁治三年

七月六日

中公在判

かつさのほけふの御房

413 『全』

おほせかふり候ことハ、くハしくうけ給はり候ぬ、さてハそのこほりのちとう御たいくわんを、つかふまつり候はんほとハ、いかてかたうくんに候はん御むまのことミ

をきて候、又こうに申さて候へき、又ひんぎ候へん時の御心さしのこと、御たいくわんもつかうまつるほとにて

ハ、その入道のつかうまつり候しほとのことハ、いかてかつかうまつらて候へき、恐々謹言、

七月十二日

中公在判

かつさのほけふの御房

414 『國分氏文書』

左衛門尉友成申、爲薩摩國阿多郡北方地頭、被押領池部

村由事、折紙副具如此、之事（トテ）新儀違乱出來之由、令訴訟

之旨、去延應二年仁治二年兩度雖相觸、不事行、剩押領

下地云云、事實者、甚不穩便、早可被停止新儀押妨也、

但有殊子細者、明春一月中令參洛、可被遂對決之狀如件、

仁治三年十一月十九日

（重時）相模守御判

佐部嶋刑部入道殿

415 『水引執印文書』

讓与 相傳所職事

在

薩摩國 八幡新田宮執印并五大院々主職事

阿多院田并宮男田蘭等

散在宮五大院蘭等

用作五町五段拾代内

甌町一丁一反卅

竹原町一町一反

原田一丁

左惠田五反

高坏六反

開門田一反卅

市比乃原田一丁

本免田拾伍町玖段内

山門三丁

牛屎一丁

牟木三郎丸一丁

勸同一丁

入來四丁

宮里二丁

光富一丁九段

久乃給二丁

新免拾陸町

代官分也、以之、加御殿、拜殿・中門、鳥居・御前橋等修理、但執印進止也。

牛屎・宮里募之、

右、件兩職者、迎阿弥陀佛相傳之職也、領掌年久、當知行無相違、而相具次第調度之本證文等、所讓与嫡男左衛門尉惟宗友成實也、更不可有違乱、但庶子等處分之外、

於田畠立用免田者、可令知行、次男等用作外水田者、自

執印所遂檢注、任得田可納所當、於斗代者、可守先例、

又如任祈大事出來之時者、隨分限可計宛、每年見參祈兼

定員數令支配畢、又大物船引之時、指入大人數之折者、

庶子分在家可催仕、兼又友成一期之後者、相具本證文、

可讓三男右兵衛尉康秀、其時者、康秀所帶者、可讓友成

子息、此儀至于子々孫々、相互不可有違乱、抑所請申御

年貢已下御公事、殊致丁寧、可盡忠、又恒例佛神事守代

々之礼奠、更不可有懈怠、又社務之間、不可行非儀、可

致憲法之沙汰、宮領知行子息等、各爲一身同心、可全本

所公役、仍所讓与如件、

寬元年八月十日

八幡新田宮執印兼五大院主迎阿弥陀佛(花押)

右衛門尉惟宗(花押)

右兵衛尉惟宗(花押)

一次男左兵衛尉師久分

市比乃浦但除原田一丁

薩摩郡御靈田

本免貳町六段内

一丁東郷
一丁時吉御靈田募
四反吉永 一反延時

新免拾丁 牛屎

江上園一曲

大跃田陸段有勤

四郎別當園壹所

原藤太園壹所

國符太郎園壹所

當時居園壹所

用作參丁

可勤事

一年ハ錢壹貫參百、一年ハ錢陸貫、市比乃栗柿隨出來

分限、可上公文所、正月一日所司神官神人等祈也、狩

月仁一度許自執印所可狩、三ヶ年一度船造之時、如瓦

板物、隨有可取、定使者、可爲公文所成敗、小弁濟使

同每年御米運上船具、任先例可取進、大物船引之時、

入大人數之時者、人夫可催渡、歲末節祈、任先例可

進、如任祈大事之時者、錢陸貫可訪、於園地利物野畠

麥孛桑者、一向付師久畢、用作參町外者、或請所、或

檢注、可爲公文所沙汰、委旨在讓狀、然而爲後代不

審、所注置也、

一三男右兵衛尉康秀分

五大院之内 限志多江西田者令散在、
又除城五郎園定

大中嶋水田園等

本免壹丁 宮里

新免伍丁 二丁宮里
三丁牛屎

用作貳丁陸段内

五大柳田八段

同橋口六反

同藏町四反

中嶋柳田八反

中古公文所

同前蘭壹所

川尻九郎當時居蘭壹所

長入道蘭一曲并作蘭

(裏書)
「執印惟宗康國」

藤次郎居蘭北作蘭

下部徳万古蘭壹所

源次郎別當居蘭

當時公文所北蘭壹所

可勤事

一年者錢壹貫參百、一年者錢陸貫、任祈之時者、錢陸貫可訪、大物船引之時者、人夫可催渡、三年一度船造之時者、(船)加治大工可被召仕、節祈可任先例、定使弁濟使者、可爲公文所成敗、每年御年貢運上之時、船具足

任例可取進、蘭地利物野島、一向付康秀畢、用作貳丁

六反之外、於水田者、請檢田可弁所當也、委旨在讓狀、

然而爲後代不審、重所注置也、

一惟宗一子分

本免壹丁 是枝

新免壹丁 牛屎

森尾蘭壹所

讚岐居蘭壹所

可勤事

本家見參料、一年者錢貳百、一年者錢伍百、可沙汰渡

公文所、任祈時者、(之脱之)伍百可沙汰、安居召物之時、隨分

守支配可沙汰、蘭地利物一向付了、

一惟宗二子分

用作五大川邊壹丁

本免壹丁 若吉

新免壹丁 宮里

五大城五郎蘭壹所

丹次太郎居蘭壹所

可勤事

本家見參料、一年者陸百、一年者壹貫伍百可沙汰渡、(公文所脱之)

任祈之時者、壹貫伍百可沙汰、安居召物園地利物一向付了、田所當同、

一惟宗三子分

五大修正分壹丁

本免壹丁 若吉

新免壹丁 宮里

藤次古園壹所

貝太園壹所

大内侍園壹所

鳥居前古公文所 但於中務次郎居住分者、可除之、又移他所之時、可令一圓

可勤事

本家見參祈、一年者陸百、一年者壹貫伍百、可沙汰渡公文所、任祈之時者、壹貫伍百可沙汰、安居召物可沙汰、於園并用作地利物者、一向付了、

以前讓狀如此、一事不可有違乱、六人子息等、各成一身同心之思、可全本所御公事、又於檢非違所職者、可爲執印之沙汰、又執印上洛之時者、隨分可有志、平均公事出來之時、守公文所御下知、可致其沙汰、住人等訴訟出來者、可蒙公文所裁許、又不用讓狀之旨、於令違背執印子息者、速可爲執印沙汰、雖面々讓狀、所詮、不審出來之

時、可見互讓狀、仍爲向後龜鏡、所讓与如件、

寬元元年八月十日

新田宮執印兼五大院主迎阿弥陀佛(花押)

416

『全文書』

(本文書ハ四一五号文書ト同文ニツキ省略ス)

417

『臺明寺文書』

大隅國臺明寺祈田

奉寄進 祈田坪之事

在曾野郡

堀切陸段 阿弥陀講田 須加尾陸段 三昧田

倉原參段 彼岸田 懸熊肆段 八講田

桑東郷

一条七里廿九一玖段地藏講田 竹原田六段燈油田

右、件祈田、本領主御家人重代相傳所領也、雖然、依有要用欵、他人沽却之間、大略其跡已無足、茲以自 將軍家^(被) 彼付賣買之田、可令勤行御家人所役之由、依被仰下、雖^(マ) 下令下知、件寺依爲閔東御祈禱所、如本奉寄進之狀如件、

寬元元年九月 日

書生僧在判

惣官大藏

押領使代僧在判

守護代左衛門尉在判
(定重)

『口裏ニ』
「護代定重當山折田御家人役奉免状案」

「此原書ハ、旧御番所御文書ニ番箱中ニ一卷アリ」

『末吉羽島氏文書』

418の1

字徳夜叉丸讓与

平忠茂先祖相傳所領本若松名田畠并成枝内羽島浦田畠

山野等事

合

本若松名主職、羽嶋浦 加成枝定 田畠山野海一曲 花牟

禮村四至 東限國領島東垣 南限田際 水崎園所四至 東限頭元

アリ 南限田際 西限 北限清水大道 之迫ノト 荒時田溝 北限田際、中嶋伊勢坊園一所、四至垣根限、

右、件田畠等者、忠茂之先祖相傳所領也、然依爲子息、

相副本若松坪付手継等、并羽嶋浦成枝代ノ手継、関東御

教書案文、花牟禮村調度文書等、限永年字徳夜叉丸所与

也、但於本驗御教書正文者、依爲連文、不能放讓、偏以

案文、可仰止也、上羽嶋成枝分本郡役云、臨時役云、本成

枝益富・久當除定、内六分一可勤仕也、於山野狩倉者、羽嶋云、郡

本云、本名并自余名ノ相共任讓狀之旨、無違乱、可令相

狩也、兼又先年之比上洛之剋、二男忠繼雖讓本若松、於

今者、又依讓串木野・若松名一曲忠繼、本若松海通所讓

渡徳夜叉丸也、然則先年之讓狀、不可立後日證驗、仍至

于子ノ孫々、無他妨、可令領知之狀如件、

寛元元年九月十三日

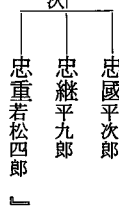
平忠茂在判
「忠持ノ子平次郎忠國ノ事也」
嫡子平忠國在判

爲證人

沙弥頼佛在判

418の2

『忠友 薩摩太郎 忠持 薩摩平次』



419

『引渡シ裏ニ』
「那答院別納名主七郎薩摩郡内平礼石寺事」

僧忠兼謹言 申進 守護所御裁事

欲被且依度ノ免除狀、且任申狀道理、平礼石寺内有限

御裁許子細事、

右、件元者、當寺是數百余歳之建立、利益無雙之副也觀音

卜居於此寺給後、自庄國兩方、寺内房舍并新田自被奉寄以來、今于全無違乱、又豊後守殿三ヶ國御奉行之時、度

(島津忠久)

々面々之御代官雖□□賜薩摩郡地頭職、於當寺者、仰悲

願貴事、全□□住侶之煩事、爰以止住僧徒者、偏堂舍

於修造、朝暮勤行而致朝家本家大將軍并守護所御方御祈

禱丁寧、罷過處、近來爲地頭所之沙汰、寺中土民等之中

有之、付任例申事者、不札所犯之實否、無左右妻子私財

併被搜所天、難住侶安堵間、旁御祈禱殆爲及闕如、然者

於自今以後者、自犯科出來者、札眞僞而、於爲實犯者、

任御式目狀、召取下手人之身於地頭所、妻子私財物者、

付住宅可令安堵之由、蒙御裁許、住侶招居、敢欲致御祈

禱矣、

一 平礼石寺者、忠兼法師仁罷成時、自親父忠直之手、

讓得之後、令堂舍修造、致有限朝夕勤、令旁御祈禱申外、

全無余煩、經年序之處、故忠友之時、件寺依爲郡司所近

隣、要用之時者、寺内之下人、時々雖雇仕、忠友依爲忠

兼之兄族、不制止申之處、自平次忠茂之時、背法寺内下

人於狩役并諸事召仕之間、不罷向者、制山野天申煩、加

之、寺中之菓子恣押取、或任法人□□取駄、剩加制止者、

返質所之条、道理豈可然哉、就中、富永成求北兩名、雖

420

爲公田、依爲各別之名、其土民一人毛無交仕事、平礼石

寺者、適旁御祈禱所也、不可及郡司進退者也、且可御賢

察尼哉、然者、此条任先規、可停止郡司之非分交之由、

預御裁許、而招居住侶、弥欲致旁御祈禱丁寧矣、以前条

々、粗大略言上如件、

寛元二年六月廿一日

僧忠兼上

〔是ハ蒲生土山之内某歳文書也〕

〔蒲生土山内氏文書〕

〔室治元年十一月廿二日比志島文書ニ此花押アリ、見合ヘシ〕

(花押)

別納七郎房忠兼申、近年爲 薩摩郡地頭代并本郡司忠友

之子孫、於當郡内平礼石寺之寺領、地頭方付檢断之沙汰、

張行非法、郡司方催符等之雜役、令煩寺中由事、訴狀

副具書遣之、如狀者、尤以不便、就中、彼止住之僧徒等、

相續長日晝夕之勤行、令申 公家武家之御祈云、所詮、

於地頭方者、任前々免除之狀、至于田畠以下苧桑等、不

可致其違乱、又犯過人出來候時者、尋輕重糺實否、可處

所當之罪科、觸事懸横難、不可煩寺家者、次於郡司方

者、狩役并菓子之押取、牛馬之野□□山野草木制止事、

忠兼被申之旨、非無其謂、子細見于訴狀、但云地頭方、

云郡司方、有別子細者、可被注申之由、所候也、仍執達如件、

寛元二年七月六日

沙弥願也

即郡地頭代紀二郎兵衛尉殿

421

『比志島家藏』

滿家院内比志嶋・西俣・河田・城前田・上原但八郎入道屋敷也

此所々任和与之儀、互無相違御知行候上者、別令賜安堵

御下文給候事、不及左右候、但公事配分之事者、如先例、

可有御沙汰候也、恐々謹言、

寛元二年

七月十五日

藤原義祐(花押)

上總比志島家元祖榮尊也法橋御房御返事

422

『國分寺文書』

『極楽寺殿御教書』

國分太郎左衛門尉、さうさして、ひつしをあひくして所

参向也、鏡宿よりはしめて、送夫参人、けたいなくさた

をいたすへし、関渡無煩可勘過之狀如件、

寛元二年七月廿五日

相模守御判(重時)

423

『鹿屋氏文書』

下 嶋津御庄鹿屋院

補任弁濟使職事

左馬允伴兼賢

右、件職者、重代相傳所職也、仍補任彼人所也、恒例臨

時御公事等、無懈怠可致沙汰狀如件、士民等宜承知、敢

無違失、以補、

寛元二年八月二日

預所僧(花押)

424

『高岡土河上氏文書』

在御判(頼嗣之)

下 薩摩國嶋津庄内市來院住人

可令早千与熊丸爲郡司職事(注)

右、任養祖母今年七月十九日讓狀、無子与熊子息者、禪師腹子、息之外、不可有他望由載之、

爲彼職、守先例、可被沙汰之狀、所仰如件、以下、

寛元二年八月十八日

市來氏元祖太郎政家ノ幼名也、政家ノ父国分友成、母ハ平氏禪師、

寛元二年七月十九日外祖母道阿弥陀佛傳政家ニ市來院郡司職、請命

于幕府、八月十八日遂令補之

425

『比志島氏藏文書』

上總法橋指申安堵御下文事、申狀并證文等如此候、相尋子細、可令申沙汰給候、謹言、

寛元二年十一月廿五日

經時在御判

(二階堂行巻)
出羽前司殿

426

『在比志島家』

薩摩國滿家院内比志嶋・西俣・河田・城前田・上原園、已上伍箇所事、雖不帶本御下文、准寛度々御教書案上、如守護人嶋津大隅前司書狀者、當知行無相違云々、此上不及吳儀欵者、依仰執達如件、

寛元二年十二月十一日

(經時)
武藏守在御判

上總(榮考)法橋御房

427

『島津國史』

(寛元)
三年乙巳、事缺不書、

四年丙午春正月二十九日、

後嵯峨天皇傳位於

後深草天皇、

拋大日本史秋七月十一日、故幕府歸京師、扈從

十五人、公預焉、拋東鑑

428

『入來院氏文書』

(口裏)
「おきふ」

三郎(明惠) 四郎(重經) 五郎(重實) 二郎三郎(重徳) 讓狀他筆也、(定元) (花押)

「定置」公事并付諸事子息等可存知子細狀

一 公事田數事

(美作英多郡)
河會郷本田數參拾壹町貳段配分也、

一 三郎分拾柒町拾河會 又大類分玖町

但、公事定田玖町拾 加打毛地利壹町三

一 四郎分貳丁參段 河會 大功田拾町肆段

但、公事定田四丁參段

一 五郎分肆町 河會

但、公事定田壹町陸段

一 二郎三郎分柒町五段 河會 北打毛地利六丁參

但、公事定田肆丁五段」

寶治元年丁未、是年二月改元宝治、正月猶是寛元五年、春二月十八日改元、大抛

日本 冬十二月二十九日、分京師宿衛、爲二十二番、每

番三月爲限、公在第三番、拋東鑑

二年戊申春正月三日、幕府初臨左親衛第、供奉五位二

十一人、公預焉、拋東鑑

巳上田數者五十六丁六段

但、自故入道殿所宛給公事田數拾玖丁四段也、依之色々公事等、以此田數、年來所勤來也、然者、檢充彼田數定之早、

『此裏ニ判アリ ツキメ』

一京都大番事、子息等四人か公事の田數分限ニしたかひて、つとむへし、

一鎌倉御神事の時、とねりをいたしたつる事、一向ニ三郎かいとなミにてあるへし、

一鎌倉より人夫をめさるゝ時、うちもちり・ふかや(深)・ふち(意)ころやしきたはたけのほとを、ハからひてあつへし、人夫あまたあたらん時ハ、女子のふんにもさたすへし、三度ニ二とハ、うちもちりよりまいらすへし、

一大ゆかの番ハ、五ニ二をハ三郎つとむへし、いま三をハ三人してつとむへし、おちあひの殿ハラよりあふ事也、

一大庭御まきをひかん時ハ、ふかや・ふち心のさいけニしたかひて、一人もらさず、百文のせにをはからひあてゝ、おちあひ・しもふかやの二百文のせに(思)くして、

三百文にて人夫のいとまをハうけとむるなり、そのむねを存すへし、

一五所官御まつりの時、もしハ御(修理)すりのあらん時ハ、せんれいをたつねて、ほとにしたかひて、そのやくをつとむへし、たいかんすへからず、

一かま(屋地)くらのやちハ、三郎ニとらす、たゞし、ゐ(形)こんながらんをとゞにハ、すぐせさすへし、他人をハやとせとも、をとゞにハかさぬ事、多くミるところ也、をやのめいをそむく事也、きひしくせいしせハ、上ニ申すへし、

一下人らのあひたの事、かねて申つけた、又せけむのくそく、せうくあらんをハ、こけあまニ申あハせて、そのハからひにしたかうへし、

一女子ニゆつるさいけ田島ハ、件女子はうニすきたるふたうあらん時ハ、子息よりあひて、この事ハ一定かよくくたつねて、もし一定ならハ、件やしきを、上まで申さすとん、おしとりて子息等はいふんしてしるへし、件女子のこなんとにとらす事あるへからず、

一子息等中ニいかなる事ありとん、よるましき人のもとへより、はちをかへりミすふるまう事あらハ、のこり

の兄弟同心ニなりて、件やしきをハ、上まで申さすと
ん、はいふんしてしるへし、

一をやのためにほうこうありて、心さしあらんものを、

おや死去之のち、いつしかとかをいゝつて、さんく

とあたる事、ゆめくあるましき事也、

一をやのために佛事するよしいゝて、そのようといれう

ニ、とかなからん人をせめてものをとりて、佛事する

事あるへからず、くときニならぬ事也、

一子息・同まこらか中ニ、やしきなんとを(博奕)はくやうニも

うちいれて、しまと事(價)あらハ、おのくよりあひて、

一とハひきたすけ、いまよりのちにハさる事候ましと、

きしやうをかゝせてをくへし、なほその心ありてくる

う事あらハ、そのやしきをハ、をやの申たる事なれハ

とて、をのくわけてしるへし、

右、このうへにハ、さのミ申へきやうなし、この状をハ、

上下万人ひか事とハ候ましき也、一事といふとん、ゆめ

くたかふへからず、あなかしこ、

寛元三年乙丑五月十一日

僧(定心)
(花押)

寺家公文所下 新田宮所司神官等

可早停止在國司友光濫訴、權執印僧永慶負所出舉由事、

右、出舉事、友光代官大前道定与永慶令對決之處、兩方

雖似有子細、所詮、永慶所進久安二年五月八日道助所出

之丹勘狀、加彼年利分定五十余石、方々又其判形無不審

之由、道令承伏早、如重所進同三年二月十七日勝還解狀

者、時吉(定脱)道助名田内、權執印免分拾捌町六段所當、依不

致其弁、可便補勢万(假名)勝通負物未進代之由云々、依之可便

補之旨、當官執印成与外題畢、又勝還所從五人事、且糺

返、且可便補之由、同成外題畢、凡件負物久安年中以來

及百餘歲早、永慶所申、旁以非無其謂欵、然則可令停止

友光濫訴之狀、依長吏仰、下知如件、

寛元三年八月五日

左衛門尉平判

前下總守平朝臣判

少別當大深坊判

法眼和尚位判

430 『比志島文書』

薩摩國滿家院内比志嶋・西俣・河田・城前田・上原園、

以上伍ヶ所事、去年十二月十一日関東御教書披見畢、仍

執達如件、

寛元三年十二月廿三日

(重時)
相模守在御判

上總(采時)法橋御房

431 『串木野頂峯院文書』

惣地頭所下 先達延慶所

奉免冠嶽權現御寶前

薩摩郡内所之事

一所 成永名ノ内セリか野壹曲

一所 太郎丸名内那良原壹曲

一所 本若松名内加治妻迫壹曲

一所 富永名内川骨山常荒壹曲

右、件所々者、或依本願主奉寄之狀、或任故惣地頭之免判之旨、所令奉免也、住僧等宜致式日之勤、可奉祈請天長地久由之狀如件、以下、

寛元四年二月八日

惣地頭兼郷地頭左衛門尉(花押)

432 『入来院氏文書』

(端裏書)
「ぢやうしんよりのゆつり状あとの御下知」
(ん脱カ)

「一於祖父打(毛カ) 在家田島等者、于一向讓重經畢、

寛治三年正月十日

在判」

讓与 屋敷并證文等事

四郎重經所

一所 相模國吉田上庄内寺尾村

堺 (示) 東限原中新勝土堺小紀太上路同堺又田岸堺
南限古堺路 西限佃大道 北限弘成前堤通

一所 伊勢國箕田大功田

(河曲郡) 但、此所仁、指無堺出作田也、
此内除乙御前給田壹町早

一所 美作國河會郷十町村河北

堺 (美多郡) 東限自練金山右河流 南限同河流
西限白箸峯中安大石瀬 北限江見堺

一 公事定田肆町參段

右、所々、任先例致沙汰、可令知行之狀如件、

寛元四年三月廿九日

(定心)
僧在判

433 『國分寺文書』

「極樂寺殿御教書」

千日薬師佛御供養用途内銭參百文、可被沙汰進、自関東所被仰下候也、仍執達如件、

寛元四年五月廿七日

(重時)
相模守御判

『末吉羽島氏文書』、『六波羅下知狀也』

國分左衛門尉殿

434

「忠時公御譜中」

「在東鑑三十七卷」

寬元四年丙午七月十一日卯丁、入道大納言家經御歸洛、路

次計御供十五騎之中、忠時有之、于時大隅守忠時

435

「國分寺文書」

薩摩國國分寺沙汰人左衛門尉友成申、爲阿多郡北方地頭
鯨島刑部入道、被濫妨池部村田島由事、折紙副具書遣之、

此事就問注申詞記、寬元二年十二月廿五日被成闕東御下
旬地早、而如令訴狀者、彼刑部入道捧押書、依令訴申於宰

府、可加覆問之由、雖賜御教書、未遂其節之處、妨勸農、
致種々非法云々者、遂覆問之後、無改沙汰之以前者、難

破先御下知狀、然者守寬元二年御成敗狀、可脫之停止當時濫妨
之由、可令相觸于北方地頭之狀如件、

寬元四年九月五日 (重時) 相模守御判

守護代

437

「權執印文書」(延時文書ノ誤カ)

薩摩國薩摩郡々司職成枝名内田員數載、山野本若松名内

水田貳町等事

右、任母伴氏嘉祿四年正月十五日讓狀并父平忠友寬喜三

年二月十九日貳通讓狀、當知行無相違云々者、不及子細、

守先例、可被致沙汰之狀、依鎌倉殿仰、執達如件、

薩摩國薩摩郡内本若松名主職除湛西以下親類等分、并羽嶋浦一曲

除湛、花牟禮村中嶋園壹所・杏崎園壹所・名田貳町

參拾代・屋敷壹所事、

右、件所々、任亡父忠茂寬元二年九月廿三日并母堂惟宗

氏讓狀、去年六月一日、當知行云々、其上者、不可及子細者、依

鎌倉殿仰、執達如件、

寬元四年十月廿九日

(時朝) 左近將監御判

薩摩夜叉殿

「此狀爲忠兼申口、資家自筆之由、承伏訖、

〔紙接目ノ裏判〕 (花押)

元亨三年十月三日

沙弥春舜(花押)

左衛門尉久義(花押)

於正文者、依爲連券、封案文裏、所副渡也、」

寛元四年十二月十一日

(時應)
左近將監(花押)

「忠實也、忠友ノ慮子ナルヘシ」
薩摩平三殿

438 「在東鑑三十八卷」

寛元五年丁未正月一日卯

堀飯役御行騰、于時大隅前司、
○張紙云、大隅

前可重隆歟、
不審可有再考、

439 「正文在比志島氏」

比丘尼菩薩房謹辭

讓渡嫡子上總法橋榮尊、薩摩國滿家院内比志嶋・河田

・西侯・城前田・上原蘭、已上五箇所名主職事、

右、件五箇所名主職者、任相傳、菩薩房當知行也、其子

細兵衛太郎義佐(藤原)之契狀明白哉、仍爲嫡子法橋榮尊之沙汰、

捧調度文書、賜関東御教書・同六波羅殿御施行者也、於

于今者、讓与彼五箇所之名主職田島等於榮尊畢、永代無

相違、可令知行之狀如件、

寛元五年三月十一日 即宝治元年也 菩薩房(花押)

440 「在東鑑三十八卷」

寶治元年丁未六月五日、三浦若狹前司泰村企叛逆及合戦、

雖然、不日令敗北、參籠于右大將家法華堂、一族餘黨五百餘人既自殺畢、同十四日未、張本等之後家并嬰兒等、悉以被尋出之、四郎式部大夫家村後家者、嶋津大隅前司忠時女子也、有三人嬰兒、是等皆所令落飜也、最可悲傷事也云々、

441 「比志嶋氏文書」

(滿家書)
「大隅殿へ進書状案」

滿家院内榮尊知行名田等に付て、関東の御教書を申給候、事はカ惣領主兵衛太郎若ハ末葉ニいたり候ても、自然候

不思儀出カ來て候はん時、其咎ニひきまとはされ候はし刻

ために申給候ところ也、且當院没收の地と候しきさみ、御

得分米五十石、惣領ニ打はふきてまいらせ候し、其内配

分の名々に隨てまいらせ候事、いまに無對捍候、而没收

のとるを、別御教書を申給へ、地頭・守護をひきはな

ちまいらせて、別納ニ申たてんするかのよし、御とかめ

をかふり候事、尤其謂候之間、不然之由の起請文を書進

候ところ也、か様に御教書を給て候へハとて、しかのこ

ときの御召物をもまいらせ候はすして、御方を忽緒しま

いらせ候事あるましく候、すゑ、にいたり候ても、或

別納ニ申なし、或ハきんたちの御よにも忽緒しまいらせ候事、候ましく候、若此条偽申候は、日本鎮守八幡大菩薩 くまのゝ権現の御爵を、榮尊可罷蒙候之狀如件、

寶治元年六月廿二日

法橋榮尊

442 『公』『同案ト見ヘタリ』

滿家院内榮尊知行の名田〔等カ〕ニ付天、関東〔の〕御教書を申給候事ハ、惣領主兵衛太郎〔若カ〕は末葉にいたり候ても、自然の不思議出來て候はむ時、そのとかにひきままとハされ候はしのために申給へり候ところ也、かつハ當院もつすのちと候しきさミ、御とくふんまい五十石、惣領ニうちハふきてまいらせ候し、その内の配分名々に隨テまいらせ候事、今にたいかんなく候、しかるをいまもつすのころを、別の御教書を申給はるハ、ちとう・守護をひきはなちまいらせて、別納に申たてんするかのよし、御とかめをかふり候事、尤その謂候之間、不然候よしの起請文を書進候者也、か様に御教書を給へり候へハとて、しかのこときの御召物をもまいらせ候ハすして、御方を忽緒しまいらせ候事あるましく候、すゑ／＼にいたり候ても、

或ハ別納ニ申なし、或ハきんたちの御よにも忽緒しまいらせ候ましく候、もしこのてういつはり申候ハ、にほんのちんすハちはん大ほさつ くまのゝこんげんの御ちを、〔榮尊〕みやうそんか身にまかりかふり候へき狀如件、

寶治元年六月廿三日

法橋榮尊在判

443 『入來院氏文書』

〔繪裏書〕
「大目とも」

たて申きしやうもんの事

右、件の元ハ、いりきのゐんのちとう御とくふんの中ニ、すいてん・はくち・おしろ〔字代〕・くわしろ・かりおかしのなかに、いちふん十たいにいたるまで、ちとう殿の御ために、へん〔偏題〕はいつはりをも申、おやけわたくし、たいしせうしにいたるまで、へんはおもし候ひ、御ためにうしろつたなくも候ひ、又かやうに給はりて候うヘニ、ちとう殿おはなれまいらせて、かみにしさいお申候ものならば、かのたうのへらをめされ候へし、もしこの申しやういつはりおも申候物ならば、にほんのちんすはつはん大ほさつ、ことにハ、いつ・ハこね・みしま大ミやうしん、そうしてハ六十よしふのしんきミやうたうの御はつお、

のふとし・のふたゝ・のふすけまかりかふり候へし、

寶治元年八月五日

伴信資(花押)

伴信忠(花押)

大目伴信俊(花押)

444 『比志嶋氏文書』

「三間具書」通

薩摩國滿家院内比志嶋・河田・西俣・城前田・上原園、

已上五ヶ所名主職事、任去三月十一日比丘尼菩薩之讓狀、

法橋榮尊可爲彼職之狀如件、

寶治元年八月十一日

前大隅守藤原在判

445

『比志嶋氏文書』

〔外題〕 所申之堀内以下園々万雜公事地利物并竿失田事、

先下知之狀等明白也、更不可有相違之狀如件、

(忠時) (花押)

法橋榮尊謹言上

欲且依年來免行實、且任先御下知等旨、賜重御外題、

河田・堀内・中原・上原・城園・比志嶋・西俣名主

園、同竿失田等事、

副進 彼御下知狀三通在惣地頭御代官故大輔房施行

右、件堀内已下園等、万雜公事地利物、任先例、蒙御免

事、所令進上之御下知狀等明白也、而地頭代去年所申給

条々御下知之間亡、不申分加様之色目之故、若被掠事モ

候ハム故ト存候天、爲御不審、捧件御下知之狀、爲賜重

御外題、恐々言上如件、

寶治元年九月 日

法橋榮尊

446

『水引執印文書』

〔在彼例付代官畢、地頭給田參町參段也、有御不審者、

宣澄親類并宣澄舅平權守忠景子孫多之、可被尋問欵、

康和紛失狀・建久圖田帳事、依爲往昔、不知及之、宣

澄之時結解狀事、當國之習目代相交之所者、稱公領、

不相交之所者、稱不輪領、就彼狀、本地頭何不致沙汰

哉、國分寺御下知事、依爲非勘、所訴申也云々、永慶

等申云、西迎爲行願代官之由虚言也、西迎請作公田之

時、行願召仕之許也、社家代々任符進之云々、行願申

云、西迎爲行願代官否事、地頭給田有無事、可被尋問

國云々者、如社家所進康和立券紛失狀・宣澄治承四年

結解狀・建久八年惣圖帳・年々取帳目錄者、爲社家之

進止、地頭不相交之由所見也、如行願所帶御下文以下狀者、不令領知神領狀、而行願任自由押領地本之条、難遁無道之科矣、

一年貢事

右、如御前檢校生西申者、一向爲社家之進止、遂檢注、令收納之處、行願去年始企濫妨、行檢注、納取所當之間、本所年貢闕如、恒例神事退轉、去々年者、百廿余石徵納之處、去年者弁五十余石之条、無謂云々、如行願申者、每年自官方遂檢注、收納所當之處、寄事於左右、爲致煩、依不遂其節、爲全年貢、郡司代吉行遂檢注、收納所當、下行梶取畢、百廿余石事、滿作之時者不知之、去年分五十九石余也、依賃之高下、有進米之相違云々、前々自社家遂檢注、令收納之處、行願去年始行檢注、遂收納、減失年貢之条、承伏已畢、難遁其科矣、

一社家政所敷地并宮園白学・桑・藍事

右、如座主觀宗申者、行願背先例、押取彼色々物畢、可被糺返云々、如行願申者、社家政所事、無先例、以執印安貞二年下知狀備證文事、新儀之条顯然也、宮園白学・桑・藍者、自本取畢云々者、彼敷地等社家進止之

由、見先段、然者子細同前矣、

一神王面事

右、如生西申者、彼面者、往古之靈物大菩薩之御鉢也、寬元四年八月爲明所當之濟否、罷向神領之處、奪取一神王面、奉置百姓下平太之許、打破二王面畢、承久之比、依正八幡宮領帖佐鄉事、御家人良西奪取彼宮王面之間、關東有御沙汰之上、公家被行仗議之處、所奪取之罪、當大辟之由、議奏畢云々、如行願申者、神王面何物哉、不知名字、若王舞面形狀、大菩薩御鉢之由、有何所見哉、不及破損、無奪取之儀、奉置下平太許之由事、不知之、神人寄事於左右、打鼓合聲、響郡内之間、不知手足之所措、若打落狀云々、打破一神王面事、以問注奉行（太巴）人康連・基氏等、被實檢之處、無異儀狀、一神王面者、奉置百姓下平太許之由、生西令申之處、不知之旨、行願陳詞、非無矯飾狀、行願或押領不輪神領地本、或遂自由檢注、令減失年貢之間、狼籍事、雖論申、不足信用、然者難遁罪科矣、

一燒拂社家政所事

右、如權（太巴）太官司末綱申者、寬元三年十二月廿八日行願差遣子息三郎家用・郡司代吉行・四郎丸、爲燒政所、

雖令放火傍在家、無風難之間、政所者令殘之處、其後行願加下知、令燒畢云々、如行願申者、燒拂政所由事、極無實也、自本無政所、安貞二年執印下知狀事、新儀也云々者、不燒杜家政所之由、行願雖論申、自余条、行願所行、旁爲無道之間、放火之条、無所遁坎、

(以上原本ニ欠ク、原本ニヨリ補フ)

一 打破神人福万法師頭、折宗清指、搦

(友安・末光等事)

右、如宗清并福万法師申者、行願刈取神領田之間、爲(爲)子細、罷向彼所之處、郡司太郎景吉・越後房・二郎大夫以下遣數多人勢之間、福万者以杖被打破頭也、

宗清者被折中指畢、友安・末光者、被付繩畢云々、

如行願申者、打破頭、折指、付繩由事、極無實也、且

先年國分寺神人令付小門逃出、訴申事由間、給

御教書畢、交名注文如此、(原書)越後房・次郎大夫罷

向之由申之、然者隨仰可召進也、可有尋坎云々者、

打破神人福万頭、折宗清指、搦友安・末光等論申之、

可被召對交名輩之由、行願雖令申、被實檢之(勉)、其疵

見在之間、爲勿論坎、然者行願旁難遁其科矣、

一 被連取西迎稻由事

右、如行願申者、西迎請作郡領田之處、所當未進五十

余(石之)爲明子細、立點札於西迎稻畢、而神人藤平太并

定使發神取畢云々、如末繩申者、田所二郎吉忠(西迎)

耕作宮領之處、收稻爲弁所當、依刈置宮園運取

畢、有未進者、可被責坎云々者、被改易行願所帶之

上、不及沙汰焉、

一 兩方惡口事

右、如行願訴狀者、行願還俗之身、不可參侍所之由、

師久令申(事)、可被糺明也云々、如師久陳狀者、師久祖

父爲嶋津豊後前可忠久小舍童之由、令申畢、尤可被糺

也、如行願甥二郎左衛門尉(申書)、行願還俗之由依申之、

申子細畢云々者、彼此申狀爲枝葉之間、非沙汰之限矣、

以前条々、子細如斯、行願所行旁難遁罪科之間、於阿多

郡北方行願知行分地頭職者、被改補他人畢、至下手之輩

者、召上京都、可被斷罪之由、令下知六波羅畢者、依鎌

倉殿仰、下知如件、

寶治元年十月廿五日

(時顯)左近將監平朝臣在御判

(重時)相模守平朝臣在御判

〔端裏書〕
〔關東御教書案〕

薩摩國新田宮所司神官等申、阿多郡北方地頭鮫嶋刑部丞家高法師條々所行、難遁罪科之間、被改補彼地頭職了、下手人在交名者、早召上京都、申入冷泉殿、宜被斷罪者、注文依仰執達如件、

寶治元年十月廿五日

〔長時〕
相模左近大夫殿

〔時顯〕
左近將監在判
〔重時〕
相模守在判

448 『比志島氏文書』

〔端裏書〕
三答具書四通

薩摩國滿家院内比志嶋・西俣・河田・城前田・上原蘭、以上伍箇所名主職事、右任母尼菩薩房今年三月十一日讓狀、可令領知之狀、依鎌倉殿仰、執達如件、

寶治元年十月廿九日

〔末尊〕
上總法橋御房

〔時顯〕
左近將監在御判
〔重時〕
相模守在御判

449 『比志島氏文書』

〔忠時〕
〔花押〕

〔卷〕
〔滿家院地頭後家尼可弁濟由、上總法橋訴申日吉上分稻

元五十束事、具書等遣之、子細見于狀、所詮、如後家陳申者、爲大輔房沙汰、所令勸濃之作毛、〔重之〕法橋取上者、不能弁濟云々、件作毛取實否、兩方被糺明、可令注進申給之狀如件、

寶治元年十一月廿二日

左兵衛尉〔花押〕
惣地頭紀二郎左衛門尉殿

450 『在東鑑三十八卷』

一寶治元年丁未十二月廿九日丁未、京都大番勤仕事結番之、各面々限三ヶ月、可令致在洛警巡之旨、被定下之、共有二第三番忠時也、于時島肆大隅前司、

451 『全』

一寶治二年戊申正月三日壬子、將軍家頼朝有御行始之儀、入御左親衛御亭、供奉人五位廿一人之中、忠時有之、于時大隅前司、

452 『正本比志島氏藏』

〔祝所〕
さいそひやうゑのこけくほたのあまうへ、きよく□ん

まいり候て、よしすけにそたいのもんそハほうそたるよ

し、さんそう申候によて、よしすけめしふを給はりて、

まいりてあきらめ申候うへ、あまうへのきしやうもんを

けさんにいれ候き、さ□きこしめしひらかれ候あひた、

あんとを申候を、それニよてミつゑのあひた、ことにせ

んれいをそむき、御ほうをこんそしまいらする事あるま

しく候、かきり候五十石のよね、いまにけたい候へぬう

へ、すゑさまにもたいかん申こと候ましく候狀如件、

ほうちくわんねん十二月十九日 ふちはらのよしすけ

在判

453 『正文在比志島氏』

薩摩國滿家院内比志嶋・西俣・河田・城前田・上原園、

以上伍箇所名主職事、

右、任去年十月廿九日関東御教書、可被領知之狀如件、

寶治二年正月十七日

(長時) 左近將監在御判

(栄尊) 上總法橋御房

454 『臺明寺文書』

山王御寶殿

奉造立供養七社御本地并使者三所御本地事

一大□權現御本地釋迦牟尼如來像一鉢

一地主權現御本地藥師如來像一鉢

一聖眞子權現御本地阿弥陀如來像一鉢

一八王子權現御本地千手觀世音菩薩像一鉢

一客人權現御本地十一面觀世音菩薩像一鉢

一十禪師權現御本地地藏菩薩像一鉢

一三所權現御本地普賢菩薩像一鉢

一早尾宮御本地不動尊像一鉢

一大行事宮御本地多門天王像一鉢

一王子宮御本地大聖文殊師利菩薩像一鉢

右、件造立供養七社御本地并使者三所佛菩薩、依甄錄如

件、此則爲師匠覺明現當二世悉地成就并父母二親頓證菩

提也、仍爲後代、注文如件、

寶治貳年歲次 戊申春二月十八日丙申造立願主僧朗弁

〔此原書ハ、旧御番所御文書ニ番箱中ニ一巻アリ〕

455 『臺明寺文書』

惣檢校僧兼尊謹辭

讓与性享房臺明寺種智房真如院蘭事

右、件蘭者、依爲故慶教御房弟子、種智房相承領掌之間、其身閉目之時、兼尊作爲甥致忠之、令相享畢、而性享房与兼尊依成親子之契、限永代、所讓与性享房也、但於于證文者、依爲類券、留早、仍爲後日讓狀如件、

寶治二年四月廿三日

惣檢校僧在判

〔ロツツ〕
〔性享房相傳文書案文〕

456

『末吉宮里氏文書』

薩摩國宮里郷益〔富〕名主新大夫正持申當名内田五反〔字目〕・

蘭貳箇所、爲地頭代、被致濫妨由事、此条、任去寛元三年七月十六日下〔文宣〕、可令存知之狀、下知如件、

寶治二年七月十九日

彈正忠宗

地頭御代官本田五郎兵衛

457

〔越前島津氏忠綱譜中〕

〔在東鑑三十九卷〕

寶治二年戊申八月十五日己丑、鶴岡放生會也、將軍家頼朝

有御出之儀、後陣隨兵十一人之内、忠綱在之、于時豊後左衛門尉忠綱、

458

〔右同〕

同年十月廿五日戊戌、豊後左衛門尉忠綱、以高麗山山柄ナツ猷將軍家、頼朝其色白而如雪、其聲不相似吾國鳥、幕府賞翫只此事也、

459

『比志島氏文書』

頭・領家御代官等、令同奉免、致方之御祈禱之發之間、代之地

證文面、就者、至地頭得分并檢断職者、任先例、奉寄進

處也、但於大犯者、其身計於可被召渡狀、所仰如件、

寶治二年十月三日

奉免

460

『臺明寺文書』

沙弥西願謹辭

奉沽渡水田重富名内宮富名太迫田陸段事

四至限東横道 限西同坪内寺田繩手 限北岸 限南岸

右、件水田者、西願之先祖相傳之私領也、雖然、依有要用直物、限永年、理性御房奉沽却事實也、但段別肆舛宛

御佃米并守護所御方院飯用途錢段別貳拾文宛者、付田早、

每年役也、此外、所當并本役万雜公事者、留本名早、雖

可相副本券、依爲類券、不相副之、仍立新券、奉沽渡處也、仍爲後日、沽券之狀如件、

寶治貳年閏十二月九日

嫡子僧(花押)

沙弥西願(花押)

(表紙)

忠時公	自建長元年
久經公	至弘長三年
前編	舊記雜錄 卷六

建長元年己酉、是年三月改元建長、自二月以前猶是宝治三年、春三月十八日改元、

拋大日、秋八月九日、幕府以二階堂常陸介行久、為薩摩國

阿多北方地頭職、前二階堂氏系圖、按系圖、二階堂氏之先、曰山城

隱岐守行村、行村生隱岐左衛門尉元行及行久、北方即今田布施鄉、

二年庚戌春三月二十五日、幕府臨北條時賴之第、避方忌、

供奉五十五人、公預焉、拋東鑑、避方忌、東鑑旧作方連、聞諸陰陽師曰、時日方位各有吉凶、若某日凶在東方、則西出以避之、若某日凶在南方、則北出以避之、稱曰方連、方連

號曰加太太加江、寶治通鑑、魏明帝紀、有避袁事、胡三省註、避袁謂五行之氣、有王有衰、徙舍以避之也、

今人謂之避災、此事与避方忌相類、

三年辛亥春正月一日、幕府臨北條時賴之第、供奉二十八

人、公預焉、拋東鑑、五日、二位殿・二棟御方臨秋田城介

義景甘繩之第、二棟御方供奉十六人、公預焉、同上、十

一日、幕府謁鶴岡八幡宮、供奉後隊十九人、公預焉、

同、二十日、幕府如二所、供奉後隊四十人、公預焉、

同上、二所、蓋指箱根、三島明神、冬十月十九日、幕府臨北條時賴之新第、

供奉三十三人、公預焉、同上、十一月十三日、禪定二位家

始入龜谷新第、扈從三十三人、公預焉、同上、

四年壬子春、北條時賴廢征夷大將軍藤原賴嗣、立宗尊親

王為征夷大將軍、拋大日、夏四月三日、故幕府賴嗣還京師、

路次奉行十四人、道忍公預焉、拋東鑑、道忍公 公之世

子也、拋島津系圖、公為鎌倉御格子宿直、此時分上下宿直七

十人為六番、公在三番十二人中、拋東鑑、秋九月二十五日、

幕府臨兵衛督教定朝臣泉谷亭、避方忌、供奉騎馬十四人、

公預焉、同上、冬十一月十一日、幕府始入新第、供奉布衣

四十四人、公預焉、同上、大日本史將軍傳云、時賴為二十日、

幕府臨北條重時之第、供奉四十四人、公預焉、同上、

十二月十七日、幕府謁鶴岡八幡宮、供奉後隊四十人、

公預焉、同上、

五年癸丑春正月三日、幕府臨北條時賴之第、供奉四十四

人、公預焉、拋東鑑、二十一日、幕府謁鶴岡八幡宮、供奉

後隊五十九人、公預焉、同上

六年甲寅春正月二十二日、幕府謁鶴岡八幡宮、供奉後隊

三十三人、公預焉、撫東、秋八月十五日、鶴岡行放生會、

幕府謁八幡宮、供奉布衣三十七人、公預焉、同上、大日

皇養老四年九月、始修放生會、都名所函會、石清水八幡宮条下、引扶桑

記云、每年以八月十五日為放生會、昔元正天皇養老四年、日隅二州平

作亂、朝廷鑄於筑紫宇八幡宮、而祝官辛島勝波豆丸、引軍討二州平

之、於是八幡宮託宣修放生會、諸國放生會自是始也、今按水引新田八幡

宮放生會事、見執印久壽及大檢校所藏文書、則放生會本係八幡宮祭事云、

又按名物六帖、引王禰登與社禰云、凡神所饗會、具威儀、簫鼓雜戲、迎

之、曰會、有松花會、觀音會、開王會等名、

猶此間有龍華會、祇園會、會字說曰末津利云、

七年乙卯、事缺不書、

康元元年丙辰、是年十月改元康元、自、春正月一日、院飯、

公與北條時賴重時等朝謁如例、同班八十一人、拋東鑑、本

日、設院飯於外朝、石原氏世掌其事、而其家藏一冊子、錄元日令節共

具陳設事、中有院飯事、未有寬陽公跋、蓋自得公以來伊地知氏世掌元

日令節儀、詳其簿籍、其事甚繁後世不能悉行、於是寬陽公刪其繁穢其

要、更為一書、以授膳夫長、由是、石原氏藏之、詳見寬陽公跋矣、而院

飯之義未詳、寬政十一年使番格知録奉行事本田休兵衛親礼如江戶、因

咨旗本末伊勢萬助殿以院飯事、萬助殿曰、院飯往往見東鑑、曾我物語、

東鑑所謂院飯者、言武家肇朝幕府、獻膳羞庶品及太刀馬、其儀如公家所

謂大饗者、曾我物語所謂院飯者、猶後世世世振舞、今日田舍俗尚尙有院飯振

五日、幕府臨北條時賴之第、供奉班三十八人、公預焉、
同上、秋七月十七日、幕府參山内最明寺、供奉班五十七人、
道忍公預焉、同上、冬十月五日改元、拋大日
本史

462 「越前島津氏忠綱譜中」

「在東鑑四十卷」

建長二年庚戌正月十六日午、將軍家賴御參鶴岡八幡宮、

供奉人布衣四十二人之內、忠綱在之、于時豐後四郎
左衛門尉忠綱

463 「越前島津氏忠綱譜中」

「在東鑑四十一卷」

建長三年辛亥正月五日丙辰、二位殿并二棟御方等、御行始

秋田城介義景甘繩第、二棟御方供奉十六人之內、忠綱在

之、于時豐後四郎
左衛門尉忠綱

464 「在東鑑四十一卷」

同年十月十九日乙、將軍家賴并二品渡御相州新造第、今夜

御止宿也、將軍家之供奉卅三人之內、忠綱在之、于時豐後四
郎左衛門尉

465 「在東鑑四十一卷」

則公院院飯節、自得公以來有之矣、而今日所說、蓋室町家之遺法云、

伊勢萬助殿家傳礼字、其先曰伊勢貞幸、詳見後第十七卷永祿三年註、

賊党、正月一日・三日・七日・十五日黃幡飄揚雲上、於是遂平賊党、正

月黃幡賀鏡自是始也、今按日本紀等書、無正月黃幡事、而公以云、始

同年十一月十三日戊辰 禪定二位家有御移徙之儀、龜谷新
造御第八御、扈從直垂立鳥帽子三十三人之内、忠綱在之、于時
衛門尉 四郎左

466 「延時文書」

をくまのみちひさにゆつりわたす、くんあみたふかせ
んそさうてんの所りやう、さつまこをりなりえたのみや
うのうち、かみこしき□な□うさこのみなみにつけ
てそのいか所□事、

四しひうかしへかきるみち みなみへかきるはため
にしへかきるかきね きたへかきるかきね

みき、くたんのてんへくは、くんあみたふかせんそさう
てんのそりやうなり、しかるを、しそくたるによて、な
かきよをかきりて、をくまのみちひさにゆつりわたし
をはぬ、たし、あにたとものてつきをあひそうへし
といへとん、るいちあるによて、ちやくによをくまの
うちのによに、ゆつりあたふるニよて、はなちゆつるに
あははす、よてしとそんくニいたるまて、たのさまた
けなく、りやうちせしむへきしやうくたんのことし、

ほうち三ねん二月十四日 をくまのをいこ

くんあみたふつ(花押)

「爲證人、湛西(花押)」

467 「調所氏譜恒久傳」

寶治三年己酉二月十六日、襲大隅國主神司及調所政所書
生三職、詳見父恒用讓狀等、

468 「公家藏文書」

「親父主神司讓狀 國司吉田右少□」

「任親父恒用讓狀、□嫡子恒久可爲彼職□

守□」

大隅國主神司藤原恒用謹辭

讓与 嫡子藤原恒久主神司職并調所政所兩職等事

右、件諸職者、爲恒用重代相傳之職也、然間、相副于嫡

子恒久所帶之證文等、所讓与也、不可有異議之狀如件、

以辭、

寶治三年二月十六日

主神司藤原恒用在判

「依國判□

目代□(源九)

依國判并留守所□在廳加署之、

惣檢校□

稅所□

田所□

惣切檢校□

□

調所□

469 『權執印文書』

薩摩國新田宮所司申神王面破損、下手人阿多郡北方前地頭
鯨島刑部丞家高法師所從吉行間事、訴狀副具如此候、被
下関東御教書之間、度々令下知之處、逃去之由令申之条、
何様事哉、尋搜在所、早速可令召進其身之狀如件、

建長元年八月十一日 左近將監在御判

守護代

470 「忠時公御譜中」

「在東鑑四十卷」

建長二年庚戌三月一日卯、造閑院殿雜掌事、爲被進覽京
都、今日悉被注緝之、其内北弘御所島津豊後前司跡云々、
○三月廿五日辛 將軍家頼爲御方違、入御相州時御亭、

供奉人々布衣下括五十五人之内、忠時有之、于時大隅前司

471 「若狹島津氏二代忠經譜中」

「在東鑑四十卷」

建長二年庚戌三月一日卯、閑院殿造營雜掌、樋二ヶ所、
若狹兵衛入道跡云々、
「本ノ、」
「右未知是平否、可有再考」

472 「入來院氏文書」

〔端裏書〕
「御下知狀 塔原事」

薩摩國入來院内塔原名主寄田弥太郎信忠与地頭澁谷五
郎房定心相論名主職事

右、對決之處、如信忠申者、當職者父信俊重代職也、當
國御家人雖不帶御下文、知行所領之条、爲傍例之間、故
右大將家御時、千葉介雖給惣地頭、至名主職者、無相違
之處、寛元四年上總介秀胤蒙御勸氣之刻、名主等爲訪下
向之時、信忠稱不訪、被押領所職畢、仍欲言上事由之處、
當地頭定心可和与之由依令申、書与起請文畢、而定心變
和与、令濫妨云々、如定心申者、件名主職者、爲地頭進
止之間、秀胤之時、信忠自代官之手、雖令補任之、同時

473

『臺明寺文書』

又被改易畢、爰定心拜領件院之日、信忠出來、書起請文之間、令還補畢、而依成向背、令改易畢云、爰如定心所進寶治元年八月五日信忠起請文者、入來院地頭得分不可對捍、又如此宛給之上、背地頭、不可申子細於上云、者、非地頭進止之由、信忠雖申之、秀胤押領之時、不致訴訟、沒收之後、書与起請文於當地頭定心、令還補之間、可爲地頭進止之由、定心之所申、有其謂欵、然則於彼名主職者、且任秀胤時例、且依信忠起請文、可爲地頭進退之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

建長二年四月廿八日

相模守平朝臣(花押)
(時題)

陸奥守平朝臣(花押)
(重時)

當國御家人領注進言上事、
(持力)軍家御下知、
(名越時章)尾張守殿御施

行兩通案如此、仍一國平均所致其沙汰候、
(除之条力)主丸

沽却相博内、以內之免、
(更力)支申嚴重之御下知候之条、

□以不可然候、早任御教書之旨、可被存知候、但至于内

之雜免之条者、今更非改替之限、於所領注進之子細者、

可被相鎮自由了見之狀、可被披露衆徒御中候、恐之謹言、

474

『臺明寺文書』

建長二年 五月二日

守護代快雲(花押)

謹上 理性御坊

勸進臺明寺衆

(款致)

殊以万人結緣助成之力、
(款致)今造立壹間四面本御堂狀

夫以、臺明寺者天下無雙之靈輻、人間第一之梵宮也、斯地爲躰、四方山峙、春花秋林之嶺、疑曝紅錦繡之色、中央河廻、碧浪清流之水、省坐淨瑠璃之光、山容水態、視聽之興、國中最卓爾、蓋相當勝地之中心、建立壹間四面本御堂、東方向也、本尊阿弥陀三尊、御堂丑寅方奉崇地主權現、惣社相對御寶前、青葉二葉笛竹森然而多生、爰煙葉之暗之暮、群雀爭宿音啾々、風枝之戰之春、歌鴛遷喬囀歷々循竹、此有寶池、有蓮、水浮千秋之彰化、放四色之光、宛謬八功德兆之餘流、東方大臺明案千手觀世音菩薩、靈驗靈德無比類、利生利益揭焉也、御前有五葉松樹、久影一千瓊榮、本堂西方曼陀羅堂、本堂南方食堂、就中奉安置大聖文殊、北方毗沙門堂、就中壹間四面本堂建立事、無緣起無日記云、故老相傳云、天智天皇御宇

青葉二葉笛竹貢御所自被定置以後、五百八十九歲欵、多

送星霜經涼燠之間、道場歲舊、破壞日新、棟臺穿而雨灑

紺頂、白毫之粧難乾、墻壁破而風寒、幡蓋瓔珞之影不靜、

衆徒各皆思之、眼前不覺淚下、是以仰万人結緣助成之力、

旁奉令造立壹間四面本御堂、雖爲一紙半錢、所望也、微

塵積而成山、雖爲寸鐵尺木、所願也、垂露滴而成海、只

所志至、所力堪也、昔義之女一衣依奉施佛、忽得富貴長

者之身、舍備貧如挑一燈、早轉女見證、佛子各擎一塵浮

雲之貯、令奉施十号滿月之尊、必依爲廣大善根之思、定

可遂往生淨土之望、敬白、

建長二年八月九日

勸進衆徒等敬白

源壽大法師(花押)

永海大法師(花押)

朗弁大法師(花押)

重慶大法師(花押)

安榮大法師(花押)

行円大法師(花押)

永榮大法師(花押)

覺嚴大法師(花押)

亮範大法師(花押)

覺西大法師(花押)

『建長二年逆數至天智帝元年則為五百八十九年、拠此、元和六年住

僧來精有、白鳳元年帝所創論旨云、恐妄偽也、果是則非帝年号、乃弟

天武即位之年号也』

475

『入来院氏文書』

(端裏書)

〔定心大庭帳〕

一 公事田數事

定置就于公事并諸事、可存知子息等子細狀、

御公事本田十九町肆段、雖爲伊勢・大類之分、相具今

所領、令配分畢、

十町四段 (伊勢) 大功田

九町 大類

參十壹町貳段河會 (美作)

柒拾五町 (藤原) 陸町 (美作) 打鈍

已上百參拾壹町陸段

以之勘定拾九町肆段

一 (淡谷明惠) 三郎分 九町 大類 十柒町四段 河會

参町 打鈍 十捌町七段半 入來

但公事定田七町四段

(狭谷屋敷)
四郎分

一 十町四段 大功田 貳町參段 河會

十捌町七段半 入來

但公事定田肆町七段半

(狭谷屋敷)
五郎分

一 肆町 河會 十捌町七段半 入來

但公事定田參町

(狭谷屋敷)
次郎三郎分

一 柴町五段 河會 參町 打鈍

十町四段大三十歩 入來

但公事定田參町壹段

六郎次郎分

一 捌町貳段大三十歩 入來

但公事定田壹町貳段

(狭谷屋敷)
あら六分

貳町入來也、但除十九町四段御公事田數定也、

右、各隨此田數、色々御公事・京都大番可令勤仕也、

一 於領家國司兩方御公事者、以入來院七拾五町田數、

可令勤仕也、

一 子息等中、自此所領得替事出來者、勘合殘田數、就于得田、於三郎明重之沙汰、御公事可令支配、於得替所者、不可勤者也、

一 鎌倉御神事之時、舍人出立事、一向ニ三郎かいとなみにてあるへし、

一 鎌倉より人夫をめざるゝ時、うちもちり・ふかや・ふちこゝろやしきたはたけのほとを、ハからひてあつへし、人夫あまたあたらん時ハ、女房のふんニもさたすへし、三度ニ二度ハ、うちもちりよりあひまいらすへし、

一 大ゆかの番ハ、五ニ二をハ三らうつとむへし、いま三をハ、三人してつとむへし、をちあひの殿ハラ、よりあふ事也、

一 大庭御まきをひかん時ハ、ふかや・ふち心のさいけニしたかひて、一人もらさす百文のせにをハからひあてゝ、をちあい・しもふかやの二百文せにゝくして、三百文にて人夫のいとまをかうけとゝむる也、そのむねを存すへし、

一 五所宮御まつりの時、もしハ御すりのあらん時ハ、

せんれいをたつねて、ほとにしたかいて、そのやくをつとむへし、たいかんすへからす、

一 かまくらのやちハ、三郎ニとらす、たゞし、ゑこんなん(てん)からんをとゞにハ、すぐせさすへし、他人をハやとせとも、をとゞにハかさぬ事、おほくミる所也、をやのめいをそむく事なり、きひしくせいせハ、上ニ申すへし、

一 下人らのあいたの事、かねて申つた、又せけむのくそくせう／＼あらんをハ、こけさ(あま)に申あへせて、そのはからひにしたかうへし、

一 女子にゆつるさいけ田島ハ、件女子はうニすきたるふるまひあらん時ハ、子息よりあひて、この事ハ一定かとよく／＼たつねて、もし一定ならハ、件やしきを、上まで申さすとも、おしとりて、子息等はいふんしてしるへし、件女子のこなんとにとらす事あるへからす、

一 をやのためにほうこうありて、心さしあらんものを、おや死去のゝち、いつしかとかをいゑつけて、さん／＼にあたる事、ゆめ／＼あるましき事也、

一 をやのために佛事するよしあるて、そのようとうれ

うニ、とかなからん人をせめて、ものをとりて、佛事する事あるへからす、くとくニならぬ事也、

一 子息同まこらか中、やしきをなんとを(博)はくやうにもうちれて、しまとう事あらハ、おの／＼よりあひて、一とハひきたすけ、いまよりのちニハ、さる事候ましと、きしやうをかゞせてをくへし、なをそのこゝろありて、くるう事あらハ、そのやしきをハ、おやの申たる事なれハとて、おの／＼わけてしるへし、

右、このうゑニハ、さのミ申へきやうなし、この状をハ、上下万人ひか事とハ候ましき也、一事といふとも、ゆめ／＼たかふへからす、あなかしこ／＼、

建長二年庚戌十月廿日

(定心)
僧在判

476

『比志嶋氏文書』

(外題)
「彼山事、任申状、悉所令免除也、早可被致其
勳之狀如件、

地頭僧(花押)」

西俣名主法橋榮尊謹(曾上カ)

欲賜御外題、令建立草堂一字當名内邊牟木山間事、

右、件山者、いたつらなる(あらやまにてカ)しかも、水木の便な

く候間、僧侶をかたらひて、木をきりはらひ、いはをくつしても、草堂一字建立仕て、念佛之便にもと存候、件山所當地利物万雜公事等、蒙御免、漸くにこれをきりはらはむと思ふ、且彼比丘尼御教養のため、且自他利益のために、若御優如候は、一端の少事をもて、万代の大善、付冥付願、定其御感歎候者欵、抑彼山當時者、無一分公用深山也、將來之地利物、又以有名無實哉、雖然、榮尊之ためにハ、聊其便あるによて、賜御外題、欲遂前途、仍恐言上如件、

建長二年十二月 日

法橋榮尊

〔(裏書) 申うけ候四支事、
(全カ)〕

東限たけのミチ

南限ゐてのはらのきたのミねのいたゞき

西限河

北限かとのき山

くたんのしんしのこと、申しやうきかすところ如件、

地頭代僧(花押)〔

(右ノ裏書ハ原文書ニヨリ補フ)

「在東鏡四十一卷」

建長三年辛亥正月一日^{壬戌}、將軍家^{頼朝}并若君御前等、有御行始之儀、相州^時御亭入御、將軍家之供奉廿八人之内、忠時有之、^{于時大隅}○五日^{丙辰}、二位殿二棟御方等御行始、秋田城介義景甘繩第入御、二棟御方供奉十六騎之中、忠時在之、^{于時大隅}○十一日^{壬申}、將軍家^{頼朝}參鶴岳八幡宮給、御束帶御後供奉十九人之中、忠時有之、^{于時大隅}○廿日^{辛巳}、將軍家^{頼朝}上、二所御進發也、御後供奉四十人之中、忠時有之、^{于時大隅}○十月十九日^{乙亥}、將軍家^{頼朝}上、并二品、相州新造御第入御、將軍家供奉三十三人之中、忠時有之、^{于時大隅}○十一月十三日^{戊戌}、禪定二位家有御徙移之儀、龜谷新造第入御、^{直垂立}扈從^{烏帽子}三十三人中、忠時有之、^{于時大隅}

478 四代忠宗公

三郎左衛門尉 下野守 上總介

建長三年辛亥誕生、母相馬小次郎左衛門尉胤綱第三

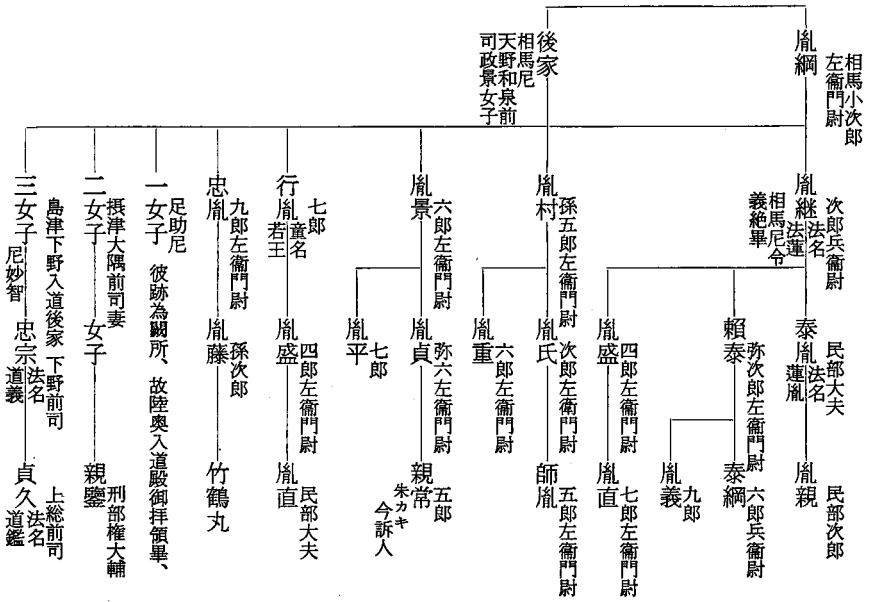
女^{為尼称} 妙智^也、

久長

號伊作 初忠長 彦三郎 左衛門尉 下野守 大

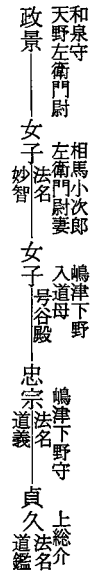
隅守 法名道意

「忠宗公御譜中」



「忠宗公御譜中」

四條東洞院敷地相傳次第系圖



481 信濃國太田庄 承久兼敷功地也、田教三百四十余町、郷々領主事 (本系圖ハ二九〇号系圖ト同ジニキ省略シ)

482 『比志嶋氏文書』

(編纂書) 「へむき山の本主領家御房御申状」

(外題) 「くたんのやまの申さうにまかせて、ことくくめ んちせしむるところ如件、

收納使左兵衛尉大江(花押)」

西俣名主法橋榮尊謹言

御けたいを給はりて、草たう一うをこんりうせしめん

とおもふ當名のうちへむき山の間事、

東限たけのミチ

四至 南限ゐてのはらのきたのミネのいたゞき

西限河

北限かとのき山

『入来院氏文書』

(編纂者)
「ありきのさかいのわけあん」

右、件山ハ、いたつらなるあらやまにて、しかも水木の
たよりあるにて、らう人をかたらひ候て、きをきりは
らひ、いはをくつして、さうたうをこんりうつかうまで、
念佛のたよりにもし候ひ、又他領いするんにいはひたて
まつる(編)こんけん(理)に、ちかをのうらの新田を御きしん候事
も、しかるへからざる間、かた／＼につけて、件の山を
きりはらひて、たうをもつくり、こんけんをもいはひた
てまつらんと存候て、らう人をあひかたらひ候もの也、
しかれハ、りやうけ御はうの所たう・ちりもつ・まんさ
う公事ら、御めんをかふりて、やうやくそのはけミをい
たさんと思ふ、かつハ、件山たうしハ、一ふんのくよう
なきあらやま也、しやうらいのちりもつ、又もてうミや
うむしちならむか、もし御めんをかふらハ、一たんのせ
うしをもて、万代の大善をすうせしめ給はん事、ミやう
けんにつけて、さためてそのほまれをかふらしめ給はむ
おや、仍しさいをろくして、もて申候狀如件、

建長三年二月 日

法橋榮尊

『權執印文書』

御判

納 錢參貫文

入来院

有御判

ちうしん 建長三年のきむたちの御方ニ、村わけさか
いのしるし文、

(淡谷重純)
二郎三郎殿御りやう、北ハかきる大河、西ハかきる一て
うの江口、同からす山の、同きせのお、同うつきれ山の
たうけ、うハとこのひたをかきる、同せうの石杓口を中
村ニいけて如、さかい入道ミねから、東郷のひなたひら
のえほうしかたにあてゝきる、あいにははうしあり、入
道かミねから東ニきる、松板田ハ中村也、ふちの上の大
門のついちよりはんたの山のはためかきる、同ふち山の
はためをかきる、同しゝの河内の口、南ハかきるしゝの
河内、同ほるをせうの石きる、

建長三年庚亥三月 日

くん文僧有判

僧 内慶在判

藤原光貞在判

藤原光平在判

白四丈布三段

右、新田宮權執印永慶見參折、所納如件、

建長三年六月廿八日

源御判

485 『入來院氏文書』

「クナクラニ」

「ちやうしんよりのゆつり状あとの御下知」

讓与 薩摩國入來院内

四郎重經所

塔原郷、於四至堺者、御使等之副文狀明鏡也者、

右、無他人妨、可令知行、仍爲後日證文、讓狀如件、

建長三年八月廿四日

（兼谷定心）
僧在判

486 「忠時公御譜中」

「在東鏡四十二卷」

建長四年壬子四月三日辰、御格子上下事被定人數、共在

六番、三番十二人之中、忠時有之、千時大、同上、○八月一日癸、

親王家宗令任征夷大將軍給之間、可有御拜賀于鶴岡八幡

宮之由、雖有被定之儀、所被停也、於供奉人散狀者、被

召置御所云々、騎馬三十三人之中、忠時有之、同上、○六

日戊、將軍家宗有御方違、供奉騎馬十九人之内、忠時有

之、千時大隅、同上、○九月廿五日丙、將軍家宗有御方違、騎馬

供奉十四人之中、忠時有之、同上、○十一月十一日辛、將軍

家上、新御所御徙移、申刻出御、布衣下括、御供四十四

人之中、忠時有之、千時島津大、同上、○廿日庚、將軍家上、御徙移

之後、始入御奥州亭、供奉布衣四十四人之中、忠時有之、

千時大隅、同上、○十二月十七日丁、將軍家宗御徙移之後、始御

參鶴岡八幡宮、御後供奉布衣四十人之中、忠時有之、同上、

487 「久經公御譜中」

「在全四十二卷」

一建長四年壬子四月三日辰、今日前將軍頼并若君御前、

御母儀二位殿等御上落、而已去月廿二日、御出御所、

今日爲重服、尤可有憚欵之由、陰陽道雖申之、不能御

許容、遂以御進發云々、供奉人路次奉行十七人之中、

久時有之、千時島津大隅、修理亮久時

一東鏡、建長四年壬子七月廿三日、今日將軍家宗御方違、

以前供奉步行八人之中、有進士三郎左衛門尉宗長者、

「是ハ久經公ノ弟式部丞忠経ノ子、給黎彦三郎左衛門尉宗長ノ事也」

488

『調所氏譜恒久傳』

建長三年辛亥二月、恒久上疏請給免田、乃國司及六波羅許之、明年四月十四日、留守所官人命、

田所ノ兼

國司御解題等之旨爲（外之）如

大隅國定直進署

請被蒙且依 田所建部定久御下

稅所藤原義祐給 惣切手大中臣篤通給

厨家書生大中臣 調所書生藤原恒久

給

右、謹檢案内、定直進署之 格勤之奉公事同

身也、爰 書生調所具書之給免

之間、懷訴訟事、雖存同 茲之恒久國恩御紛（イマ）

其上郡住田口分米壹石 引募之

事、有其數、一物 既稅所被下上職、過國

蒙國恩事者、似傍 田五段定

也、自名神主 訟者、弥奉仰國威之

狀、言上如件、

建長三年二月 日

490 大隅國在廳生佛・恒久

可任先例由事、國司外

建長三年二月廿五日

稅所兵衛太郎殿

491 國留守所

可早任 良史御外題 給免引募郡住田貳段三 任（更之）（イマ）

員數蒙國恩事

右、就去建長三年二月日闕 六波羅殿御副狀、田所檢

校 然也者、早任兩通之狀、在廳官人等宜承知、

勿違、

建長三年卯月十四

492 「御元祖忠久公三男忠直譜中」

忠直

三郎左衛門尉 掃部助

住甲斐國波加利新莊矣、

建長四年壬子四月三日 幕府御格子上下事、被定

人數、親王宗尊御下著、五番十二人之内、忠直在之、于

豊後三郎左衛門尉忠直、

女子
小田常陸介室
女子
小田筑後守室

493 「越前島津氏忠綱譜中」
「在東鑑四十二卷」

建長四年壬子四月十四日丁卯 將軍家宗 始御參鶴岡八幡宮、供奉三十六人之内、忠綱在之、于時豊後四郎「朱力半」左衛門尉忠綱、綱ノ誤也

此事兩所有之、一所者衍文欤、先有殿上人之次、又著直垂帶劔輩、候御輿左右有之十八人之内也、未知孰是、可有詳考、

494 「在東鑑四十二卷」

建長四年七月廿三日乙巳 將軍家宗 御方違、御後騎馬十八人之内、忠綱在之、于時豊後四郎「朱力半」左衛門尉忠綱、

495 「右同」

同年八月一日 癸丑 親王家宗 令任 征夷大將軍給間、可有御拜賀于鶴岡八幡宮之由、雖有被定之儀、所被停也、於

供奉人散狀者、被召置御所云云、(前) 供奉人之内、忠綱在之、于時豊後四郎「朱力半」左衛門尉忠綱、

496 「右同」

同年十二月十七日丁卯 將軍家宗 御參鶴岡八幡宮、御後布衣四十人之内在之、于時豊後四郎「朱力半」左衛門尉忠綱、時ハ綱ノ誤也

497 「入來家臣武光氏文書」
(端裏書)
「白濱又五郎、具書案」

薩摩國嶋津庄薩摩方高城郡吉枝名地頭澁谷六郎太郎重秀与雜掌左近將監資通并前名主弥伴太師永字 有傳、
相論吉枝名下地事

右、對決之處、如重秀申者、吉枝名下地者、先例爲地頭進止之間、前地頭(千葉秀胤) 上總介跡六十餘年無其沙汰、代々地頭下文等師一 令帶之處、少々所引隱也、東郷左衛門尉不知 令知行四郡之車内地頭所者、吉枝名也、宛給下人等給田九ヶ所有之、而資通与師一 令同意、一向領家進退之由、令申之條虚言也、且地頭進止當名之条、見師一 与舍弟高重相論時師一 陳狀、同進六波羅狀并同起請文云々、如資通申者、當名者、爲弁濟使名分、領家進止之間、無各別之

儀、師一代之御下文、領家進止之由、正直申早、非同意之儀、而當名下地者、一向地頭進止之條、見左衛門督家(源賴憲)和字御教書、寛喜二年閏東御下知并廣光奉書案文等、今号惣領下文師一所帶承久四年狀者施行也、車內地頭所者、隨便宜雖立之、領家不被支仰、九ヶ所給田者、爲領家進止之處、地頭押取之間、可返給也、又郡司狀進之、師一問事、師一可申云、師一申云、兄弟相論時陳狀進之條勿論也、但四ヶ所詞者、師一不申之、隨彼執筆者、重秀後見也、進六波羅狀事、一向不覺悟之、起請文事、判形者師一判也、且於他所令書之、越前房持來之間、加判早、上總介時得分不可隱之由、重秀令申之間、所書其由也、雖有訴訟、不可言上之旨、不申之云、重秀申云、承久四年下文者、爲前地頭時之間、不知及之、師一所進地頭下文等進之、郡司者、爲重秀敵人之間、不足證文、九ヶ所給田事、任先地頭之例、所致沙汰也、師一起請文事、乍承伏判形、至于狀内之詞者、不申之由、構出之條、可有御遺迹、於師一并子息伴二郎之前令書之、可被尋執筆、又四ヶ所詞不申由事、於伊勢前司之前令披見之、奉行人明石左近將監兼綱預置早、次六波羅狀事、可被尋安富民部大夫、於御下知者、可被召出正文云、資通申云、於

所務者、云當名、云余名、領家・地頭致沙汰之條、當庄例也云、師一申云、陳狀正文并起請文執筆事、尤可被尋也、於師一前、全不書之、進六波羅狀事、同可被尋安富民部大夫云、者、弁濟使職事、可爲領家進止之由、資通備進代之御下知狀案文等之處、可被召出正文之旨、重秀不論申坎、吉枝名下地者、爲弁濟使名之間、無各別之儀之旨、資通令申之處、如建保七年三月預所下文者、於弁濟使職者、所宛補他人也、但至高重者、任相傳之旨、定補吉枝名主職早云、如狀者、雖似有各別之儀、預所成之下文也、非地頭進止之證據、又如承久四年・天福三年兩通狀者、爲地頭下文之旨、重秀雖申之、承久狀者、就領家下文之施行也、天福三年狀者、無正文上、天福者二年改元、三年之狀、有其疑、旁不足證文、所詮、就承久狀、領家被成下文、地頭成施行、於所務者、任先例、兩方可致沙汰焉、次同名主職事、如師一所進證文等者、師一相傳之由所見也、仍師一如元爲彼職、可相從兩方所務之處、云起請文判形、云兄弟相論時陳狀、乍承伏、地頭入筆之由、令申之間、披見其狀之處、無入筆之證據、以士民之身、狠地頭構謀書之由、稱申之條、難遁罪科、然則改易師一所職、領家被成下文、地頭成施行、被補穩

便之輩、於所務者、可依先例也者、依將軍家仰、下知如件、

建長四年六月卅日

相模守平朝臣(時類)在御判

陸奥守平朝臣(重時)在御判

498 「鹿屋氏文書」

下 嶋津御庄鹿屋院

補任 弁濟使職事

伴千壽王丸

右、件職者、重代相傳所職也、仍補任彼人畢、恒例臨時御公事等、無懈怠可致其沙汰也、士民等宜承知、敢無違失、以補、

建長四年七月 日

預所(花押)

499 『調所氏譜中恒久傳』

建長四年壬子、初自往昔領主神司到于今、莫獨不祈禱國司及關東之鎮護者、故有所世傳職俸亦年久矣、間歲在廳陪隸原文動侵掠之、乃恒久以主神司上表訟于闕、至是八

月十三日、散位某檄命守護代刑部左衛門、疑敦實氏、見令下正嘉元年遍詢部下勿以煩之、

500 「關東御下知狀」

主神司申狀如此、自往昔至于今、併國司并關東之致御祈禱人候、而重代相傳之所職を、在廳殿原任雅意、被押妨候之由、歎申候、尤以不便、所詮、任國司御下知、於自今已後者、彼所職等仁不可有其煩候、此上猶於被成違亂候人者、被有成敗之關東御威之由、可令存知候、以此旨、面々被相觸候天、努々不見放、可有其沙汰也、仍狀如件、

建長三年八月十三日 散位在判

守護代刑部左衛門殿

具官殿原 御中

501 『鹿屋氏文書』

(本文書ハ四九八号文書ト同文ニツキ省略ス)

502 『比志島氏文書』

(花押)

下 沙弥順阿弥陀佛所

可早任相傳實、領知山王御敷地園事、

右、件園、順阿自母手令相傳之旨、且證文明白也、且爲

御祈禱、停止他之妨、可領知順阿之狀如件、

建長三年十一月十四日

503 「忠時公御謄中」

「在東鑑四十三卷」

建長五年癸丑正月三日^{壬午}、將軍家^宗御行始、供奉布衣四

十四人之中、忠時有之、^同上、○廿一日^{庚子}、將軍家^上、御

參于鶴岡八幡宮、御後布衣供奉五十九人之中、忠時有之、

^{于時嶋津大}隅前可忠時、

504 「越前島津氏忠綱謄中」

「在東鑑四十三卷」

建長五年癸丑正月三日^{壬午}、將軍家^宗御行始、供奉布衣四

十四人之内、忠綱在之、^{于時豊後四郎}左衛門尉忠綱、

505 「右同」

同年正月廿一日^{庚子}、將軍家^宗御參鶴岡八幡宮、供奉行列

御後布衣 五十九人之内、忠綱有之、^{于時豊後四郎}左衛門尉忠綱、

506 「權執印文書」

「關東御下知内取要」

一西國地頭等、就御下文、致非法事、自余略之、所務者、

不可依年記、本地頭者追本下司之跡、可致者也、^(沙汰脱力)取要、

建長五年四月十七日

^(時頼)相模守在御判
^(重時)陸奥守在御判

^(長時)陸奥左近太夫將監殿

507 「同御下知内取要」

蓮花王院領肥前國長嶋庄雜掌左衛門尉重幸与庄下村地

頭薩摩十郎公^(義字)有禰、代子息左衛門尉公村^(相論力)条々、

自余略之、

一 下地事

所務者可依先例之間、任元久以往狀、於下地者、可及

領家進止矣、取要、

文永三年八月廿六日

相模守御判
左京權大夫御判

508 「比志嶋文書」

(雜書)

〔進守護所〕訴狀也

滿家院西侯名主法橋榮尊謹言上

爲伊集院內中河名主兵衛尉時村、寄事於神威、越往昔

〔例之〕稱中河内、任自由、令押領西侯内島地等、狼藉不

當子細事、

副進 具書等

一通 被押領粟島之作人滿家郡司代吉元、訴申正宮公

文所狀、副榮尊二箇度書札案、

一通 就彼狀、自公文所返狀、

一通 以榮尊愚札、觸遣伊集院地頭所其返事、

一通 被押領作物等注文

右、件堺相論爲新儀今案之条、巨細見于訴申吉元社家之

狀、縱彼兵衛尉雖有所存、須言上子細於關東、而隨御成

敗之處、件中河村号 正宮御領、相語御殿守、越來懸隔

之地、令點定三十余年無事知行吉元粟島之畢、乍存外吉

元且爲致穩便沙汰、且依奉恐神威、謹雖尋遣由緒於兵衛

尉之許處、理不盡之間答、無其詮之上、適彼點定使兩人

之内、僧壹人稱正宮御殿守、一人兵衛尉下人字政所男云云、

不知、而問糺御殿守眞僞之後、爲經上奏、吉元觸訴社家

之刻、如返狀者、兵衛尉謀計露顯畢、此粟島押領事者、

去年七月之比也、今年正月又引牽數十人、而押領西侯百

姓是清男即名内仁年來作來島畢、件島爲遠所之間、作人

即時不知之、偏盜人等之所行欵之由、相存之處、遙違期

承之、凡狼藉之至、驚遽之餘、還失度者哉、抑件兵衛尉

乍爲御家人、假神威、恣擬割取關東御領之条、奸謀甚、

何事如之、然而不享神非上(礼腕之)憲法御成敗也、因茲、靜期

上訴之處、幸有御下向、早且於御前、被召決兩方、糺返

先當時濫妨之作物等於本作人之後、欲被行狼藉罪科、若

無其御禁者、傍輩弥蜂起無疑者欵、次近年被押領之兩能

迫事、日來乍含愁鬱、依爲少事、自然罷過(畢之)、件堺實檢

之日、不可有其隱、所詮、如時村當所行者、不恐御式

目、不憚往昔例、一向以自由爲先、以濫妨爲宗、然者定

守護御成敗ヲモ令蔑如者欵、縱雖宿其身於神領、於見科

者、爭可令遁避哉、早云押領之地、云狼藉之咎、遂對決、

任道理、有御鎮於新競望堺者、可令言上京都・關東旨、

欲蒙御裁許、仍恐、言上如件、

建長五年五月 日 西侯名主法橋榮尊上

509

『比志島氏文書』

一又おなし代くわんといへとも、またくあにの心さしに

てへなし、おやのはからひにてこそあれなんと云うて、かきりあらぬ事をそむき、やうはいの心あらぬものへ、その代くわんしきをみなくゝとるへし、

建長五年七月十日

法橋榮尊在判

(本文書ハ五六四号文書ニ接続スルカ)

510 ゆつりわたすちやくし比志嶋太郎祐範

さつまの國滿家院内比志嶋・河田・西俣・城前田・上

原その、以上五ヶ所の事、

右、件の田はく山野へ、やうそんちうたいさうてん、たうちきやうさをいなきあひた、くわんとう御くたしふミいけ、調度もんしよ等、いしものこさす、祐範ニゆつりわたす事實也、但於方くくうしならひニ御ねんく等へ、せんれいニまかせて、きんしせしむへきなり、此旨をもて、永代さをいなくちきやうせしむへきなり、依ゆつり狀如件、

建長五年七月十日

法橋榮尊在判

511 『正文在西俣氏』

ゆつりわたす子息西俣弥三郎

さつまの國滿家院内西俣名主職以下之事

右、件の田はた山野へ、えいそんちうたいさうてん、たうちきやうさをいなきあひた、くわんとう御くたしふミいけ、調度もんしよ等、いしものこさす、弥三郎ゆつりわたす事實也、くうしならひニ御ねんく等へ、せんれいにまかせて、きんしせしむへきなり、このむねおもて、永くさおひなくちきやうせしむへきなり、比志嶋太郎へ、満家そう地頭といふ、あにの事下知したかい、永くむつましかるへし、よてゆつり狀如件、

建長五年七月 日

法橋榮尊

512

『比志嶋氏文書』

讓渡太郎佐範所々

薩摩國滿家院内西俣内八世井浦田島山野・平原居屋敷并河田内柿本一町・藺一ヶ所、小山西内上原藺一ヶ所、爲佐範五ヶ所惣領職、讓渡所也、可爲無相違知行狀如件、

建長五年七月十日

法橋榮尊(花押)

513

『公』

薩摩國滿家院内比志嶋・河田・西俣・城前田・上原藺

已上五ヶ所名主職事、任去建長五年七月十日法橋榮尊讓

狀、太郎佐範可爲彼職、但不帶榮尊讓狀正文之間、所相

貽御不審也、舍弟中有申旨之時者、可有改御沙汰

〔末紙切レテナシ〕

514 『入來院氏文書』

四郎重經にゆつりわたすところのそりやう

一所 (相模高座郡吉田荘) てらをの村 一々 いせの大きくてん

一所 (美作英多郡) 河會郷十丁北 一々 入來塔原

四至堺 ゆつり狀見たり

としをいて、もうくゝなるによりて、この狀よりさき

に、いかなる狀ありといふとも、又このうちも、別狀

いてくといふとも、重經かそりやうには、いさゝかの

わつらひあるまじき也、

一女子三人やしきううてんは、重經かりやうのうち也、

大番時へ、ふけんにしたかはん公事を、あひかくへし、

のちのそうもんのために狀如件、

平明重在判

建長五年十一月廿九日

僧在判

515 『正文在小根占池端氏』

將軍家政所下 氏佐汰進士親高五女 字地蔵

可令早領知大隅國祢寢院佐汰村内田柒段・蘭壹所事

右、亡父親高未處之間、(分脱カ) 所被配分也者、可令領掌之狀、

所仰如件、以下、

建長五年十二月廿八日

案主清原

令左衛門尉藤原

知家事清原

別當陸奥守平朝臣(重時) (花押)

相模守平朝臣(時頼) (花押)

516 『正文在小根占池端氏』

可令早 氏佐汰進士親高五女 領知大隅國祢寢院佐汰村

内田柒段・蘭壹所事

右人、任去年十二月廿八日安堵御下文之旨、可令領掌之

狀如件、

建長六年正月十四日

前尾張守平(名経時意) (花押)

517

〔忠時公御譜中〕

〔在東鏡四十四卷〕

建長六年甲寅正月廿二日申、將軍家宗御參鶴岳八幡宮、
御後供奉三十五人之内、忠時有之、于時大隅前可忠時、○八月十五日酉、鶴岡放生會、將軍家上、御參宮御出、行列御後布衣三十七人之中、忠時有之、上、同、

518

〔權執印文書〕

(花押)

新田宮公文所下

可爲早以僧睿尊慢陀羅堂

右以人、補任彼職、有限云寺役、云公事等、無懈怠、可令勤仕之狀如件、

建長六年三月 日

僧延政

519

〔忠時公御譜中〕

〔写在隈之城衆有馬休右衛門〕

〔をすすミとのこうけとり〕

大番已被勤仕候畢、其上者被歸國之衆、不及子細候歟、仍執達如件、

建長六年四月八日

(忠時) 在判

宮里郡司殿

520

〔小根占土池端文書〕

佐汰村内五女分

水田柒段

竹原田二段六十步、湊田内四段三百步、

小藤二外園壹所

右、任御下知之旨、配分如件、

建長六年五月八日

嫡男建部親綱在判

後家比丘尼代藤原在判

521

〔臺明寺文書〕

臺明寺住侶觀由房覺弁与物部太子、相論長聽寺敷地并新田四反事、不可替三通抄帳之趣由、依被注仰候、任觀由房道理、成敗候早、

次坊地并山王堂小開發事者、可爲山内評定之由、依被賜仰、尋申覺弁候之處、共領狀候間、任其旨、加下知候了、以此趣、可令披露衆中給之狀如件、

建長六年五月十九日

左兵衛尉藤原在判

臺明寺理性御房

〔在口裏〕
〔藤内兵衛尉殿消息案文〕

(論家既)にしまたの事、義弘ニるこんなく、すゑまでも水魚のこ
とくならんために、御さりふミ給へり候了ぬ、尤これ本
意候、たかひニ御中の事においてハ、ふしん候ましく候、
あなかしこく、

建長六年後五月四日

藤原義弘(花押)

上總法橋御房御返事
(采尊)

「在東鑑四十四卷」

建長六年甲寅六月十六日丙戌、鎌倉中物念之間、自昨夕、

諸人群參御所中、令著到之披閱、相州御覽云云、六十五
人參候之内、忠綱在之、于時島津
周防前司、

同年八月十五日乙酉、鶴岡放生會、將軍家宗御出、御後布衣
供奉卅七人之内、忠綱在之、于時周防
前司忠綱、

寺家公文所下 小濱村

補任 弁濟使職事

御前檢校永明

右人、以爲彼職、一事以上執行所務、御年貢米以下雜物
等、任先例、可致公平沙汰之狀、依長吏仰、下知如件者、
士民宜承知、勿違失、以下、

建長六年九月 日

刑部丞源

權寺主大法師判アリ

法橋上人位

法橋上人位

法橋和尚位判アリ

臺明寺若衆等謹言上 申請 衆裁事

請被 殊且爲佛法興隆、且爲山内繁昌、停止以山内坊

舍并園等、相讓里弟子緣者子細狀、

右、謹考先規、自如來在世之當初、至于末法澆季之時節、
師資之相承無絶、累代之教法尚存、雖然、當山爲躰、忘
諸寺之通例、抛師弟之芳契、或号在家弟子、讓与相傳之
坊室、或稱親類兄弟、付屬重代之佛經、松門蘭若之地忽

成聚落、經行座禪之床速變民烟、以當時推將來、無一字坊室、皆成在俗之居者歟、縱志住山禪徒稀雖有之、無其居所、空辭教山之月、徒交他鄉之塵、山門衰弊、何事如此、僧侶退散、偏含此恨、但在家居住之緣者、皆是有德、故致奉公之節、隨遂給仕之弟子者、貧道故朝暮拜顏許也、依忠与不忠不同、雖有恩与不恩別、弃恩入無爲之後、

所憑只是師範之原德也、(厚之)恨忘晨愾之承仕、何空被弃置哉、早遂僉議、欲停止此旨、就中、以佛法傳持之地、令讓与在家人者、冥神慮更難測、顯漏先師遺訓、尤可恐、

至可歎、望請恩裁、且爲佛法興隆、且爲後輩扶持、自今已後、以山内坊舍園等、寺中之住侶互令付屬者、一山繁昌、相傳遙致盡未來際、四院同心、給仕永繼日夜朝暮、仍錄事趣、言上如件、以解、

建長七年二月 日 若衆等

「解狀之旨、尤有其理、仍加署之、

別當覺西大法師(花押)

別當覺菱大法師(花押)

別當永榮大法師(花押)

僧行円大法師(花押)

別當兼學頭安榮大法師(花押)

別當重慶大法師(花押)
僧朗弁大法師(花押)
僧永海大法師(花押)
僧覺秀大法師(花押)
僧覺弁大法師(花押)

527 『全』

〔本文書ハ五二六号文書ノ末尾、爲後輩扶持以下ト同文ニツキ省略ス〕

528 『入來院氏文書』

〔編書〕
〔渋谷五郎四郎入道給安塔御下文〕

將軍家政所下 平重經

可令早領知相模國吉田上庄(高座郡)・内寺尾村・伊勢國箕田

大功田(除女子之)・美作國河會郷十町村河北・薩摩國入來

院内塔原郷(以上四至界各載讓狀)等地頭職事

右、任亡父五郎房定心寛元四年三月廿九日・建長三年八月廿四日讓狀、爲彼職、守先例、可致沙汰之狀、所仰如

件、以下、

建長七年六月五日

案主清原

令左衛門少尉藤原(景賴)

別當陸奥守平朝臣御判(重時)

相模守平朝臣御判(時賴)

知家事清原

529 「國分宮内澤氏藏」

(花押)

檢納 小濱村建長六年御年貢米事

合正米拾貳斛參斗玖升陸合陸夕者

右、附綱丁末弘、所檢納如件、

建長七年八月廿六日

刑部丞源(花押)

530 『入來院氏文書』

以失錯、令引墨於亡父(發卷)定心讓狀由事、被聞食訖者、依仰

執達如件、

建長七年十二月七日

(時賴)相模守在判
(重時)陸奥守在判

澁谷五郎四郎殿

531 「忠時公御譜中」

「在東鑑四十六卷」

建長八年丙辰正月一日癸巳、坑飯之後、相州・奥州已下人

々著布衣出仕、各候庭上如例、八十一人之中、忠時有之、

于時島津、○五日酉、將軍家同、有御行始于相州御亭、今

日出仕八十五人交名披覽之、以三十八人為供奉、布衣下

括、其中忠時有之、○六月廿九日子、放生會御參宮、供

奉人御點、散狀百六十二人之中、忠時有之、于時大隅前司、

○十月五日、改建長八年為康元元年、同修理亮亦在之、

532 「越前島津氏忠綱譜中」

「在東鑑四十四卷」

建長八年丙辰正月一日癸巳、著布衣出仕、各候庭上如例、八

十一人之内在之、于時周防、十月五日、改建長八年為康元元年、

533 「在東鑑四十六卷」

同年正月十一日卯、癸未刻、將軍家宗御參鶴岡宮、御後供奉

廿九人之内、忠綱在之、于時周防、前司忠綱、

534 「右同」

同年六月廿九日子、放生會、供奉人事、越州任例注惣人

數申下御點、散狀二百九人之内、忠綱在之、于時周防、

535 「在東鑑四十六卷」

建長八年八月十五日酉、鶴岡八幡宮放生會、將軍家宗御
出、御供五位十五人布衣之内、忠綱在之、于時周防、前司忠綱、

536 「久經公御譜中」

「在東鑑四十六卷」

建長八年丙辰六月廿九日子、放生會御參宮、供奉人事、
越州任例注惣人數申下御點、百六十一人之内、久時有之、
于時大隅、修理亮、

537 「越前島津氏二代忠行譜中」

忠行

三郎左衛門尉 周防守 母高鼻和左衛門尉有景女

越後局 法名佛如

自建長至文應、在鎌倉、事 宗尊親王、事詳于左、

538 「在東鑑四十六卷」

建長八年丙辰六月廿九日子、放生會御參宮、供奉人、任
例注惣人數申下御點、百六十一人之内、忠行在之、于時周防三郎

左衛門尉、雖然滿
御点十人之内也

539 「右同」

同年七月廿九日丁、放生會御參宮、供奉人事、被廻散狀、
其狀兩樣也、所謂一通方、各著布衣可供奉之由云云、一
通方、著直垂可供奉之由云云、其中申障之輩直垂來三人
之内、忠行在之、其言曰、父周防守著布衣可供奉由進奉
畢、弟六郎又爲流鏑馬射手、旁依令見沙汰難參之由申、
于時周防三郎左衛門尉、

540 「越前島津氏忠行三弟忠景譜中」

忠行

忠泰

忠景

五郎左衛門尉 大夫判官

歌人也、所詠和歌、入代々撰集、自建長至文永、
出入鎌倉營中、列宗尊親王蹴鞠詠歌會、事詳于左、

「在東鑑四十六卷」

建長八年丙辰七月十七日乙、將軍家宗御參山内最明
寺、此精舎建立之後、始御禮佛也、御車左右御供廿
人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉、

忠宗

號知覽 大夫判官 豊後介

忠秀

號宇宿 常陸介

541 「久經公御譜中」

「全上」

一同八年丙辰七月十七日乙、將軍家宗御參山内最明寺、
供奉人之中、久時有之、于時大隅修理亮

542 「在全四十七卷」

「全」

一正嘉元年丁巳十二月廿四日甲、當參人數之中、或可然
之人、或撰要秘之輩、始被結番廂衆、此事以仙洞之儀、
被模關東之條、頗可有其憚欵之由、被仰合于相州禪
室、就被答申篇、以內藏權頭親家・遠江十郎左衛門頼
連爲御使、内々被窺覈慮之處、有勅許、亦侍之參昇可
爲何樣哉之趣、同申之、於其境、至被嫌思食侍者、人
數定不足欵之旨、被仰下之云々、廂御所一日一夜結番、

共有六番、一番子午十人之中、久時有之、同上、○廿九
日酉、今日被結番御格子番云々、共有六番、一番十人
之中、久時有之、于時大隅修理亮久時

543

「全上」

「在全四十八卷」

一正嘉二年戊午正月一日辛、堽飯、兩國司被候大廂、其外
著座于庭上東西、東座百十八人之内、久時有之、于時大隅修理亮
亮、○二月廿五日、將軍家二所御精進始、御濱出供奉
八人之中、久時有之、于時修理亮久時、○三月一日亥、將軍家宗
二所御進發、後騎楚鞞廿騎之中、久時有之、○六月四
日壬、勝長壽院供養、曼荼羅供也、將軍家宗渡御、供
奉人御後廿二人之中、久時有之、于時修理亮久時、○十七日乙
未、來八月鶴岡放生會御參宮、供奉人事、爲申下御點、其
記書樣、百廿二人之内、久時有之、○八月十五日卯辛、鶴
岡放生會、將軍家宗御參宮、供奉人先陣隨兵十人之中、
久時有之、于時大隅修理亮久時

544

「東鏡四十八卷」

一正嘉二年戊午正月一日堽飯、相州禪室御沙汰、兩國司被

候大庇、其外著座于庭上東西、東座百十九人之中、有大隅大炊助、疑長久也、

「私云、中沼大炊助長久ハ三代久經初久時公ノ弟ナリ、弘安五年二月比志島氏文書等見合スベシ」

545

「東鏡」

一正嘉元年正月一日、東座百十九人之中、有大隅式部丞者、疑當忠康、

「私云、久經公弟式部少輔忠康ト云アリ、然レトモ忠康ノ弟ナル式部丞忠経ノコトナルヘシ」

546

「全」

一同年同日、百十九人之中、有大隅四郎者、疑當忠佐、

「私云、忠康ノ弟左衛門尉忠佐ト云アリ」

547

「忠時公御譜中」

「在東鏡四十七卷」
康元二年丁巳正月一日丁亥將軍家宗御行始相州禪室亭、
供奉人布衣十六人之中、忠時有之、
于時大隅前司忠綱、
朱カキ綱ハ時字誤歟

548

「全上」

同年三月十四日、改康元二年爲正嘉元年、

549

「全上」

正嘉二年戊午正月一日辛亥、于時島津前司、同修理亮亦有之、未、乙
十八人之内、忠時有之、
來八月鶴岡放生會御參宮、供奉人散狀百二十二人之中、
忠時有之、于時大隅前司、同修理亮亦有之、

550

「島津國史」

正嘉元年丁巳、是年三月改元正嘉、自二月以前猶是康元二年、春正月一日、幕府
臨北條時頼之第、供奉布衣十六人、公預焉、拋東鑑、原文書曰、大隅前司忠綱、綱字誤、三月十四日改元、拋大白、本史、冬十二月二十四日、道忍公爲鎌倉廂御所宿直、時分宿直六十人爲六番、道忍公在一番、拋東鑑、二十九日、道忍公爲御格子宿直、時分宿直六十人爲六番、道忍公在一番、同、二年戊午春正月一日、拋東鑑、三月一日、東坐百十八人、公及道忍公在東坐、拋東鑑、三月一日、幕府謁二所、供奉後騎二十人、道忍公預焉、同、夏六月四日、幕府臨勝長壽院曼荼羅供養、供奉班後隊二

十二人、道忍公預焉、上、秋八月十五日、鶴岡行放生會、幕府謁八幡宮、供奉班先陣隨兵十人、道忍公預焉、上、同

正元元年己未、是年三月改元正元、自二月以前猶是正嘉三年、春三月二十六日改元、拋大日、本史、冬十一月二十六日、

後深草天皇傳位於

龜山天皇、上、同

文應元年庚申、是年四月改元文應、自三月以前猶是正元二年、春正月一日燒飯、賜諸將八十六人坐、公預焉、拋東、二十日、幕府命北條

時賴、擇於番衆、以歌道・蹴鞠・管絃・右筆・弓馬・郭曲以下通一藝者、分爲六番、道忍公在三番、上、同

二月二十日、幕府命行方、改書廂御所宿直、仍爲六番、道忍公在五番、上、同夏四月十三日改元、拋大日、本史、

弘長元年辛酉、是年二月改元弘長、正月猶是文應二年、春正月一日燒飯、賜諸將坐、東坐九十五人、道忍公預焉、拋東、七日、幕府謁

鶴岡八幡宮、供奉布衣五十一人、道忍公預焉、上、同二月二十日改元、拋大日、本史、夏四月二十四日、幕府臨北條

時賴極樂寺山莊、供奉步行十七人、道忍公預焉、拋東、二十五日、幕府觀笠懸於山莊、射者十四人、道忍公

預焉、同上、川上十郎左衛門家傳笠懸・大追物法、非其門人不可得聞、然自齡岳公以來、世講大追物、旧譜載其手組、不一而足、

足、正保四年講犬追物於王子原、林春齋有記、安永四年命川上氏講犬追物於演武館、使家老及群有司觀之、臣等与寓目焉、寬政二年復命川上氏講犬追物、如安永例、合而考之、則亦有以其大略矣、至於笠懸則手組載旧譜者太少、而今日川上氏雖伝其法、未講其伎、外人無由窺其一班云、下学集云、笠懸者、懸笠而射之也、後以皮為射的、別無所考、秋七月十二日、幕府及中

御所御方、臨山内最明寺、中御所御方供奉步行九人、道忍公預焉、上、同八月十五日、鶴岡行放生會、幕府謁

八幡宮、供奉布衣三十三人、道忍公預焉、上、同二年壬戌、事缺不書、

三年癸亥春正月一日燒飯、賜諸將九十九人坐、道忍公預焉、拋東、幕府及中御所御方、臨北條時賴之第、中

御所御方供奉二十人、道忍公預焉、上、同七日、幕府謁鶴岡八幡宮、供奉後隊四十九人、道忍公預焉、上、同

551 『臺明寺文書』

注進 自故理性房覺明被進町殿田島事

合

曾野郡重枝名鳩牟多田柒段 在證文十一通

同郡重富迫田陸段 證文二通

同名萱尾迫貳段 證文一通

上小川村餅田伍段 證文三通

得丸名加治屋新田壹町内北伍段 證文三通

但至南五段者、日本無證文上、本領主有申旨、

曾野郡重枝名倉原田肆段 證文一通

同名止上牟多田陸段 證文一通

同名萱尾迫牟多田伍段 證文一通

曾野郡重武名垂門田伍段 但證文者、依為類券、案文有之、

島地

曾野郡石原秦入道領内蘆伍ヶ所 證文七通

右、注進如件、

正嘉元年四月廿三日

僧安榮在判

僧朗弁在判

僧順覺在判

554 「越前島津氏譜中」

二世
忠行

忠泰

四郎左衛門尉

自正嘉至弘長在鎌倉、昵近宗尊親王、事詳于左、

555 「在東鑑四十七卷」

正嘉元年丁巳十月一日 壬午 大慈寺供養也、曼茶羅供大阿

闍梨三位僧正頼兼、職衆三十口、將軍家 宗 御出、御布

施并被牽御馬十疋、四馬鹿毛忠泰引之、 于時周防四郎左衛門尉兄弟三郎左衛門尉

引之、

552 「越前島津氏忠綱譜中」

「在東鑑四十七卷」

正嘉元年丁巳六月一日 甲申、於鎌倉御所有旬御鞠、將軍家

宗 尊御符、令立御、見證數輩之内、忠綱在之、 于時周防前司、

553 「右同」

同年十月一日 壬午 大慈寺供養也、將軍家 宗 御出、供奉御

後布廿八人之内、忠綱在之、 于時周防守忠綱

556 「越前島津氏忠行三弟忠景譜中」

三世
忠行

忠泰

四郎左衛門尉

自正嘉至弘長在鎌倉、昵近宗尊親王、事詳于左、

555 「在東鑑四十七卷」

正嘉元年丁巳六月廿三日 丙午 巳刻、將軍家 宗 為御納涼、入

御相模太郎殿山内泉亭、御遊宴、御騎馬候御駕左右十二

人之内、忠景在之、 于時周防五郎左衛門尉忠景、

引之、

556 「越前島津氏忠行三弟忠景譜中」

「在東鑑四十七卷」

正嘉元年丁巳六月廿三日 丙午 巳刻、將軍家 宗 為御納涼、入

御相模太郎殿山内泉亭、御遊宴、御騎馬候御駕左右十二

人之内、忠景在之、 于時周防五郎左衛門尉忠景、

557 「在東鑑四十七卷」

正嘉元年十二月廿四日 甲辰 當參人數之中、或可然之人、

或撰要樞之輩、始被結番廂衆、此事以仙洞之儀、被摸關東之條、頗可有其憚欵之由、被仰合于相州禪室、時、入道就被答申之篇、以內藏權頭親家・遠江十郎左衛門尉頼連

等爲御使、内々被窺覷慮所、有勅許、亦侍之参昇可爲何

樣哉之趣、同申之、於其境、至被嫌思食侍者、人數定不足欵之旨、被仰下之云云、絳已嚴重之間、以近衛將以下

等爲番頭、故染御震筆令書御簡、次伺見参結番事、雖被定置之、此一兩年其來自然懈緩之間、今日更被撰勤厚族、

被定之云云、廂御所一日一夜結番、共有五番十人内、忠景有之、于時周防五郎左衛門尉又伺見参結番、共有六番、一番三人之

内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉

558 「在東鑑四十七卷」

同月廿九日己酉、二所御参詣供奉四人被書加、先度依書漏

也、其内忠景在之、于時周防五郎左衛門尉同日、御格子上下被定結番、共有六番、六番十人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉忠景、

559 「越前島津氏忠綱譜中」

「在東鑑四十七卷」

康元二年丁巳正月一日亥、寤飯、以後、將軍家宗御行始

相州禪室亭、供奉布衣十六人之内、忠綱在之、于時周防三月十四日、改康元二年爲正嘉元年、前可忠綱

560 「右同」

康元二年二月二日戊午、將軍家宗御参鶴岡八幡宮、供奉五位十人布衣之内、忠綱在之、于時周防前可忠綱、

561 「越前家二代忠行譜中」

康元二年丁巳二月二日戊午、將軍家宗御参鶴岡八幡宮、著直垂候御車左右衆十一人之内、忠行在之、于時周防三郎左衛門尉忠行、

562 「右同」

同年三月十四日、改康元二年爲正嘉元年、

563 「在東鑑四十七卷」

正嘉元年丁巳十月一日壬午、大慈寺供養也、曼茶羅供、已刻將軍家宗御出也、被牽御馬十疋、四鹿毛忠行引之、于時三郎左衛門尉忠行、同四郎左衛門尉忠泰共引之、

564 「比志嶋文書」

比志嶋・河田・西俣・城前田・上原蘭、已上五ヶ所之

惣領職者、太郎祐範仁讓渡、但其内弟共仁代官職を可
宛事、

一河田名代官宮次郎、但此内孫江田三反、又元明か居屋
敷者、乙二郎可領知、

一西俣名代官者、弥三郎守忠、但此内邊牟木之木場山口
田五反者、乙方可領知、

一城前田并河田内孫江田元明か居屋敷之代官職者、乙次
郎又同代官登謂共、全非兄之志、親之志計にてこそあ
れなとゞいて、限有むする事お背キ、向背之心有ん
物は、其代官職お皆と取へし、

(本文書ハ五〇九号文書ノ前半部ナルヘシ)

565 薩摩國滿家院比志嶋・河田・西俣・城前田・上原蘭五ヶ
所事

任去建長五年七月十日法橋榮尊讓狀・関東御下知御教書、
太郎祐範當知行之上者、不及異儀狀如件、

〔正嘉次〕
正嘉元年八月廿二日
〔忠時〕
前大隅守(花押)

比志嶋太郎殿

566 『調所氏文書恒久譜中』

大隅國御家人姫木五郎義用申、守護所調所職事、訴狀副
具書遣之、所申無相違者、可致其沙汰由、可被加下知、

若又有別子細者、可令注申給之由所候也、仍執達如件、
〔正嘉元年〕
十一月三日
頼繼

〔肥後〕
藤内右衛門入道殿

567 大隅國御家人姫木五郎義用申、守護所調所職事、御書下

副訴狀 如此、如狀者、申所無相違者、可致其沙汰之由、
具書 可被加下知、若又有殊子細者、可注申云々者、早任被仰
下之旨、可被致其沙汰之狀如件、

正嘉元年十一月十三日 沙弥(花押)

敦賀刑部左衛門尉殿

568 『越前島津氏忠綱譜中』

〔在東鑑四十八卷〕
正嘉二年戊午正月一日 辛 垵飯、兩國司被候大庇、其外
著座于庭上東西、東座百十八人之内、忠綱在之、
〔于時周防守〕

著座于庭上東西、東座百十八人之内、忠綱在之、
〔于時周防守〕

〔右同〕

569

正嘉二年六月四日^{壬午}、勝定壽院供養也、曼茶羅供、將軍家^宗渡御也、供奉御後十二人之内、忠綱在之、^{于時周防守忠綱}

570 「右同」

同月十七日^{乙未}、來八月鶴岡放生會御參宮、供奉人散狀百廿二人之内、忠綱在之、^{于時周防守忠綱}

571 「右同」

同年八月十五日^{辛卯}、鶴岡放生會、將軍家^宗御參宮、御後供奉五位^{布衣下括}十六人之内、忠綱在之、^{于時周防前司忠綱}

572 「越前島津氏二代忠行譜中」
「在東鑑四十八卷」

正嘉二年戊午正月一日^{辛亥}、御家人著座于庭上東西也、東座百十八人之内、忠行在之、^{于時周防三郎左衛門尉}

573 「右同」

同年六月四日^{壬午}、勝長壽院供養也、曼茶羅供、大阿闍梨松殿法印良基、職衆三十口、將軍家^宗渡御、御布施取并御馬十足被牽、四馬忠行引之、^{于時周防三郎左衛門尉忠行、同四郎左衛門尉忠泰云、}

574 「在東鑑四十八卷」

正嘉二年六月十七日^{乙未}、來八月鶴岡放生會御參宮、供奉人被申下御點百廿二人之内、忠行在之、^{于時周防三郎左衛門尉}

575 「越前島津氏譜中二代忠行弟忠泰譜中」
「在東鑑四十八卷」

正嘉二年戊午正月一日^{辛亥}、垵飯、兩國司其外著座于庭上東西、東座百十八人之内、忠泰在之、^{于時周防四郎左衛門尉}

576 「右同」

同年六月四日^{壬午}、勝長壽院供養也、曼茶羅供、將軍家^宗渡御也、御馬十足被牽、四馬下手忠泰引之、^{于時周防四郎左衛門尉忠泰、上手兄三郎左衛門尉引之、}

577 「越前島津氏忠行弟忠景譜中」
「在東鑑四十七卷」

正嘉二年戊午正月一日^{辛亥}、垵飯、御家人出仕、著座于庭上東西、東座百十八人之内、忠景在之、^{于時周防五郎左衛門尉}

578 「右同」

同月二日壬子、將軍家宗御行始相州禪室時頼御第、供奉之
六位廿二人之内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景

579 「右同」

同月十日庚申、將軍家宗御參鶴岡宮、著直垂帶劔、候御車
左右九人之内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景

580 「在東鑑四十八卷」

正嘉二年三月一日辛亥辰刻、將軍家宗二所御進發、候御駕
左右步行十五人之内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景

581 「右同」

正嘉二年六月四日壬午、勝定壽院供養也、曼茶羅供、大阿
闍梨松殿法印良基、職衆三十口、巳刻將軍家宗渡御、著
直垂帶劔、候御車左右十人之内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景

582 「在東鑑四十八卷」

正嘉二年六月十一日己未刻、將軍家宗入御山内最明寺御
亭、供奉人步行十三人之内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景

583 「右同」

同月十七日乙未、來八月鶴岡放生會御參宮、供奉人事、注
惣人數被申下御點、百廿二人内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉

584 「右同」

同年八月十五日辛卯、鶴岡放生會、將軍家宗御參宮、帶劔
著直垂、候御車左右十一人之内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景

585 「調所氏文書恒久譜中」

下

可早任御下知旨、致沙汰守護所調所職事、

右、去正嘉元年十一月三日御下知之狀云、大隅國御家人
姬木五郎義用申守護所調所職事、訴狀副具書、遣之、所申
無相違者、可致其沙汰之由、可被加下知、若又有別子細
者、可令注申給之由、所仰也云、同年十一月十三日肥
後藤内右衛門入道殿施行云、大隅國御家人姬木五郎義用
申守護所調所職事、御教書副訴狀具書、如此、如狀者、所申無
相違者、可致其沙汰之由、可被加下知、若又有殊子細者、
可注申之者、早任被仰下之旨、可致其沙汰之狀如件云、
者、早任被仰下之旨、可致其沙汰之狀如件、

正嘉二年二月一日 守護代左衛門尉藤原(藤原) (花押)

586 『入來院氏文書』

(花押)

廳宣 留守所

可早以地頭平重經・同重賢・字荒六等、沙汰進入來院
半分所當米事、

國定肆拾柒石壹斗肆升伍合加輕物半分肆石陸斗參升定 國定

除樂校官立用田二町五段所當米十石

右、郷半分内、荅原重經、中村・庄籠・下副田等重賢、

柏嶋水田半分荒六、爲請所、有限佛神事・管府役例立用

田外、不論旱水不熟損亡、任請文員數、可沙汰進、若背

請文狀、致未進對捍者、可停止請所之狀、所宣如件、留

守所宜承知、不違失、以宣、

正嘉二年九月 日

大介藤原朝臣

587 「引返シツラニ」
「これハやまうちゆつりしやう」

讓与 平太子所仁

薩摩郡内平礼石寺水田畠地等事

(マ) 但致四至在本證文

右、件於寺領者、僧忠兼先祖相傳之所領也、仍平太子仁、

限永代、本證文一通并守護所殿證文一通相副天、所讓与

實也、然仁任讓狀之旨、致子孫、無相違可令領知、

但彼寺領内於寺園一ヶ所・水田壹丁仁者、充(マ)旁御勤之五

廻一任國之勘料仁、可爲住僧之沙汰、自此外、不可住僧

煩、又彼寺住僧与相次忠兼之末物者、爲一味同心可有、

若於心相違有惡事者、不可後悔、可思量也、仍爲後日證

文如件、

正嘉三年二月二十九日

僧忠兼判(スリケス)

「是蒲生土山内某文書」

588 「渋谷家譜抄」

幕府九州ニ令テ陸海ノ防備ヲ嚴ニス、九州ノ守護并御家

人以下ノ輩ニ觸ラレ、大隅日向國ノ役并筑前ノ今津濱ノ

事、先ニ之レヲ除カレタルト云トモ、要海ノ爲ト云、故

ノ如ク警固ス、

正嘉三年二月三日

589

『蒲生氏山之内某文書』

山内之四至之間等事

任本證文之狀、東田畔 南河

西山西縣 北温谷

忠直讓狀云、此四至之内ニ於テハ、不可致一塵之違乱を

も、若是寺内仁致違乱を者、不可有忠直之子孫、被載(ツカ)但

於西四至者、山ハ廣博ト有シカハ、寺サウ(ツカ)ヘイノ時、忠友

寺所司相共仁郷ミウ藥師之山之西ノ猿走ノ途リ、立野ノ

頭ヲ踏途テ、清水大道仁踏定メラレ、若世間之習ハ、末々

仁ナレハ、女房之身ハワウ弱ナリナントモ思テ、彼四至之内を

有ラムニハ、一塵之違乱ナリトモ令不可承引、書文之狀立申(分カ)

テ、可蒙御成敗也、亦東四至之内忠友之屋敷等ハ、忠友

之屋敷之便吉ト有シカハ、爲兄弟之中カハ、爲屋敷一旦奉

所也、雖然、忠友死去早、不奉永代仁、至于其末仁、於

テ彼寺内ニ、致水火之諍ヲ於テハ、違乱有ラムニ、所詮、

任書文狀仁、忠兼之子孫、彼屋敷等モ沙汰之、可知行也、

末々爲仁此ヲ注於リ、若彼四至之内仁違乱有ラムニハ、此

狀を上ニ言上シテ、可蒙御下知也、爲後日、子細之狀如

件、

正嘉三年大才四月 日

僧忠兼判スリケス

590

『臺明寺文書』

僧良尊謹辭

奉沽渡水田重富名内宮富名太迫田六段事

副進 證文三通

一通 沙弥西願沽文

一通 理性御房讓狀案 但依有類地副案 并消息案

一通 町殿御下知案 依有類地副案

右、件田ハ、理性御房より町殿にゆつりまいらせられ候

田也、仍町殿御下知のむねにまかせて、ようくのちき

物あるにて、けみやうちとくに、ぬやうねんおかきて

うりわたしたてまつることしちなり、よて後日のために、

沽券之狀如件、

正嘉三年四月十六日

僧良尊在判

「在右裏」 弟子 正嘉元年四月廿三日 弟子讓大貳房、大貳房代良尊假名智得

「在口裏」 亮之、知得讓慶明

「太迫田證文 孝榮房沽券」

591

『池端文書』

祇寢院司建部清綱辭

讓与 頼綱得分田畠并山野等事

一用松名

在四至 東限石尾 西限北俣田綱手 南限河 北限田代登大路

水田貳町貳段内

字北俣五段 同南俣五段 同三坪八段

同山下二段 同蘭田一段 同赤坂田一段

一郡本内水田貳町・蘭參ヶ所事

宮脇壹所

在四至 東限若宮參詣大道宮田西丸西ハタメ 西限大河 北限尾上南ハタメ十崎 南限池田北岸

協持教房居蘭

在四至 東限尾世 西限大溝 北限サケ山溝 南限蘭并山本境

南入道居蘭

在四至 東限大道 西限池 北限蔵宮田 南限大道

水田貳町内

圓田四段 牟多北副伊佐木田六段 馬門内壹町内

清親作五段 權太夫作河原田五段

一山野肆ヶ所 一所波伊 一所猪狩倉 一所小豆野ハヘ

一所松野ハヘ

此四ヶ所、在四至 東限田代境 西限波伊立山谷登見方山谷 北限直世境 南限辺津加大道葛蒲石

右、田畠山野等者、守護狀之旨、可令領知、若令他人沽

却者、相本名天可令沽却、但於佛神事役、御領物御佃新入田并方之公事果役者、本名弁内、以五分壹天可令勤仕、但用松名加定也、仍讓狀如件、以辭、

正元々年後十月五日 散位建部清綱判

592

「忠時公御譜中」

「在東鏡四十九卷」

一正元二年庚申正月一日^己、筑飯、着布衣列候庭上衆八十六人之中、忠時有之、^{于時島津 大隅前司}○四月十三日、改正元二年爲文應元年、

593

「久經公御譜中」

「全上」

一同年正月廿日^{戊子}、於御所中被定早晝番衆、其内於壯士者、歌道・蹴鞠・管絃・弓馬・鄂曲以下、都以堪一藝之輩、於時依可有御要、被結番定、去比御要之時無人之間、殊以此御沙汰出來、仍仰小侍況於藝能輩目六、度々被仰合相州禪門治定云々、工藤三郎左衛門尉光泰奉行之、城四郎左衛門尉爲清書、定共有六番、三番^寅十三人之中、久時有之、^同○二月廿日^{戊午}、廂

御所結番、更被書改、行方書之、定共有六番也、五番十二人之中、久時有之、于時大隅修理亮

594 「越前島津氏忠綱譜中」

〔在東鑑四十九卷〕

正元二年庚申正月一日己、己、埃飯、兩國司評定衆已下、著布衣出仕、列候庭上、八十六人之内、忠綱在之、于時周防前司

595 「右同」

同月十一日己卯、將軍家宗尊御參鶴岡、御後供奉五位布衣布衣之内、忠綱在之、于時周防前司忠綱

596 「右同」

同年四月十三日、改正元二年爲文應元年、

597 「右同」

文應元年庚申十一月廿七日庚寅卯刻、將軍家宗尊御參鶴岡宮、辰刻二所御進發、御後供奉三十二人之内、忠綱在之、于時周防前司忠綱

598 「越前島津氏二代忠行譜中」

〔在東鑑四十九卷〕

正元二年庚申正月一日己、己、埃飯、兩國司評定衆以下、著布衣出仕、列候庭上、八十六人之内、忠行在之、于時周防左衛門尉

599 「越前島津氏忠行弟忠景譜中」

〔在東鑑四十九卷〕

正元二年庚申正月一日己、己、埃飯、著布衣出仕、列候庭上之儀如恒、八十六人之内、忠景在之、于時周防左衛門尉

600 「右同」

同日未刻、將軍家宗尊御行始、供奉人六位十八人之内、忠景在之、于時周防左衛門尉

601 「右同」

正元二年正月廿日戊子、於御所中被定(置)早晝番衆、其内於壯士者、歌道・蹴鞠・管絃・右筆・弓馬・郢曲以下、都以堪一藝之輩、於時依可有御要、被結番定、共有六番、三番十三人之内、忠景在之、于時周防左衛門尉忠景

602 「在東鑑四十九卷」

正元二年二月廿日^午、廂御所結番、更被書改、共有六番、六番十二人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉

文應二年辛酉正月一日^亥、堽飯、兩國司以下著布衣出仕、相分于庭上東西著座、東座九十五人之内、忠行在之、于時周防三郎左衛門尉

603 「右同」

同年四月三日^庚、將軍家^宗入御于入道陸奥守亭、御息所御同車、供奉布衣四十六人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉忠景

607 「越前家二代忠行弟忠景譜中」

文應元年庚申十一月廿一日^甲、將軍家^宗依可令始二所御精進御、中御所入御陸奥入道亭、供奉廿三人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉忠景

604 「越前島津氏忠行四弟忠賴譜中」

忠賴
六郎左衛門尉
自正元年至弘長在鎌倉、事宗尊親王、事詳于左、

608 「右同」

文應元年十一月廿七日^庚卯刻、將軍家^宗御參鶴岡宮、辰刻二所御進發、御馬左右步行廿人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉忠景

605 「在東鑑四十九卷」

正元二年庚申正月一日^己、堽飯、兩國司評定衆已下人人著布衣出仕、列座庭上之儀如恒、八十六人之内、忠賴在之、于時周防六郎左衛門尉

609 「右同」

同年十二月廿六日^己、今夜將軍家^宗御方違于相模太郎殿御亭、中御所御同車、供奉廿三人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉忠景

606 「越前島津氏二代忠行譜中」

「在東鑑五十卷」

610 「國分寺文書」

安樂寺別宮薩摩國分寺所司神官等申守護代沙弥西念放入使者於神領、致非法由事、(長徳)菅三品申狀副訴狀、遣之、子細見狀、事實者甚不穩便、早任先例、可令停止其妨、若又有殊由緒者、可申之由、可令加下知之狀、依仰執達如件、

文應元年十月五日

(長時)武藏守在御判

(政村)相模守在御判

大隅前司殿

611 「久經公御譜中」

(在東鑑五十卷)

一文應二年辛酉正月一日亥、煨飯、兩國司以下着布衣出仕、先候東西侍、申出御時刻之後、相分子庭上東西著座、東座九十五人之中、久時有之、上、〇七日、己、將軍家宗御參鶴岡八幡宮、供奉人布衣五十一人之中、久時有之、上、

612 「全上」

(全上)

一弘長元年辛酉四月廿四日卯、將軍家上、入御于輿州禪

門極樂寺新造山莊、御息所同渡、御供奉御所御方、步

行十七人之中、久時有之、上、〇廿五日丙辰、於極樂寺

御第有御笠懸、射手十四人之中、久時有之、上、〇七

月十二日壬申、將軍家宗入御最明寺第、覽弓・鞠・競馬

・相撲等勝負、亦管絃・詠歌以下、有御遊宴等云、供

奉人中御所御方、將軍家御息所步行九人之中、久時有之、但還

御之時騎馬、上、〇八月十五日己、鶴岡放生會、御息

所爲覽舞樂渡御、其後將軍家宗御出、供奉人布衣三十

三人之内、久時有之、于時大隅修理亮

613 「越前島津氏忠綱譜中」

(在東鑑五十卷)

一文應二年辛酉正月一日亥未刻、將軍家宗并中御所御行始相模禪室亭、中御所供奉廿一人之内、忠綱在之、于時周防前司

614 「右同」

同月七日己、將軍家宗御參鶴岡八幡宮、布衣之供奉五

十一人之内、忠綱在之、于時周防前司

615 「右同」

同年二月七日己亥、將軍家宗御息所令詣鶴岡宮給、供奉淨衣廿六人之内、在之、于時周防前可忠綱、

616 「右同」

同月廿日、改文應二年爲弘長元年、

617 「右同」

弘長元年辛酉八月十五日己乙、中御所爲覽舞樂、渡御鶴岡宮、供奉布衣廿一人之内、在之、于時周防前可、

618 「越前島津氏忠行弟忠景譜中」

「在東鑑五十卷」

文應二年辛酉正月一日亥癸、院飯、兩國司以下著布衣出仕、先候東西侍、次申出御時刻之後、相分于庭上東西著座、西座七十人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉、

619 「右同」

同日未刻、將軍家宗御行始相模禪室時亭、供奉三十一人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉忠景、

620 「右同」

同月二日甲子、院飯、四御馬忠景引之、于時周防五郎左衛門尉忠景、 下手同六郎左衛門尉忠賴也、

621 「在東鑑五十卷」

文應二年正月七日己乙、將軍家宗御參鶴岡八幡宮、供奉人帶劔衆十五人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉、

622 「右同」

同年二月七日己亥未刻、御息所令詣鶴岡宮御、彈正少弼候陪膳、忠景候役送、于時周防五郎左衛門尉、 同供奉人著淨衣廿六人内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉忠景、

623 「右同」

弘長元年辛酉四月廿四日卯乙、將軍家宗入御于奥州禪門極樂寺新造山莊、御息所同渡御、相州禪門豫令候給、供奉步行十七人之内、忠景在之、于時周防五郎右衛門尉、蓋右衛門者左衛門誤歟、

624 「在東鑑五十卷」

弘長元年七月十二日壬申、將軍家宗入御最明寺第、覽弓、

鞠・競馬・相撲等勝負、亦管絃・詠歌以下、有御遊宴等云云、供奉步行十八人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉

625 「右同」

同月十三日酉、中御所御方御息所也、自今已後、依可被始護身、爲御驗者休所、於御所近邊、被點人人宿所、向後可爲巡役之由、被仰下之、可被點宿所人人十四人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉、雖然其後御免也、

626 「在東鑑五十卷」

弘長元年十月四日巳、將軍家宗入御于最明寺御、中御所自去月有御座之故也、供奉步行十五人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉忠景、

627 「越前島津氏忠行弟忠頼譜中」

「在東鑑五十卷」
文應二年辛酉正月一日癸、垵飯、兩國司以下著布衣出仕、先候東西侍、次申出御時刻之後、相分子庭上東西著座、東座九十三人之内、忠頼在之、于時周防六郎左衛門尉、

628 「右同」
文應二年正月二日甲子、垵飯、四御馬忠頼、于時周防六郎左衛門尉忠頼、下手引之、上手者五郎左衛門尉忠景也、

629 「右同」

同月七日巳、將軍家宗御參鶴岡宮、供奉布衣五十一人之内、忠頼在之、于時周防六郎左衛門尉、

630 「右同」

弘長元年辛酉八月十五日乙巳、鶴岡放生會、將軍家宗御出、供奉帶劔十五人之内、忠頼在之、于時周防六郎左衛門尉忠頼、

631 「越前島津氏忠行弟忠泰譜中」

「在東鑑五十卷」
弘長元年辛酉七月十二日壬申、將軍家宗入御最明寺第、中御所御方供奉步行九人之内、忠泰在之、于時周防四郎左衛門尉、

632 「在東鏡五十卷」

弘長元年九月廿日己卯、今夕中御所將軍家御息所入御最明寺御第、爲御服藥御藥湯等事、暫可有御座云云、供奉步行十四人

之内、忠泰在之、于時周防四郎左衛門尉忠泰、此間弘長二年欠、

633 『水引執印文書』

薩摩國御家人麿嶋中務次郎康邦与矢上左衛門尉盛澄後家相論、當國麿嶋郡司并弁濟使兩職事、散狀披見了、此事去二月中、可召進彼後家之由、被下関東御教書之間、相觸之處、于今不參之条、太自由也、不日可被催

弘長元年四月五日

(北条時茂左近將監)

大隅式部丞殿

634 『公文書』

薩摩國御家人中務次郎康邦与矢上左衛門尉盛澄後家相論、麿嶋郡司并弁濟使兩職事、去四月五日重御教書、同七月四日到來、謹以拜見仕候了、任被仰下之旨、不日可令參上之由、令催促候之處、後家尼狀進上之、以此趣、可有御披露候、恐惶謹言、

(弘長元年)

七月十二日

(山田式部丞藤原忠継請文(裏花押))

進上 佐治左衛門尉殿

635 肝付四代兼員譜曰、弘長元年辛酉、千壽王丸既名兼世、

奉職無狀、里民不服、收納使乃聞于 官、於是七月、預所下文罷兼世職、以左馬允伴實兼、令代此職、實兼賢之嫡男也、明年八月下文、亦如之、

636 『鹿屋氏文書』

下 嶋津御庄大隅方鹿屋院

補任 弁濟使職事

伴實兼

右、件職者、兼賢死去後、次男兼世望申之間、宛賜處、付御年貢等、不致沙汰、不忠無極之間、收納使訴申之折節、嫡子實兼望申彼職条、非無其謂欵、仍停止兼世職、以嫡男實兼補任彼職畢、恒例臨時御公事等、無懈怠、可致其沙汰也、若又雖爲實兼、付御年貢等致不忠者、可被改易也、土民等宜承知、無違失、以補、

弘長元年七月 日

預所法眼和尚位(花押)

637

『正文在山田氏載于三代宗久傳』

うりわたせんそさうてんの私りやうの事

在伊集院用丸内、水田壹町貳段、字原田垣本者、

右、件田者、寂澄かさうてんのそりやう也、しかるを、よ
うくあるによて、本そたうならひにまんさうくうし、
りんしくわやく、うさ御さうえいやく、正宮御さうえい
やくにいたるまで、ちやうし候て、本せうもんあいそえ
て、石谷久徳に、やうねんをかきて、うりわたすところ
實也、井みそにいたるまで、いらんあるへからす、た
し、このたには、しりかいのよね貳舛、かちしのむしろ
貳枚なし候、その御弁へ、本名へなさせ給へく候、よて
きやうこうに、たのさまたけあるへからさらんために、
うりけん如件、

弘長元年 歲次 辛酉 十月廿八日

沙弥寂澄在判

紀清忠在判

【右書次目異判】
【花押】

638 「引返しウラニ」「遠矢入道カ」
「とをやの入道申へふのもんしよ」

ゆつりあたふ

女子わらはなとらわうかところ、やまとのゐんのう
女「童」女「虎」王「山」門「院」

ちのてんはくらの事、

【別府】
へふ

【四至】
し、北へうしくひ里より山ミち、南へ田ふち、東へ
おほちさかりの溝くたり松もと田井のたのむらの道、
西へあつかりをの大道、

田

つほく取帳にみへたり、

件名田畠らへ、秀忠が先祖相傳の所よりやうなり、しか
るを、ゑいたいをかきて、女虎王ニ讓あたへをわりぬ、

方々の所當米御公事へ、田數のふんけんにしたかて、惣
領姫夜叉ニくわへて、へんきんせらるへし、よて後日の

□けいのために、ゆつり狀如件、

弘長貳年 壬戌 三月九日 平秀忠在判

【山門家ナラン】

「在忠時公御譜中」

【國分氏文書】「字在指宿助左衛門尉トアリ」

639

京都大番事、催具薩摩國御家人等、自明年七月一日到同

十二月晦日、可令勤仕之狀、依仰執達如件、

弘長二年七月十日

武藏守御判
相模守御判

島津大隅前司入道殿

下 嶋津御庄大隅方鹿屋院

補任 弁濟使職事

左馬允伴實兼

右、件職者、兼賢相傳之職也、然者以嫡子實兼、可爲彼職之狀如件、

弘長二年八月 日

預所法眼和尚位(花押)

可被存其旨之狀如件、

弘長二年八月十一日

沙弥(花押)

薩摩郡平三郎殿

643 『公御譜中』

〱

京都大番勤仕事、御教書案文遣之、早任被仰下之旨、可被參勤候、但寄事於老耄出家、立代官事、御誠候也、可被存其旨之狀如件、

弘長二年八月十一日

沙弥(花押)

滿家非志嶋太郎殿

641 『忠時公御譜中』

「写在指宿助左衛門尉トアリ」

京都大番勤仕事、御教書案文遣之、早任被仰下之旨、可被參勤候、但寄事於老耄出家、被立代官事、御誠候也、可被存其旨之狀如件、

弘長二年八月十一日

沙弥(花押)

薩摩平十郎殿

「一本平三ニ作ル」

『正文在比志島監物範員』

京都大番勤仕事、御教書案文遣之、早任被仰下之旨、可被參勤候、但寄事於老耄出家、被立代官事、御誠候也、

645 『國分氏文書』

京都大番勤仕事、御教書案文遣之、早任被仰下之旨、可被參勤候、但寄事於老耄出家、被立代官事、御誠候也、可被存其旨之狀如件、

弘長二年八月十一日

沙弥在判

國分左衛門尉殿

646

『全』

京都大番事、被勤仕候之由、承候早、同市來院分父子相

共、以同前候、今者可有歸國候也、穴賢々々、

〔年紀不詳〕

正月卅日

〔道弘〕
在判

國分左衛門尉殿

647

『全』

京都大番役之間事、急々可被勤仕候、又中務丞殿書札加

様候也、穴賢々々、

〔年間不詳〕

二月十四日

在判

國分左衛門尉殿

〔右二通、年紀詳ナラサレトモ此ニ載置也〕

648

〔久經公御譜中〕

〔在東鑑五十一卷〕

弘長三年癸亥正月一日壬午、垵飯、相州已下著布衣出仕如

常、申時刻之後、各降庭上座列、九十九人之中、久時有

之、同、○同日未刻、將軍家上、御行始入御于相州禪室

之亭、中御所方御息所、供奉二十人之中、久時有之、同、○

七日戊子、將軍家上、御參鶴岳八幡宮、供奉御後四十九人

布之中、久時有之、于時大隅修
理亮久時、

649

〔越前島津氏忠行弟忠景譜中〕

〔在東鑑五十一卷〕

弘長三年癸亥正月一日壬午、垵飯、相州已下著布衣出仕如

常、申時刻之後、各降庭上座列、九十九人之内、忠景在

之、于時周防五
郎左衛門尉、

650

〔右同〕

同日未刻、將軍家上、御行始入御相州禪室、供奉三十

二人之内、忠景在之、于時周防五
郎左衛門尉、

651

〔右同〕

弘長三年正月七日戊子、將軍家上、御參鶴岡八幡宮、供奉人

御後四十九人布衣之内、忠景在之、于時周防五
郎左衛門尉、

652

〔右同〕

同月十日卯辛、爲和泉前司行方奉行、被定旬御鞠之奉行、

皆是被撰堪能也云云、二月・五月・八月・十一月下旬
三人之内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景、

653 「在東鑑五十一卷」

弘長三年八月九日辰丙、將軍家宗尊御上洛事有御沙汰、十月
三日、御進發必然之間、路次供奉人已下事被定之、其記
縫殿頭師連持參御所、召範元於御前被清書、是為被進京
都也、隨兵八十七人之内、忠景在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景、

654 「右同」

同月十一日午戊、於廂御所御連歌五十句、連衆十三人之内、
忠景四句在之、于時周防五郎
左衛門尉忠景、

655 「越前島津氏忠行末弟七郎重賢譜中」

重賢

初定賢 七郎

自弘長至文永在鎌倉、近侍 宗尊親王、事詳于左、

656 「在東鑑五十一卷」

弘長三年癸亥正月一日壬午、埃飯、相州已下著布衣出仕如

常、申時刻之後、各降庭上座列、九十八人之内、定賢在
之、于時周
防七郎、

657 「右同」

同日未刻、將軍家宗尊御行始入御相州禪室亭、中御所御方
供奉廿人之内、定賢在之、于時島津周
防七郎定賢、

658 「右同」

弘長三年正月七日子戊、將軍家宗尊御參鶴岡八幡宮、供奉人
著直垂帶劔、候御車左右十七人之内、定賢在之、于時島
津周防
郎七

659 「在東鑑五十一卷」

弘長三年四月廿六日乙亥、將軍家宗尊二三所御進發、供奉步行
十一人之内、定賢在之、于時周防
七郎定賢、

660 「越前島津氏忠行弟忠泰譜中」

「在東鑑五十卷」

弘長三年癸亥八月八日卯乙、放生會、供奉人有子細、催促
人人十六人在國之内、忠泰在之、于時周防四郎左衛門
尉、此間文永元年欠、

661 『蒲生土山内某文書』

可早任去嘉禎四年惣地頭淨尊免除狀、且依去寛元二年
守護所殿御免除狀、停止非法沙汰事、

右、件薩摩郡内平礼石寺者、是自家・國吏・守護・地頭
方旁御祈禱致丁寧候也、而間、至彼寺領者、地利物已下
雜公事等、一向被免除了、至檢断事者、糺實否、隨輕重、
雖被行其身計罪科、妻子資財雜物等併寺内被止了、同守
護地頭使乱入事被止了、而忠兼存生之後、太子相傳之今、
地頭代致非法之沙汰之由、太子申之、事實□太(者カ)以不可然、
早任前々免除之狀、可致沙汰、仍重免除之狀如件、

弘長三年八月 日

地頭(者カ)

662 『臺明寺文書』

僧慶明謹言

讓与臺明寺坊地水田事

右、件於坊并坊地者、爲法性沙汰、慶明親人中仁守器量
人、可讓与、水田者可付坊、但迫田六段者慶明か後世苦
提(脱カ)、臺明寺衆集院本堂阿弥陀佛可奉忌日田寄進、
仍爲後日沙汰、讓狀如件、
副進
寄進狀一

弘長三年六月廿六日

「在口裏」
「備前房讓狀案文」

僧慶明在判

663 『全』

僧幸慶謹辭

奉寄進曾野郡内樋渡田壹町事

四至 東限五坪并井乃毛 南限御供田纏手
西限野馬口 北限御幣田

副進 證文等

右、件田者、幸慶先祖相傳之所領也、然則幸慶并妻女源
太子爲往生極樂頓證菩提、兩人忌日祈田、限永代、奉寄
進臺明寺衆集院處也、仍奉寄之狀如件、

弘長三年十一月九日

僧幸慶(花押)

「在口裏」
「加治屋土佐殿樋渡田一丁寄進狀」

「重武名内清正名河隅田壹町 今者 樋渡」

僧幸慶 衆集院寄進狀一通 弘長三年十一月九日

664

『水引執印文書』

郡司矢上左 月中可催上

九日到來、謹以拜見仕候了、任被仰(下カ)旨、

相觸候之處、是阿狀、進上之、以此趣、可有御披露候、恐惶謹言、

(弘長元年九)

十二月廿二日

式部丞藤原忠繼讀文

進上 佐治左衛門尉殿

665 『公』

麿嶋中務次郎康邦申、薩摩國麿嶋郡司并弁濟使兩職事、爲有其沙汰、可令召進矢上左衛門尉盛澄後家之由、被仰下之處、注進狀披露了、所詮、其身爲所勞者、來月十日以前、差進代官、可(參決力)之由、可令下知也者、依仰執達如件、

弘長三年九月三日

(長持) 武藏守在御判

(政村) 依御勞無御判 相模守

陸奥左近大夫將監殿

(北条時茂)
「以上卷紙拾枚也、(道敷)〔花押〕」

666

『水引執印文書』

嶋津庄内鹿兒嶋郡司弁濟使兩職事

康友与忠重召問兩方、任文書理、可沙汰付之由、先日令下知之處、件忠重不待裁許、令逃脱庄内之上、到私用御(剩之)

667 『公』

米之条、罪科不輕之由、在廳并代官所申也、如聞者、忠重所行甚以

(本文書ハ建仁元 一一二三四東御教書案ノ前半部ナルベシ)

薩摩國御家人麿嶋太郎康村、上可罷入見參之由、歎申候、

且折紙令進覽候、便宜之時、可令披露給候、恐々謹言、

(嘉祿三年九)

十一月四日

(忠持) 左衛門尉在判

進上 後藤左衛門尉殿

(佐渡前司基綱)

〔花押〕〔雜目裏判〕

668

『臺明寺文書』

比丘尼西阿弥陀佛敬白

奉寄進 臺明寺本堂阿弥陀如來御佛性新水田貳段 止上居取

内号五 段田、事

右、件田者、當寺住僧仙成房永祐之遺跡也、而西阿依爲其一分之緣人、傳得彼二段之水田、子細有別儀、領知經多年、爰情存事情、永祐本自獨身無賴、然間、致孝養訪後世之仁又無之、西阿獨雖歎孝養之空、世間纏頭之間、只此志恨無其力、不如、奉寄彼遺跡所領、令資永祐之苦

提、是雖爲小結緣、豈非大因緣哉、仍奉寄阿弥陀如來御
佛性祈之狀如件、敬白、

弘長三年十月十八日
比丘尼西阿敬白

669 『臺明寺文書』

(本文書ハ六六三号文書ト同文ニツキ省略ス)

670 恒次名内下河津留田五段

僧安覺 山王御寶樂田 申賜國免狀一通建久八年十二月日

安覺安弁仁讓之 承久元年抄帳

安弁假名米富覺明假名米丸仁沾之狀一通曆仁二年二月十三日

覺明順覺仁讓之 寶治二年八月日抄帳

順覺覺尊仁讓之 文永四年六月六日抄帳

覺尊山王御寶前燈油田寄進狀一通弘安十年卯月廿八日

〔在右裏、故臨字以附之〕
〔注進〕

正八幡宮御領内臺明寺新田等号

忠時公	自文永元年
久經公	自建治三年
忠宗公	
貞久公	
前編 舊記雜錄 卷七	

文永十一
『後宇多』
 建治三

『九年忠時公逝去
 六年道鑑公生』

自文永元年
 至建治三年

- 二代忠時公
- 三代久經公
- 四代忠宗公

671 「島津國史」

文永元年甲子、
是年二月改元文永、
 正月猶是弘長四年、
 春二月二十八日改元、

抛大日本史

二年乙丑夏六月二日、公傳薩摩國守護職及薩摩郡・市來院・山門院・日置南郷・宮里郷・阿久根十二島於道忍公、抛道忍公旧譜、十二島地名不詳、公生八男、長忠繼、次道忍公、次高久、次忠康、次忠佐、次久時、次忠經、次久氏、道忍公生於嘉祿元年乙酉、母伊達氏、判官入道念性之妹也、是歲、年四十襲封、抛島津、忠繼稱式部少輔、以非正夫人之出故、不立、是為山田氏祖、久時稱大炊助、是為阿蘇谷氏祖、忠經稱常陸守、子男四人、宗長・忠繼・忠光・俊忠、忠光稱五郎太郎、是為町田氏祖、俊忠稱侍從房、子久兼稱圖書助、是為伊集院氏祖、高久・忠康・忠佐・久氏・宗長・忠繼、並無後、同上、道忍公時、使大炊助久時為守護代、公朝京師、久時陰謀為守護職、公至自京師、乃罷久時守護代、久時頗以門地自高、陵蔑士大夫、市來政家者、惟宗廣言之孫也、乃言曰、島津殿亦惟宗氏耳、何得自高邪、久時曰、雖然、源流自別、各出譜圖為證、久時之先、出自曾我大納言、傳至惟宗廣言、廣言生得佛公、政家之先、出自宗大納言、傳至惟宗廣言、廣言生忠康、忠康生得佛公、於是、共爭族姓優劣、久而不平、乃訴諸問注所、大日本史將軍家臣列伝云、鎌倉有政所、問注所、政所、令賞罰之所出也、問注所受辭訟之所、問彼此之

「在忠時公御譜中」

「忠時公御譜中ニアリ」

比志嶋太郎殿

弘長四年正月二日

道佛(忠時)(花押)

京都大番役事、六箇月勤仕事終早、於歸國者、可被任意之狀如件、
(即文永元年也)

『比志嶋文書』

言注記取決之謂也、亦不能決、其後、薩州安國寺住持如京師、道過若狹、因齋二家譜圖、以三方殿家所藏譜圖、用相比校、乃與久時譜圖相合、於是、政家譜圖始廢、拋道忍公旧譜、山田聖栄自記、政家譜圖以得弘公為忠康之子、固屬妄誕、然久時譜圖以得弘公為廣言之子、亦無稽甚矣、並不足取、安國寺住持、俗名酒勾次郎法名顯、薩摩中郷有安國寺、為伊集院廣濟寺末寺、三方殿者蓋忠季之後也、忠季為若狹國守護代、号曰若狹島津、或称若狹兵衛尉、或称三方兵衛尉、有子曰賤間兵衛次郎忠經、承久之亂、忠季屬北条氏、忠經屬官軍、各死其事、未聞忠經有子若弟也、然道忍公時、若狹國有称三方殿者、則是子孫尚有存者矣、而其後子孫不詳、至寬永中、島津圖書久通、問諸若狹國吏人、其人贈久通沙汰状写本一道、手冊一道、並載島津支流系圖、今觀其狀、雖文義漫漶、然其大旨蓋曰、令島津八郎左衛門領島津道正采地云、而其尾書大永八年八月十九、不書日字、其下云内藤新兵衛尉光廣在判、光廣似是下此状者、而手冊則云、本國三方郡井崎村、有農夫九左衛門尉者、其家相伝、五代祖某乃道正之後也、称島津氏、其後或称三方氏、或称井崎氏、子孫稍微於今為庶、由是觀之、井崎村九左衛門疑是若狹島津氏裔孫、然別無確拠、且忠季惟宗氏之子、本与島津氏無涉、况其子孫其存其否不問可也、聊因三方殿事而及之、以備異聞耳

將軍家政所下 平氏字姬夜叉

可令早領知薩摩國山門院郡司職并名田畠山野河海事

『本田靜観伝ニ載ス、入來本田氏文書也』

文永元年甲子二月八日

道忍(忠時)(花押)

以上

- 卅
- 三反
- 一反廿
- 卅
- 恒本
- 藤木「本トモ」

- 九反卅
- 二反卅
- 卅
- 松之本
- 薩摩迫

小苗代薬師如來為佛供、入山之内、奉寄進候、

「在大口永福寺」

「久經公御譜中」

成岡二郎殿

弘長四年 正月十三日

道佛(忠時)(花押)

狀如件、

「延時文書」

京都大番役事、六箇月勤仕事終早、於歸國者、可任意之

右、任親父平秀忠〔山門院部司重名關太郎秀忠也〕元應元年九月十七日讓狀、分与次女子

等之、子細載之、可令領掌之狀、所仰如件、

文永元年六月十三日 案主菅原

知家事

令左衛門尉藤原

別當相模守平朝臣〔長時〕在御判

武藏守平朝臣〔政村〕在御判

676 「延時氏文書」

〔端裏書〕
「忠種所進」

ゆつりわたすけん〔見〕ふつかしそく三〔大〕らう〔種〕おくら〔忠〕のたねた〔川〕

か所

一所 さつまこおりのうち、のふ〔延時〕ときのみやうてん〔川〕

〔原田〕
わらたのむら

一所 いしかみのむら

一所 しらさかのむら

一所 しら〔白〕ハ〔羽〕のむら

みき、くたんのミやうてんはくハ、けんふつかせんそき
うてんのしよりやうなり、よて、三らうたねた〔川〕ちやく
しとして、くたんのミやうてんはく〔川〕のてうとのそうもん

677 「臺明寺文書」

〔端裏書〕
「臺明寺本文書惣目錄案文」

註進

臺明寺公驗文書等目錄事

一 念佛田

一卷九通 在行賢御寄進狀

一通 鋤停止狀

一通 菌免判

一通 索馬免〔牽力〕

一 彼岸田

一卷十七通

一卷三通 大府宣

おあいそへて、やうたいをかきりて、ゆつりわたしおは

ぬ、たのさまたけなかりやうちせしむへし、たし、は

くちのし、すいてんのつほつけにをいてハ、ほんけん

のおもてにめいはくなり、よてこにちのために、ゆつり

しやうくたんのことし、

ふんえいくわんねん十月十日

〔抄券見仏〕
しやみけんふつ在判

一通 住僧解狀、在外題、

六通 彼岸田并燈油田、每任檢田入戸申免判狀、在外題、

一通 彼岸田并燈油田勘返田所當米申免判狀、在外題、

一通 依篤房張行捧殿下住僧解狀

一通 永籙狀

一卷三通内 一通寛西申
二通來徒申狀、在外題、

一通 倉原田相博

一 燈油田

二通 免判

一 日吉田

一卷五通 国司并行賢御寄進狀

一 人々々狀

十五通 在宮返牒一通

一 佛聖田 一通

一 地藏講田 二通

一 十五日田

三通 奉寄狀
在国免 四通 相善房寄進狀
小山田小縁

一 常樂會田 一通 奉寄狀

一 衆集院三昧田

一卷四通 真乘房狀 二通 相善房狀

一 立義田 一通 奉寄狀 一通 公事免除狀

一 臺葉御房忌日田 講副
五月廿日

一通 奉寄狀

一 長壽々々忌日田 堀切
九月四日

二通

一 宗房并法阿忌日田 橋口八段
宗房十二月十五日 法阿十二月五日

一通 在廳加署

一 相善房忌日田 北追
十一月十一日

一卷六通 寄進狀等

一 堅者々々忌日田 青木
十二月一日 八通

一 造花田 刑日公
寺前
九月一日 二通

一 理性御房忌日田 崎田
正月八日 三通

一 一乘坊法眼々々忌日田 四月廿四日 二通

一 白土田 温田、但臺葉御房忌日
拳狀一通、永兼狀也、

一 加治屋土佐公忌日田 樋渡 一通 寄進狀

一 眞鏡房忌日田 萩原

五通内 三通正文
三通案文 但彼正文へ地上々座許有之、

一 仙城房忌日田 一通 西阿施入狀

一 円臺御房日記 一通

一 田中入道殿忌日田 中俣 二通 御文寄進狀

- 一 立義米寄進狀 二通
- 一 六月會米奉寄狀 一通
- 一 修正米寄進狀 成壽之一
施入 一通
- 一 當山傍示文 三通
- 一 學頭田寄進狀 若衆解狀
- 一 當山坊地不可讓里弟子事 解狀 在外題
- 一 罪科人親類妻子間僉義狀 一通
- 一 山王御鉢日記 二通 (主カ)
座首施入一通
- 一 千与次郎沙汰文 一通
- 一 山内狩停止事 一卷七通 庁宣
- 一 薪竹起請 一通
- 一 雜僉義狀一卷受戒次第 (A、B)
雙六 柝田事等正文
- 一 他妻密懷免一通 并禪然房沙汰事
- 一 諸柝田名移并檢田雜事等免判
- 一 先守護代右近尉免判二通 解狀一通、
在外題
- 一 當守護所代免判 一通 柝田等御家人役免
在同消息
- 一 宮公文所消息 在臺明寺西光寺不審事、
- 一 當山無盡米預所日記 一通
- 一 大眾白堂狀 一通
- 一 藤内兵衛殿消息 一通

- 一 笛竹切間狼藉事 一通
- 一 温鍋施入狀 一通 行賢御施入
- 一 立義問者支配狀 一通
- 一 雜文書一結
- 一 關東御下知狀 四通
- 右、文永元年十二月僉義儀、自往古以降、當山公驗等納一箱、雖置一所、或恐炎上、或憚落失、書分案文、令納置兩所、若正文紛失之時者、捧此案文申請方々御与判、可備後代之證驗狀如件、

文永元年十二月廿四日

- 僧 行円(花押)
- 別當兼學頭安樂(花押)
- 別當 重慶(花押)
- 僧 朗弁(花押)
- 別當 覺秀(花押)
- 僧 源順(花押)
- 別當 慶幸(花押)
- 別當 順覺(花押)
- 阿闍梨幸秀(花押)
- 僧 慶範(花押)

678

『山田氏文書』

薩摩國名主等、令對掉京都大番夫雜事由事、如泉庄名主
 保通陳狀者、自身令勤仕番役之上者、何致夫雜事沙汰哉
 云々、自身縱雖勤番役、當國守護地頭兼帶也、所當公事
 弁勤之田畠在家、爭不勤所役哉、且傍例也、早隨分限、
 可令催沙汰之狀、依仰執達如件、

文永二年五月七日

(時宗) 相模守御判

僧 有慶(花押)
僧 良覺(花押)

以後追加狀

一 成壽房忌日新田寄進狀案文 一通

一 円意房每年十一月五日大堂供僧膳寄進狀案文

一 成心房忌日新田寄進狀案文 一通

一 彼岸田石本北國僧供住文狀案文 一通

一 備前房忌日新田寄進狀案文 一通

一 静意房忌日新田寄進文書等、温田楠本三反 副注文 十六通

二通 佐官永祐新入田去狀

二通 當山雜掌參上時藤内左衛門尉殿下知

一通 忌日田綾氏女寄進狀 字宗曾利三段

679

「雜抄」

すりのすけひさ時にゆつりわたす所へ、

さつまのくにのすこのしき、おなしきくにのうち、

さつまこほりいちくのゐん・やまとのゐん・へきのなん 【市】表 【日置】南

かう・みやさとのかう・あくね十二とうのしま、このゆ 【郷】

つりにまかせて、ちきやうすへし、もしさかいといひ、

みくうしといひ、かたへいらんをなさん事もあらへ、

なかくいけんをはなちて、上まで申上て、そのいらんせ

んものよりやうを申給はるへし、

ふんえい二年六月二日

(時宗) 道佛在判

「此文書、在久經公御辭中、原書へ旧御番所御文書二卷中御願狀置文
 一巻中ニ在リ」

680

「越前島津氏二代忠行弟忠景辭中」

「在東鑑五十二巻」

文永二年乙丑六月廿三日 己 將軍家 宗 入御最明寺亭 供

二代忠時公ナラン
嶋津大隅入道殿

(政村) 左京權太夫御判

「此文書、在忠時公御辭中」

奉騎馬廿人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉

681 「右同」

同年七月十六日壬、及晚、將軍家宗入御左京兆小町亭、
供奉十七人之内、忠景在之、于時周防五郎左衛門尉

682 「越前島津氏忠行弟重賢譜中」

「在東鑑五十二卷」
文永二年乙丑六月廿三日己、將軍家宗入御最明寺亭、供
奉步行十六人之内、在之、于時島津周防七郎重賢

683 『入來院氏文書』
(端裏書)
「平四郎讓狀」

讓与 所領等事

平四郎有重所

一所 吉田上庄内清太入道西在家壹宇

在四至 東限屋中溝 南西北見古堺

同藤意内立野伍町堺見絵頭(圖)

一所 美作國河會郷内下森自上山宮西

東限草野谷西尾通自今路宮尾トアリ大足へ

在四至 南限備前堺 西限佐備塔毛谷之流お切邊河へ

北限飯岡堺

一所 薩摩國入來院内清色郷五分三

右、於所々者、任讓狀之旨、守先例、可令知行之狀如件、
文永二年八月三日 沙弥善心(明惠)(花押)

684 『藏于山田氏二代忠貞譜中』

ゆつりわたす(牛)しくその院者、太郎忠さねさたたるへし、
入道より給へる本せうもんをくして、ゆつるところ也、
たのさまたけあるへからず、後日のためにせうもん如件、
文永二年九月廿日 たり(道)ふつありはん

(山田忠実)
式部太郎

685 『正本在加治木桑波田氏』

可令早大秦元兼領知薩摩國牛屎郡司并十一箇里名主兩
職事

右、亡父國元依受重病、雖不与讓狀、爲一子知行彼跡之
上、不及異儀、早守先例、可令領掌之狀、依仰下知如件、

文永二年十二月廿七日

相模守平朝臣判(碎悉)

左京權大夫平朝臣判

〔島津國史〕

道忍公 初名久時，後改久經，道佛公之子也，稱修理亮，任下野守，法名道忍義阿弥陀佛。

文永三年丙寅秋七月，北條政村・北條時宗、廢宗尊親

王，立其子惟康，爲征夷大將軍、拋大日 本史。

四年丁卯、五年戊辰、凡二年事缺不書、

〔十二月三日道佛公伝、大炊亮長久薩摩伊集院・給黎院・顯姓郡・和

泉庄・瀧家院、信濃大田庄石村之南郷津野次郎丸給田屋敷、和泉

上条郷内、又伝母堂薩摩瀧家院、信濃神代郷、讚岐串無保内三成

名給米百石、而如瀧家終母世伝長久、如神代三成名終母堂世伝世

子、又伝伊賀尼忍覚 三浦家 村室 伊賀長田庄、而終尼世伝四郎六郎、蓋家

男、又伝南女房薩摩谷山郡、和泉右田中条・下条、信濃太田庄内

神代郷給田屋敷、又伝孫女久經 和泉上条郷内陣田里、各載書、

六年己巳、冬十月二十二日、北條政村・北條時宗下知

狀、以 公爲薩摩國鹿兒島郡地頭職、如 道佛公去年

十二月十三日讓狀、拋道忍公旧譜、十一月十三日讓狀、

七年庚午、事缺不書、

八年辛未、道路流言、蒙古將寇、秋九月十三日、北條

時宗・北條政村命阿多北方地頭、遣代官有器幹者鎮撫其邑、與守護人共備蒙古、拋道義公旧譜、大日本史蒙古伝、文永五年、蒙古致書、請通和好、

未報、六年、復遣黑的股弘、求報書、至對馬島、拒而不納、八年、又遣趙良弼言、終無報書、將欲用兵、廷議言宜答書報之、北条時宗以爲不可、竟不答、則蒙古 又命鎮西、築城筑前筥崎、置戍兵、將寇之勢、從可知矣、

拋島津 略 冬十二月二十四日、北條政村・北條時宗下知狀、

使 公領伊賀國長田莊、如 道佛公今年九月十五日讓

狀、拋道忍公旧譜、九月十五日讓狀、

九年壬申夏四月十日、道佛公薨、年七十一、葬鹿兒

島五道院、拋島津系圖、廟堂要覽、

十年癸酉、事缺不書、

十一年甲戌春正月二十六日、

龜山天皇傳位於

後宇多天皇、拋大日本史、

建治元年乙亥、是以前猶是文永十二年、夏四月二十五日改

元、拋大日本史、秋九月、幕府命太宰府及緣海郡國、各飭守

備、且遣兵衆赴筑紫、以備蒙古、同上、大日本史後宇多天

日、相模守北条時宗、斬元使杜世忠、何文著等五人、皇本紀、建治元年九月七日、鎌倉、減省公私用費、遣兵衆分戍鎮西、以備元寇、是歲、幕府

遣 公領筑前戍兵、拋島津系圖、島津諸略、

二年丙子秋八月二十七日、政所下文、以 公爲薩摩伊

作莊日置莊地頭職、拋道忍公旧譜、按是年公在筑前、而為伊作日置三邑地頭職、蓋遙領其地耳、

三年丁丑春、比志島太郎祐範、遣比志島・西俣・河田・

前田之衆、會築宮崎館舍、受功五丈一尺四寸、正月二十

七日、功訖、柳道忍公旧譜、比志島人系図、比志島氏、出自六条判官為義、為義第三子曰志田先生義憲、義憲第二子曰村上三郎左衛門尉頼重、頼重嫡於薩摩滿家院、娶滿家郡可大藏永平之女、生上総介法橋榮尊、永平無男、乃与榮尊滿家院、祐範、榮尊之子也、滿家院、有比志島村、因以為氏、

687 『大口小苗代業師文書』

(本文書ハ六七四号文書ト同文ニツキ省略ス)

688 『見于山田氏二代忠真譜中』

薩摩國牛屎院地頭職事

任亡父文永二年九月廿日讓狀、無相違可知行也、仍永代

為無違乱、重所加讓狀如件、

文永三年二月廿七日 道佛ありへん

式部太郎

【初忠実、式部太郎三郎、式部少輔、大隅守】

689 讓渡 所領貳箇所事

一所 相模國大井庄内吉田嶋

一所 薩摩國阿多郡北方

右、相具調度文書、所讓渡向女房實也、不可有他妨之狀如件、

文永三年六月十日

(二階堂行久)
沙弥行日(花押)

690 讓渡 領地并倉等事

一所 在西御門入奥地

一所 濱倉半分

右、相副證文、所讓渡向女房也、兼又鎌倉宿所乃倉納物事、與名越女房兩人、各可被分取半分也、於濱倉者、同相半分、可有其沙汰、但至敷地者、所令借用他人之領也、然者向後も地主を相語て、毎年無懈怠、弁其地子、可被領知之狀如件、

文永三年六月十日 沙弥行日(花押)

691 左兵衛尉藤原行久東大寺功 元亨元年十二月廿九日

692 「越前島津氏忠行弟忠景譜中」

〔在東鑑五十二卷〕

文永三年丙寅七月三日癸巳、巳一點、甲冑軍士揚旗、自東自西馳集、窺參相州門外、次於政所南大路、相一同時音、其後、少卿入道心蓮・信濃判官入道行一等、為相州御使參御所、往還及兩三度云云、先如此軍動之時、將軍家入御執權亭、又可然人人參營中、奉守護之坎、今度無其儀、世以怖之、朝馴暮老近臣之類皆出、五人相殘内、

忠景在之、于時周防判官忠景、

693 「在東鑑五十二卷」

文永三年七月四日甲戌刻、將軍家宗尊入御越後入道勝圓佐介亭、被用女房輿、可有御歸洛之御出門云云、供奉武士十九人之内、忠景在之、于時周防判官忠景、

694 文永三年、初成壽房朗弁以曾野郡智能名字副柳壹町内東伍

段、傳其弟子僧覺意、至是九月十五日、覺意以寄進狀寄

附於衆集院、但為米丸往古盛田云、

四年十二月、主丸名主紀吉久及嫡子紀重吉、以主丸名内

壹町及竹原田陸段、為臺明寺料田、地藏講田二日置諸役

免狀、

五年五月、初備前房慶明以其坊地及園等、傳之其弟子僧

直性房明秀、二十四日、明秀為辭狀授之衆徒、六月、正

八幡宮命婦綾氏女、初得宗背園田字三段於覺明、至是寄

進臺明寺修壽院阿弥陀如來、為忌日料田、六日置狀、

文永三年八月廿六日、蓮花王院領肥前國長嶋庄云々ト有之、水引權執

印家藏文書一通、建長五年四月十七日ノ場ニ載置之間、追而此場ニ写

ノセ可然事、為見合記置也、(右ノ文書ハ五〇七号文書ノコトナリ)

695 「臺明寺文書」

僧覺意謹辭

奉寄進衆集院曾野郡智能名字副柳壹町内東伍段事

右、件水田者、覺意師資相承之所領也、然為先師朗弁之

忌日祈田、限永代奉寄進衆集院處也、但彼田者、為米丸

往古經田、雖本役等少々相殘、併留本名奉寄之、但於臨

時之公役出來者、准據自餘祈田、可為衆徒之沙汰哉、抑

朗弁存日、懸宿望於淨刹、致賦離於苦域、適寄修正三ヶ

日僧供之祈米、擬將來兩三人忌日之勸、證大菩提之果、

雖不可疑思、猶報恩之志銘肝、謝德之懷、鎮滿胸之間、

辭願身私地之小領、祈幽儀佛地之大果、仰願弥陀三尊、

令亡魂八功德池之中、新列九品之聖衆、七重寶樹之下、

更礼兩足之金容、仍奉寄狀如件、

文永三年九月十五日

僧覺意在判

「口裏ニアリ」
「成壽房曾田」

696

國阿多北方等地頭職事

右、任亡父前常陸介行久法師行名領知相模國大井庄内吉田嶋・薩摩

令領掌之狀、依仰下知如件、

文永四年四月廿四日

相模守平朝臣(花押)^(時悉)

左京權大夫平朝臣(花押)^(政村)

697 『正本在權執印』

(花押)

長宗与善宗相論事、同意長宗、被致狼藉之由、善宗依令
訴申、可止所務由、先日雖被御下知、令書起請文、被申
披子細之上者、如元更不可有相違之旨、被仰下候也、仍
執達如件、

文永四年四月廿七日

奉行藤原(花押)

權執印御房

698 『財部延時氏文書』

ゆつりわたす見仏かしそく三郎たね忠かところ、のふ
ときの名てん□瓦田むらの事、

合

右、件名てんはくわ、見仏かせそさうてぬの諸りやうな
り、よて三郎たね忠をちやくしとして、文永元年十月の
ころ、ゑいたいをかきて、三郎たねたゝにゆつりをわぬ、

よてたのさまたけなく、おもひあてをくところ、てき

人のみとして、わかまつ四郎の見仏よりして、延時の名

ゆつられたりとひろうするに、見佛かそしやうの間、

後日爲かきをく、若松四郎に延時の名□またくゆつ

らす、もし見仏このきをもいつわり申候へ、日本のち

ぬす八まんたいほさつも伍ちけん候へ、又かへすくも

見仏かをもひあてたるに、延時名田のさまたけなく、

三郎たねたゝかところ御ちきやうすへし、こ日爲ニそう

文如件、

文永八年五月廿日

沙見佛(花押)^(辨脱カ)

かとのひつしのとし

699 『入來院氏文書』

可令早平有重領知相模國吉田庄内清太入道西在家壹字・

藤意村内立野伍町・美作國河會郷内下森自上山宮西・

薩摩國入來院内清色郷伍分參事

右、任亡父明重法師^{法名善心}文永二年八月三日讓狀、可令領

掌之狀、依仰下知如件、

文永四年六月十六日

相模守平朝臣(花押)^{『北条時宗』}

左京權太夫平朝臣(花押)
【北条政村】

『入来院氏臣岡元氏文書』

可令早釋童丸領知美作國河會郷内大足村并東木屋事

右、任亡父明重法師弘長三年正月廿三日讓狀、可令領掌

之狀、依仰下知如件、

文永四年六月十六日

相模守平朝臣(花押)
【時亮】

左京權太夫平朝臣(花押)
【關東執權北条政村】

『水引執印文書』

【繪裏書】
「これはるす入道まいりてそのくのさうはくのしるしふみのあんも

ん」

さうはくせしむるそのくの事

合

一所 さゑもん殿ふるの御やしき、同くわうねんハウの

やしき

一所 つや殿、あくかゝねのやしき

一所 四らう殿

一所 みつま二らう

一所 ミつま二らう

『水引執印文書』

さうはくせしむるそのくの事

合

一所 つや殿、同あかゝね四郎入道やしき

一所 くわはたのやしき、同くわうねんハウのやしき

一所 くわうねんハウ

巳上五ヶ所 このそのくの代分

一所 たうくもん所の御やしき

一所 まへのその

一所 かわしりくらうのその

一所 ちやうにうたうのやしき

みき、くたんのそのく、さうはくせしむるところなり、

たゝし、かやうにさうはくせしむるといふとも、あまり

にくしなともおもひ候はんときハ、もとのゆつりにまか

せて、りやうちせしむへし、又かのそのくのまへに、

ふねのつきたらんとときハ、つれうハせんれいにまかせて、

きたをいたすへきしやう、くたんのことし、

ふんえい四年十月廿三日

執印 【重兼】

一所 四らう殿

このその／＼の代分

一所 たうくもん所の御やしき

一所 まへのその

一所 かわしり九郎のその

一所 ちやうにうたうのやしき

右、件その／＼、さうはくせしむるところ也、たゞし、

かやうにさうはくせしむといふとも、ありにくしなと思

候はん時へ、あいたかひに、もとのゆつりにまかせて、

りやうちせしむへし、又かのその／＼のまゑに、ふねの

つきたらん時へ、つれうへせんれいにまかせて、御さた

候へきしやう、くたんのことし、

文永四年十月廿九日

左衛門尉友員(花押)

703

『權執印文書』

八幡新田宮權執印僧永慶謹重言上

欲殊且依御教書違背實、爲向後傍輩、於氏女者被行其

科、且任證文道理并度々御下文旨、如元永慶可爲五大

院内古佛堂檢校職由、直蒙御下知子細事、

副進 領家御教書案 文永四年七月三日

件檢校職者、永慶重代相傳無吳儀之次第、度々訴狀□具

書等分明也、而氏女之親父致濫訴之刻、去文永之比、永

慶就令言上子細、被下御外題、無相違之處、氏女去年文

永三年□種々謀計、不顧和与趣、致其妨之由依訴申、蒙

御下知、永慶之作田等令刈取之間、永慶今年文永四年氏女

今所立申之狀者、非和与之儀、不可背永慶命之旨載之畢、

隨彼氏女不帶紙之文書、然者任證文之道理、可宛給之由、

令訴訟之處、氏女□國之間、所詮來九月中、可令進次第

證文、任道理、可有御裁許故也、御成敗以前者、可刈置作

稻於中由、被下御教書之處、無其理之間、忝違背領家御

下知、不令進證文、剩刈取作稻之条、無其理之至顯然、

則依御教書違背之實、爲向後傍輩、於氏女者被行罪科、

且任證文之道理并度々御下文之旨、如元永慶可爲古佛堂

檢校職之由、爲蒙御成敗、重言上如件、

文永四年十一月七日

權執印僧永慶上

704

『臺明寺文書』

主丸名主紀吉久謹言

奉免 主丸名内臺明寺新田地藏講田壹町并竹原田陸段

兩三方公事等事

右、件新田者、本是主丸名也、雖然沾却之後、被奉寄臺明寺早、但爲沾却田之間、任 公家関東之御下知狀、雖可奉令支配本名之公事等、且爲二親聖靈往生極樂、且爲自身滅罪生善子孫昌繁、於本名支配之公事等者、不云社國守護御方之大小所役、不論本役臨時之所課、限永代一向奉令免除之者也、若於令違背此狀之輩者、不可爲吉久之子孫之狀如件、

文永四年十二月二日

嫡子紀重吉在判

主丸名主紀吉久在判

「正文藤野久右衛門所獻四十三通之二」

「コレヨリロギル」
しなのゝくに太田庄内

こしまのかう

「天 炊 助 分」
「おほいのすけのふん」大炊助長久也（同藤谷久時）

さつまのくに

「伊集院」

いすのゐん

「給 養 院」

きしれのゐん

「額 姓 郡」

えのこをり

「泉」

いつみの庄

「満 家」
みつゐゑのいん
ちぎやうすへし、このうち

「信濃國」
しなのゝくに太田庄

「石 村」
いしむらのみなミかう

「津 野」
つつのゝ二郎丸ニ給田屋敷

いつみのくに

上てうのかうの内五かり 子細見讓状、

「一こけふん」伊達念性妹忍西尼ノ御事カ

さつまのくに

みつゐゑのゐん
「一このうちハ」
おほいのすけ長久

しなのゝくに

かしろのかう
「一このうちハ」
すりのすけ久経公

さぬぎのくにくしなしのほうの内

みつなり名

給米百石
「この後ハ」
「伊賀ニ尼忍堂」
すりのすけ

「一女しいかのあまのふん」三浦家村室

いかのくに

なかたの庄
「一このうちハ」
「四郎六郎ニゆつるへし、」
「家村ノ子カ」

「御系図ナシ」
「一」
一同女しみなミの女はうのふん

さつまのくに

「給 山 郡」
たにやまのこをり

いつミのくに

ミきたの中条

同けてう

しなのゝくに太田庄内

かしろのかう給田屋敷 子細見讓状、

「せんす御前ノコトカ」すりのすけの
「まごもんす」女し 「久経公」

いつミのくに

上てうのかうの内

ちんたのり

右、ゆつり状もくろくかくのことし、このむねをまほり
てりやうちすへし、たゞしゆつり状をたいせすして、し
そくといふハかりをかうにして、しゝそんくニてきた
いをなさんともからニをいてハ、またくしそんのきにあ
らす、しかしなからふけうのものなり、たとい上ニ申上
といふとも、またく御しむようあるへからざる状如件、

文永四年十二月三日

「忠時公」
沙弥道佛(花押)

「右正文、旧御番所ニ番箱中御讓状置文ニ卷中ニ在リ」

『比志島氏文書』

可令早大炊助長久領知和泉國上條郷五箇里、信濃國大

「宗久子
諸三郎丸陳云、從信者為外戚縁者之条、
無子細云、凡不謂内外戚、对于叔父致
礼節者、尋常法也」

田庄内石村南郷津野次郎丸給田屋敷、薩摩國伊集院・
給黎院・穎娃郡・泉庄・満家院等地頭職事、

右、任親父前大隅守忠時法師法名道佛 文永二年六月二日・同

三年十月十日・今月三日讓状等、「藤野氏文書ニ伝ハレリ」可令知行之由載之、可令領

掌之状、依仰下知如件、

文永四年十二月十九日

相模守平朝臣御判(時悉)

左京權大夫平朝臣御判(政村)

『池端文書』

建部清綱子息讓与所帳事(分脱カ)取説、

一頼綱得分田島等事

用松名、在四至東限岩尾 西限小河
北限北俣田 北綱手田代大道 南大河

水田貳町貳段内

字北俣五段 同南俣五段 同三坪八段 同山下二段

同藪田一段 同赤田一段

一郡本田水田貳丁内

圓田四段 無田北副伊佐木田六段

馬門壹丁據清親作五段、
河原田五段

同郡本内藪參ヶ所内

『水引執印文書』

(端裏書)

「江」信阿弥陀佛狀」

讓進 上古佛田壹町事

脇八郎大夫蘭、先地教房居蘭也、

南入道居蘭、宮脇、四至讓狀在、

一山野肆ヶ所内

一所波伊 一所猪狩倉 一所小豆野ハへ 一所松はへ

此山野蘭四至、在讓狀、

右、件田畠山野等者、限永年可領知、於方々公事所當者、

本名五分一を可勤之、

此外返津加内狩倉山野四ヶ所内、大宗・綱懸・打ツメ

・いさぎのあほ、

四至 東限大浦 西限姫追大河
北限フルクツレノ河内并マツンタチ 南限海

右、件山野頼親讓与也、限永年可令領知、但請島陸段内

麥島壹段所當、初任時可弁也、兼又郡本頼綱得分内水田

五段・蘭一ヶ所、とよはらニ可讓、取、詮、

右、件田畠山野等、子息等令所分也、此外田畠山野等者、

嫡子清親可令領知也、

文永四年十二月廿四日 建部清綱判

「野辺氏文書」

「口裏」
到来文永五年四月廿六日中平次使塔隅四反入道」

櫛間院御年貢事

一定田三百二十七丁一段四丈

半分御
免残 分丁別六十五貫四百三十六文 段別廿文定

一得田二百六十一丁七段二丈

半分御免残 分面付百二貫七十八文 段別三十九文、
飢肥南郷引懸定、

一桑代十三貫百二十二文

一色革三十枚代十五貫文 一段別五百文定

以上百九十五貫六百三十六文

西方九十七貫八百十八文

東方九十七貫八百十八文

此外一方分西方

色革十枚 行騰革一懸 夏毛
代三貫文

右、件田者、信阿弥陀佛か相傳之田地也、然間信阿弥陀佛

か親父新大夫正持入道、所令取出學代ニ、差年記奉引畢、

今又依有由緒、所奉讓備後守殿也、於自今以後者、以彼

狀、爲永代之領主、無他妨、可令領知給之狀如件、

文永五年三月 日 沙弥信阿弥陀佛(花押)

沓一足代五百文 甘藷一瓶子

雜紙百帖 五十帖者四月
五十帖者十二月

文永五年三月廿五日

710 安堵之御教書并御約束御教書被成下時節之當知行分

日向國 櫛間院一圓 飲肥之南郷一圓

飲肥院酒谷之城一圓 飲肥之大明神つるより上

悉 隈屋河内

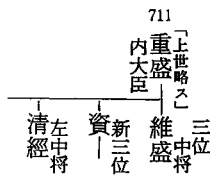
同國 加江田郷一圓

大隅國 深川院之内二十町 串良之弁分二十五町 下大

隅田上半分

飲肥院之内、所々、親類越中入道令押領、島津持久ニ同心、仍乱世之間者、相違了、属無爲而即如初知行了、

盛仁(花押)

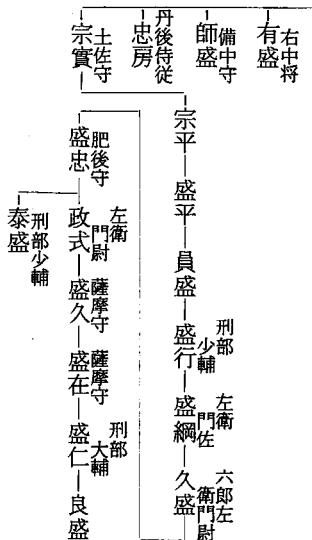


712

『臺明寺文書』

「右野辺氏系図抜書」

仁字依可有斟酌之間、自一条殿被改下、仍被下良一字者也、



口十三人各 小袖 衣 帷 一 袍 一

靜意御房 衣 道戒之分 九斗 小袖 一米 六斗 袍代 一石一斗

眞暁 眞法 帷 三斗六升 小袖 一 六斗 袍 一石一斗也

衣 禪性 分八斗

成暁 順上 帷 三斗六升 小袖 一 六斗 袍 禪音 分 一石一斗

衣 五斗六升

雜人四人 各ヒタ、レ一具 帷 一 布小袖 一 二斗四升

万覺 米一斗綿分下一石三斗七升加上定

預同

正行同^{ヒタ、レハカマ}帷^{一斗八升十一日} 八日 布小袖^{三百文分二斗五升下}

十郎次郎同^{一斗}帷^{一斗二升}ヒタ、レハカマ 布小袖

矢太郎同^{一斗}帷^{一斗二升}二斗四升布小袖分^{六月十日}ヒタ、レハカマ

文永五年五月廿日

713 『臺明寺文書』

僧明秀謹辞申

師匠故備前房慶明遺跡坊地并園等事

右、件坊地等者、云慶明抄帳之趣、云法性殿讓狀、明秀得分之条勿論之由、令存之處、爲衆徒御沙汰、宛賜羅睺王殿早、爰明秀依難散鬱念、參上 閔東雖申成御下知之狀、自往古已來、於山内事者、爲衆徒之計、定是非事、久例也、又御下知明白也、明秀何亦爲住侶之身、忽可乱山門之舊規哉、[□]所詮、山門之評定、其理難遁欵、誠明秀ハ身爲住侶之一分、爭可破山門之例哉、成安堵之望者、偏爲當山[□]、若破此例者、還似不思身之安堵、然者於于今者、彼坊地之事、限永代所奉辞衆徒也、仍爲向

後、辞狀如件、

文永五年五月廿四日

僧明秀(花押)

『ロウラ』
「眞性房備前房坊地等」

714 『臺明寺文書』

御文委細承候了、兼又蒙仰候をさなきものへ、ハうの事ハさやうニ御ゆるく候ハんニハ、いかゞ御くたり候ハん、そのうへこの二三日よろしくなりて候、御ゆミ候ハすらん、いかてけうあすミあしく候ニ、御くたり候ハん、返く悦入候、くハしき事ハ御見參時、令申へく候、恐々、

六月四日

明豪(花押)

御返事

(以下別筆)

當日記 文永五年六月八日
三十六貫四百六十八文

雜掌將束新日記

『在右裏、故臨写以付之』

注進 文永五年六月雜掌將束新日記事

三石二斗六舛 靜意御房分

三石一斗九舛 眞曉々分

三石二斗二舛 成曉々分

雜人四人分

一石三斗七舛 万覺、分

715 『臺明寺文書』

正八幡宮命婦綾氏女謹辭

奉寄進 臺明寺修壽院忌日新田字宗肖(省)蘭田參段間事

四至者、依爲蘭田、四方皆以垣根也、

右、件經田者、自故覺明之手、氏女被讓与之、無妨領掌之來經田也、爰氏女願壽命不定、專後生菩提、兼以爲忌日新田、限未來際、所奉寄進修壽院阿弥陀如來也、然氏女命後者、早速可避進新田也、但於覺明之讓者、自余田畠等被書載一紙之間、不能副進者也、万雜公事者、自本無之、仍寄進之狀如件、

文永五年六月六日

命婦綾氏女在判

〔口裏〕
「綾氏女寄進狀案字首馴」

716

「町田祖五郎光俊譜中」

文永六年三月、僧慶西及嫡子紀時道、有權現御敷地暨御造替云云之證狀、慶西及時道蓋紀姓伊集院郡司之族也、其御敷地大窪今隸福山村穴湯前、卽同温穴前、今石谷南

岩井谷田頭有土穴、濶可十畝、俗號蛇穴是也、桑迫在仁

多尾、瀬戸口在前谷、島廻北中牟多、疑中尾田在芋洗東、

又呼神免田地在前谷中、又權現社山下曰寺之前、蓋僧慶

西嫡子時道等住址之墟、當時兼主權現社神戸茸修事、其

書如後、

717

「山田七郎右衛門藏」

ゆつりわたす、うちのを、くほのてんはくら的事、

一所あなゆのまへ參段

在田壹町内 一、くわんしやてん參段

一、五月てん一段卅

一、せとくち一段卅、〔附三〕はんさうに三郎か

つくる一段廿

一、中牟多田貳段卅、文永八年五月八日

寂然在判

一、きくほうかやしきのその〔菊房カ〕

在蘭參ヶ所内 一、いやたらうけ、うはさうてう〔孫太郎〕

一、自分のその

右、件のでんはくらにおいてハ、こんけんのこしきちといひなから、僧きやうせいかせんそさうてんのしよりや

うなりによて、しそんせうかうニあいわけて、たのさま
たけなく、ゐやうねんをかきて、ゆつりわたすところな
り、かた／＼のくんし(公事)いてきたらんときハ、四分かいち
をつとむへきなり、但こんけんのこさうたいすりまいに
をきてハ、よりあいてすへし、又さすしきもせうかうの
さたゝるへきなり、きやうこうにゐらんさまたけをいた
さんもの、きやうせい(遺跡)かゆゑせきたるへからず、又他人
ニ(治却)こきやくのときハ、ほんみやう(本名)ニこきやくして、その
あたいをとるへし、よてきやうこうのためニ、せうもん
の狀如件、

文永六年 歲次 己巳 三月 日

僧慶西在判

嫡子紀時道在判

「統推印」
(花押)

718の1

夫文永六年距 大祖公之世未遠、而熊野神爲石谷總社、
則不可以不書也、因遡推文永年代、丁吾祖宗之時、於是
鈔錄慶西時道之證狀、認石谷總社之來由、又町田大概記
曰、石谷之權現、是は伊集院江被爲移事、不罷成候故、
石谷江古之地に宮所有之、就夫古ハ御屋形より御再興御
座候、 勝久公之御代迄右之通ニ而候、棟札細々有之候

事、

718の2

「伊集院阿多平右衛門藏」
忠久公、初薩州御下向之節、御船中風波荒候ニ付、無恙
薩州御着岸ニ付而者、於御國元熊野三所權現可被遊御勸
請之御誓願ニ而、俄風波相靜候ニ付、御舟無恙薩州日
置郡伊集院之内日置浦江被遊御着岸、則伊集院御城之東
ニ熊野三所權現被遊御勸請候由、當所麓新宮權現由緒書
ニ相見得申候、

719

「御譜中」

五代貞久公

三郎左衛門尉 上總介

文永六年己巳四月八日「御譜ニハナシ」見都城相馬氏系圖 誕生、母三池李助入道

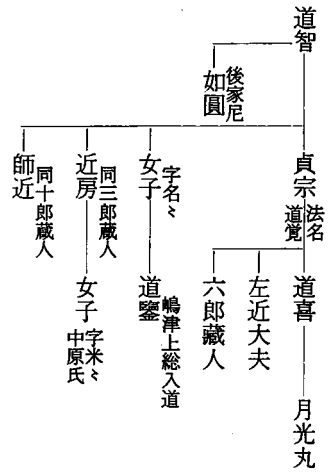
道智女也、

籙中大友因幡守親時入道道徳女也、其嫁娶之時輿添、
左者高崎次郎忠能、大友殿庶子云、右者小田原彈正忠也、兩輩
共當家之爲家臣者也、

720

「御譜中」

三池
安芸本助入道 同本助 同本助入道



721 『正文在嶋津安芸守久雄』

可令早修理亮久時領知薩摩國鷹嶋郡地頭職事

右、任親父前大隅守忠時法師(法名道佛)去年十二月十三日讓狀、可令領掌之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

文永六年十月廿三日

相模守平朝臣(時宗)(花押)

左京權大夫平朝臣(平政村)(花押)

「在久經公御譜中」

「右ノ正文、旧御番所御文書ニ番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ」

722 文永七年庚午八月、預所下文、復罷兼世職、以實兼爲鹿

屋院辨濟使職、父祖任也、

723 『鹿屋氏文書』

下 嶋津御庄大隅方鹿屋院

補任 弁濟使職事

左馬允伴實兼

右、件職者、兼賢相傳之職也、子息等中可計補之間、以兼世令補任之處、於事不忠、庄家事都不及沙汰、付上付下、更無其詮者也、仍停止兼世職、以實兼所令補任彼職也、士民等宜承知、無違失、以下、

文永七年八月 日

預所法眼和尚位(花押)

724 『入來院文書』

〔たうち〕のハラといちゐのとのさかひわよの事

へんひのゝよりかんわけふみのことく、ゆひらのひたをへきる、同ゆのこたにの三つかきたのたにのなかれを、いちゐのかへへきる、にれきたにをいてハたうのはらなり、きんし(公)け(重)かいろいろあるましく候、同くきのゝとをうむれとのあいのこたにをのほりに、やはすのやけはらの

『臺明寺文書』

將軍家御祈所大隅國臺明寺雜掌謹言上

欲早任

(北条朝時) 遠江入道殿

天福仁治御教書狀、令停止守護使

入部、於當寺謀叛殺害刃傷人夜討強盜五箇条外、任先

例、可爲衆裁由、申賜御教書狀、備向後龜鏡子細事、

右、當寺者、是自 (頼朝) 右大將家御時以來、令讀誦般若法華之

妙文、依奉致 関東御祈禱於長日、被停止守護使入部之

上、重犯五箇条之外、任先例、可致沙汰之由、御教書狀嚴

重也者、早任彼天福仁治之嘉例、謀叛殺害刃傷人夜討強

盜五箇条之外、任先例、可爲衆裁之由、申賜御下知狀、備

向後龜鏡、弥欲抽御祈禱之忠、仍乍恐粗言上如件、以解、

文永八年九月 日

雜掌等上

『口裏二』
『案文』

臺明寺雜掌解 重犯五ヶ条外、可爲山門沙汰由事
文永八年九月日

『此原書へ、旧御番所御文書二番箱中ニ一卷アリ』

『雜抄』

『正文在田布施衆二階堂三左衛門定行』

蒙古人可襲來之由、有其聞之間、所下遣御家人等於鎮西

也、早速差下器用代官於薩摩國阿多北方、相伴守護人、

且令致異國之防禦、且可鎮領内之惡黨者、依仰執達如件、

文永八年九月十三日

相模守(時宗) (花押)

左京權太夫(平政村) (花押)

(二階堂右兵衛尉) 阿多北方地頭殿

『此文書、忠宗公御譜中ニ在リ』

『久經公御譜中』

『享有之』

一 たうふつかそりやうらの事、めんく(實子)のしそくまこと

もらにわけゆつるとゆへとも、しん(久)なからんしそく

らのふんをへ、その一このうちへ、ひさ(久)時ち行すへし、

一 御くうしようとうの事

そりやうのふんけんをさためをかれをへぬ、しかるを

かのふけにつきて、はいふんの御くんしをたいかんせ

んともからあらんにをきてへ、そのりやうへひさ時ち

きやうすへし、

一きやうとおうはんの事

ひさ時かさいそくにしたかひて、一ミとうしんにあひつとむへし、もしそうりやうひさ時かけちをそむきて、たいかんのともからあらハ、そのちきやうのふんをハ、ひさ時これをちきやうすへし、一ひさ時にゆつりあたふるそりやうのうちのとそきにをきてハ、ひさ時につけをハぬ、右、のちのらうろうをたゝんかために、そんしやうの時かきあたふるさうくたんのことし、

ふんゑい八年九月十五日

『道弘』判
たうふつ判

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書ニ番箱中御談状置文一卷中ニアリ」

728

『調所氏文書祐恒譜中』

「任親父恒久讓、無相違、早祐恒可爲彼職之狀如件、

守在御判」

大隅國主神司藤原恒久謹辭

讓与嫡子藤原祐恒主神司職并調所政所書生兩職等事

右、件所職者、恒久重代相傳之所職也、然間相副于嫡子祐恒所帯之證文等、所讓与也、不可有異儀之狀如件、以辭、

文永八年九月廿日

主神司藤原恒久在判

729

『臺明寺文書』

(端書)
「名越尾張入道殿御下知、于時左近將監」

大隅國臺明寺守護使入部事

右、任天福元年七月十七日御下知狀、可令致沙汰之狀如件、

文永八年九月廿七日

(名越時章)
左近將監在御判

730

『臺明寺文書』

大隅國臺明寺守護使入部事

右、去九月廿七日御下知云、任天福元年七月十七日御下知狀、可致沙汰云々者、任御下知旨、可致沙汰之狀如件、

文永八年十月十九日

左衛門尉藤原

文永八年十月廿五日一通

當國御家人税所介義一
祐字、為惣領任之上云々、
有碑
(本文書ハ七四三号文書ノコトナリ)

731 『調所氏文書恒譜中』

大隅國御家人姫木藤七太夫篤季申、當國守護所具官調所得分及屋鋪壹ヶ所被押領由事、訴狀具書等遣之、子細見于狀、申狀無相違者、任先例、可被致沙汰、若又有殊子細者、可被注申之狀如件、

文永八年十二月十九日

左衛門尉

海老坂左衛門尉殿

732 「久經公御譜中」

『写在官庫』

〔校正〕

可令早任前大隅守忠時法師法名道佛讓狀、可致沙汰修理亮(マ)

久時所領等事、

右、如道佛今年九月十五日讓狀者、讓与久時之所領内、於除分者、付久時早、次道佛分讓于子孫所領事、無實子輩之分者、一期之後久時可令知行云々者、任彼狀、可致沙汰之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

文永八年十二月廿四日

相模守平朝臣〔時宗〕在御判

左京權大夫平朝臣〔政村〕在御判

『此御文書、永仁六年四月六日忠宗公ヨリ北条上総介實政ニ被差出令

披見、返書アリ』

733 『正文在官庫』

可令早修理亮藤原久時(久經)領知伊賀國長田庄事、右、任親父前大隅守忠時法師法名道佛今年九月十五日讓狀、可令領掌之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

文永八年十二月廿四日

相模守平朝臣〔時宗〕(花押)

左京權大夫平朝臣〔政村〕(花押)

〔此三通ノ正文ハ、旧御番所ニ番箱中御讓狀置文ニ卷中ニアリ、又同ニ番箱中御宝鑑三帖之内ニ原書アリ』

734 『調所氏文書恒譜中』

大隅國守護所具官調所得分同屋鋪(所説)蘭壹箇在折園事尙改

右、去文永八年十二月十八日如御下知之狀者、大隅國御家人姫木藤七太夫篤季申、當國守護所具官得分及屋敷壹ヶ所、任先例、可被致沙汰云々者、早任被仰下之旨、云得分、云屋鋪、無相違先例、可被致其沙汰之狀如件、

文永九年二月十三日

守護代左衛門尉(藤原兼徳)(花押)

735 「財部延時氏文書」

〔端裏書〕かおかにし太郎とのゝくますにゆつ〔花押〕

たゝしか⁽¹⁰⁾□なりをかのみやうてんのうちのたそのら

しよ□くらにゆつりあたふるふんにをいてハ、か

くへつの□たいするあいた、これをのそ

くところなり、^(平忠恒)
^(花押)

ゆつりあたふるあさなくますまろかところ
^(熊寿丸)

平たゝとしか^(忠俊)□そさうてんのそりやうなりおかの名

のてんはく菌ならひにさんやかりくらの事

たのつほくはくちの四至そのゝさかい、しんふ平忠

恒ゆつりしやうたゝとしか所帯のしやうにめいはいく也、

右、くたんのてんはくそのさんやのかりくらにをいてハ、

忠俊をちやくしとして、ゆつりあたへられおはぬ、こゝ

に異國の人襲來せしむへきあいた、関東の御けうしよの

むねにまかせて、親父たゝつねのたいくわんとして、上

府して、やく所をうけとりて、きんしせしむへきにより

て、参府するところなり、これにて、かつハ海路のな

らいなり、かつハ軍庭におもむくあいた、若たゝとしし

せんの事もあらハ、件ミやうのてんはくさんやかりくら

にをいてハ、たゝつねのゆつりをあいそへて、くますま

ろをちやくしとして、しゝそんくにいたるまで、たの

さまたけなく、ちきやうせしむへきなり、後日のみらん

をとゝめむために、しよはんを給へるところ也、よてゆ
つりしやう、くたんのことし、
^(か脱ぎ) ^(審判)

文永九年^{歲次}壬申 卯月三日
平忠俊(花押)
^(成西二郎)

平忠恒(花押)

爲證人 平忠重(花押)
^(眞書)

湛西(花押)

736 『見于山田氏二代忠真譜中』

ゆつりわたすさつまのくにたにやまのこをりのちとう

しきの事

みきのちとうしきハ、しきふのたらうたゝさねニ、ゆつ

りあたふる所しち也、はやくちきやうすへき狀如件、

文永九年四月十七日 道佛在判

737 「忠時公譜中」

文永九年壬申四月十日卒、年七十一、法名道佛、號仁阿

弥陀佛淨光明寺殿、

738 「島津世家」

道佛公^{諱忠時} 初名忠義 稱三郎兵衛尉
左兵衛尉 左衛門尉 修理亮 大隅守

公 得佛公適長子、夫人皇山氏所生 皇山重忠 第六女、以建仁二年

壬戌歲生、嘉祿三年先公薨于鎌倉、於是 公二十六歲嗣

封、先是 後鳥羽上皇疾鎌倉專權欲抑武臣以強 王室、

又以事、怒北條義時欲舉兵誅之、徵京師及畿内軍士、先

攻北條氏之黨在京者敗之、承久三年辛巳夏、北條泰時將

大軍入京、京兵距之於宇治川柵、水底引索、鎌倉騎兵並

渡、水勢急而溺死者八百許人、佐々木信綱馬上以刀絕水底

索、公時從泰時之軍、亦俱進絕索、公時所佩之刀名綱切、治

遂得渡、會大軍競渡、共擊京兵大破之、公獲敵七人、工兼永長一尺七寸八分

東鑑曰、七人之内一人 八月北條義時授 公越前生部莊及久安

保重富地頭職、閏十月又授伊賀長田郷地頭職以賞功、四年

壬午二月、將軍賴經 承久元年、將軍實朝為公曉被弑、如實禪尼使

左大臣藤原道家第四子僅二歲 而來嗣將軍位、禪尼垂簾聽政、 御鎌倉南庭、有大追物射、公亦

與之、東鑑曰、駿河前司義村加檢見、 貞應二年癸丑六月六日、

授近江興福寺莊地頭職、三年九月七日、又授讚岐備無保

地頭職、仁治二年壬寅二月二十二日、授和泉和田郷地頭

職、以代越前生部莊、寬元二年甲辰、將軍賴經禪位子賴

嗣、若狹前司三浦泰村 義村之子 與北條時賴有隙、寶治丁未夏、

密徵兵欲滅北條氏、時賴聞之伏泰村而滅三浦之族、初

公之女嫁泰村之弟四郎式部大夫家村、生三子、皆幼、於

是家村等戰死、而母子皆雜髮為僧尼、公之女為 尼名實忍 將軍賴嗣

闇弱而倦政事、鎌倉之權漸輕、諸侯蔑視將軍、於是建長

三年春、北條時賴・重時等相俱定謀、使人請中務卿親王

為將軍、歸賴嗣於京師、文永三年、將軍宗尊親王罷歸京

師、子惟康親王僅三歲而嗣將軍位、九年壬申四月十日、

公薨、壽七十一、號道佛仁阿弥陀佛淨光明寺殿、

739 西野野史

久經公

忠時公の次子、長へ式部少輔忠經と称す、側室の子なるか故に家督

の内山田・上別府を賜ひ山田に居す、故に山田を以て氏とす、將軍に仕

へ勲功の賞として越中国ふすまゝの庄を賜ふ、十二世の孫次郎左衛門久

武に至て命を奉し、志布志に有て藩鎮たり、子孫相統て爰に居す、因

て府下の土とす、十七世の孫山田 九郎左衛門是なり、支族猶繁茂す、

享保年中追諡して得臺院殿忍西生、母は伊達判官入道念性妹、

一房と云、神主を淨光明寺に祭る、 嘉祿元年乙酉生る、

文永九年壬申四月、忠時公に續て立つ、

建治元年乙亥、文永十二年四月廿五 日改て建治元年とす、 先是元の忽必烈 元の世 宗是也、

中國に入て宋を亡し、元成、 好て外國を征し、連年兵を

用ゆ、大將軍惟康親王 宗尊親王の子、母ハ太政大臣藤原兼經女、

文永元年鎌倉に生る、征夷大將軍、從二位 中納言に任し、右近衛大將を兼ね、初將軍賴經實朝に繼て立つ、寬元四年職を辭して京に帰る、子賴嗣立つ、八年にして京に帰る、北条時政後醍醐帝第一子宗尊親王を迎へ立つ、十五 西州の牧伯に命して筑前

箱崎津を守らしむ、故に久經公、軍を領し是を保つ、

弘安四年辛巳、建治四年二月廿九日、改て弘安元年とす。五月、元の刺罕（命脱カ）・范文虎

及ひ忻都・洪茶兵（命脱カ）貳拾四萬を率し、西州に寇す、阿刺罕路にして病て死す、元主（世）左丞相阿塔海を以是に代ふ、

范文虎其至るを待す、船を發し平壺嶋に至り五籠山に移（ヒラト）

る、久經公西州の諸侯と共に逆戰ふ、暴風頓起て元の船を覆す、元將三人難を免されて遁れ去、按通鑑云、擊日本兵十餘万死于海島、還

者僅三人、元軍嶋に在て糧を絶つ、本朝の軍進擊して斃殺し、三萬餘人虜にす、悉く斬る、或云、于闐莫青貝万五、將軍又宇治

宮貞綱を中國の軍に將として西州に至らしむ、備後國に至て元軍の敗を聞、然とも軍を班さす、西州に至て復ひ

寇するに備ふ、元主敗を聞て大に怒り、詔て藤艘五百餘を造る、又入寇せん事を謀る、群臣諫れとも聽かず、吏

部尚書劉宣上書して極諫す、於是止む、七年甲申閏四月二十墓廟神主

日、久經公箱崎營中に薨す、享年六十、道忍義阿弥陀佛と諡す、前と同じ、公平素義を嗜む、法制

を立て後昆に傳て曰、子を立るに嫡長を以するハ人倫の常也といへとも、不義の人に至てハ是に授るに國家を以

すヘからず、伝云、公箱崎に在り、阿蘇谷大炊介久時（久經公五弟）を殘して國を監せしむ、久時驕傲して礼なし、國中憤むるもの多し、市來太郎政家は是を惡て曰、彼太守の弟たるを以驕る、吾憐を見る事家人の如くす、忠久公者吾先ハ文字廣言が子也、吾と久時と何

の高下かあらん、久時忿怒して罵て曰、汝ハ惟宗氏か後、我先忠久公を以汝が祖の所出とするや妄るる事甚し、二人争て止まず、終に將軍に聞

す、於是二氏の系圖を出さしむ、忠久公頼朝公の子にして近衛氏の契子たり、廣言が子に非ること明けし、政家妄言に決す、久經公宮崎に在て

是を聞て嘆して曰、事久時か礼なきに起る、即國に帰り久時か守護代を免し、又宮崎に到る、○久時ハ忠時公第六子也、讓を得て伊賀國長田郷家に云、太子奉家祀社稷之業盛以朝夕視君膳者也、故に曰、冢子君則

守、有守則從、々曰撫軍、守曰監國、

740 「延時氏文書」

被下 關東御教書候異國警固事、自去四月十七日被上府候、迄今月十六日、博多津番役被動仕了、恐々謹言、

〔文永九年〕五月十七日（少式廣徳） 覺惠（花押）

成岡二郎殿〔平忠俊〕

741 「鹿屋氏文書」

下 嶋津御庄大隅方鹿屋院

定補 弁濟使職事

右馬允伴實包

右件人、令補任弁濟使職畢、恒例臨時之御公事、無懈怠可致沙汰之狀、所仰如件、以下、

文永九年八月 日

法眼和尚位（花押）

『調所氏文書祐恒譜中』

御判

(麻之)

□原祐恒申□如此、子細見于狀、所申有其□停止

女子并代官等之非分之領知由、依□如件、

文永九年九月廿六日

左近

(將監宗政之)

□等御中

『靈明寺文書』

正八幡宮雜掌法橋永圓并神官所司等申大隅國喲於郡重
枝・重富名・桑東郷松永名以下講經免事

右、當國御家人稅所介義祐字有禪爲惣領仁之上、帶本主狀

之間、於沽却田地者、可宛給之由依申之、文永七年被成
御教書之處、正八幡宮被管之輩令申子細者、可尋究之、

於關東御成敗之地者、非御家人并凡下輩分、可令沙汰付
義一由被載之間、彼所々者、爲社家進止之處、寄事於御
教書、押妨神領之条、無其謂之旨、社家訴之、爰承久・

寶治安堵御下文并本主遺狀義一雖帶之、就彼狀難及神領
之妨欵、如社家所進建久・嘉禎・建長御下知者、可爲社

家成敗云々、然者至有限神領者、可爲社家進止之狀、依

鎌倉殿仰、下知如件、

文永九年十月廿五日

□口基
「沽却田□御教書」

(重富名キレ)

「指宿文書」

ゆつりわたすゆふすきのこほりのくんししきならひに
てんはたさんやかゝい・をなしきかゝいもんしんくのミ
やつかさしき之事

ちやくなん又二郎むねたゝかところ

右、くたんのりやうしよゝいけてんはくさんやらハ、
たいらのたゝなかせんそさうてんのしやうりやうなり、
しかるあひた、てうとのせうもんらをあひそへて、やう
たいをかきて、ちやくなんむねたゝにゆつりあたうると
ころしちなり、きやうこうたのさまたけなくちぎやうす
へきなり、よつてゆつりしやうくたんのことし、

ふんゑい九年十一月十二日 たいらのたゝなか判

『延時氏文書』

薩摩國御家人延時三郎種忠申、爲同國御家人若松四郎忠
重、令殺害舍兄并甥、令押領所領由事、種忠帶訴狀令參

【羽島并若松ヲ知行ス】

上候、可有申御沙汰給候覽、恐惶謹言、

文永十年二月廿日

修理亮久時在判

進上 備後民部大夫殿

〔在久經公御譜中〕

746 『清水臺明寺文書』

臺明寺佛性新田止上新平太檢校居住貳段田間事

右、件田者、比丘尼西阿之寄進也、而七郎殿奉行之時、雖宛給太子、且爲 將軍家御祈所、且致肥後入道孝養、然者不能私改易、如元爲山門新田之由、外題明白也、爰左衛門尉俊村乍爲御代、官、不恐、関東御祈所、不憚肥後入道殿孝養、令改易佛地之条、甚以非正理歟、就中西阿之寄進者、致先師永祐之追善、太子又爲其門葉、爭妨彼善提哉、既本師不孝之咎難遁者也者、早任七郎殿之外題狀、如元可爲山門新田之狀如件、

文永十年四月十日

守護代沙弥爭念(花押)

〔コウラニ〕
〔門〕下知 〔衛門尉〕〔淨念房〕

747 『權執印文書』

故新太夫入道の持房かしんふ 佛 被讓候、證文被取

〔候間、その所ニ訴訟申して候へハ、御下知給はりて候へ、下向之時まいらせ候へく候、仍爲後日狀如件、

文永十年八月廿三日

紀持房(花押)

748 「財部延時氏文書」

薩摩國御家人見佛後家尼持性代乗心申、同御家人種忠率多勢帶弓箭兵杖、乱入住宅、擬押領瓦田村并田嶋等、致狼藉由事、訴狀具書如此、事實者不穩便、早相尋子細、可致注申候、仍執達如件、

文永十一年六月三日

左近將監(花押)

大宰少貳入道殿

749 『岸良氏文書』

沙弥阿佛讓渡

次男左近將監兼基

肝付郡内岸良村弁濟使職同田嶋山野狩倉等

四至 限東内浦堺 限西弥寝堺
限北郡本堺 限南海

置公事

御佃用作參段 收納使用參段 新加用貳段

御年貢皮伍枚 甘葛煎壹合 在黄皮紫參斤 干鳥

移花 簾除之

沽田引出物 (サト) 於事分錢參真文

本庄御廳造營時者、村々仁令支配、可致其沙汰也、

臨時御公事等、寄合村々令支配、無煩可致沙汰也、

宮毛河北内、兼基自作田參段田仁嶋廻仁坪於北南

仁相分天成壹町者、同屋敷壹所者、兼基永可令領

知也、且此子細書載于兼石讓狀畢、

右、守護狀可令領知、雖一事不可有相違、但於恒例御公

事者、書載于讓狀畢、至于臨時役者、寄合加評定、就兄

弟三人申詞、無煩可致沙汰也、仍讓狀如件、

文永十一年六月十八日 沙弥阿佛在判

750

「蒲生王山内某文書」

薩摩郡内平礼石寺内事、任故大隅入道殿御免除狀、停止

方々使者之濫妨、土民等可令安堵之狀如件、

文永十一年九月 日

惣地頭兼守護代(花押)

「按ルニ、故大隅入道殿へ忠時公ニ当ル、文永九御逝去也」

島津久經、部下ノ軍勢ヲ率ヒ、箱崎ヲ警備シ、以テ敵ノ

至ルヲ待ツ、異賊筑前ノ今津ニ至リ、水陸並進ム、二十

日博多ニ逼ル、舟ヲ舍テ岸ニ登テ騎ス、我兵邀テ之レヲ

撃ツ、殊死シテ戰フ、晨ヨリ晡ニ至リ、海陸接戰數合、

賊將高ニ據リテ指麾ス、賊兵毒箭雨ノ如ク注ス、中者皆

斃ル、我兵ニ善ク戰テ死スル者アリ、賊乃チ其肝ヲ取テ

之ヲ呑ム、戎器ニ鐵砲アリ、彈ノ大サ球ノ如ク、空ニ轟

キ霹靂ノ聲ヲナス、時ニ砲ノ何物タルヲ知ル者ナシ、人

馬辟易死傷甚タシ、賊勢益々張り、大友氏ノ軍ヲ破リ、

火ヲ氏舍ニ放チ、延テ是日宮崎八幡祠兵聚ニ罹ルト云、

752

『在山田譜土用熊丸伝』

ゆつりわたすさつまのくに谷山のこほりへ、とよくまさ

たゝるへし、こ大隅の入道殿より給へる本そうもんをく

してゆつる所也、たのさまたけあるへからず、後日のた

めにそうもん如件、

文永十二年二月十七日

忠實在判

『土用熊丸 山田氏二代忠實ノ嫡子也』
とよくま殿ニ

かさねて申、たゝしこのうちむら二所ハ、二郎と三郎

とニたひ候也、御そんちあるへく候、

二月十七日

在判

753 『正文在山田嫡家』

くろいとをとしのとうまろ二郎ニゆつるところ也、たの
さまたけあるへからず、こ日ために、そうもんくたんの
ことし、

文永十二年二月十七日

『山田氏二代式部少輔後大隅守』

忠貞(花押)

『山田氏三代宗久 初二郎丸 式部孫五郎ト云』
二郎

754 島津御庄三侯院定福寺鐘一口事

右志者、爲天長地久御願圓滿、別信心大法主僧現世安穩
後生善處、所奉施入如件、

文永十二年乙亥三月十八日

大願主僧

鏡玄

755 『比志島氏文書』

(外題)

「申され候ひししまのほりのうち以下そのくはた
けらの事、かつハせんれいにより、かつハはうれ
いにまかせて、申狀のことくめん候おハぬ、

收納使法橋(花押)」

源佐範言上

欲且依年來免行實、任先收納使等下知旨、給當御外題、

備向後龜鏡、比志嶋堀内以下園々畠等事、

四至東限河 西限久木山田尻
北限山 南限井尻田端

同平狩倉

田平

菖蒲谷

件堀内園々畠等万雜公事、任先例、給當任之御外題、爲
備後代證文、勒狀言上如件、

文永十二年四月十一日

756

『比志島氏文書』

(外題)

一堀内園畠等事、如申狀(案カ)有御下知之由所被進也、

然者、於彼地利物付公事者、令免除早、

地頭代(花押)」

源佐範言上

欲且依年來免行實、且任先御下知等旨、賜當御外題、

備向後龜鏡、比志嶋堀内已下園畠等事、

四至東限河 西限久木山田尻
北限小山 南限井尻田端

内平狩倉

田平

葛瀨谷

副進

四通 大隅殿御下知等案

一通 薩摩國惣地頭大輔君淨尊施行案

一通 同惣地頭紀左衛門尉下知案

件堀内万雜公事地利物、任先例、蒙御免事、所進之御下知狀等明白也、仍當御任之時、給重御外題、爲備後代證文、勅狀如件、

文永十二年四月廿六日

757 「久經公譜中」

建治元年、應將軍惟康親王之高命、警固於筑前宮崎之役所、而防禦於異賊者尚矣、

758 『本田静観伝入來本田氏文書也』

ゆつりあたふ

さつまのくにやまとのゐんのくんししきならひにみやう

てんはくさんやかゝい的事

みき、くたんのしよくへ、たいらのうちかちうたいさう

てんのしよたいなり、しかるあいた、「孫 熊太郎 九」まこくまたらうまろ

に、したいてうとのしよもんならひにたいく、の御く

たしふみてつきをあいくして、えいたいをかきてゆつり

あたふるところなり、しかれへ、うちのによかちひて

た、かゆつりしやうをまほて、むらく、のしよたうまい

のゐんす、ならひにいろく、のねんくくしくやくいけに

をきてへ、さたをいたすへきものなり、よてこにちのた

めに、ゆつりわたすところくたんのことし、

けんちくわんねん七月廿三日

たいらのうちありはん

759 「國分寺文書」

安樂寺別宮天満宮薩摩國分寺造營間事（前書）宰相申狀副別具書等、如此、可進入之由、被仰下候、令申沙汰給候狀、

恐く、

「建治元」

七月十二日

勘解由次官經頼

謹上 参河前司殿

760 「上」

天満宮薩摩國分寺造營事、寺家連々申候、可有御下知候

欽之由、院御氣色所候也、以此旨、可令申沙汰給、仍執達如件、
(建治元年) 八月十八日 勘解由次官經頼

謹上 参河前司殿

761 『國分寺文書』

薩摩國天滿宮國分寺造營料所事、帶 宣旨之上、國司任自由顛倒之条、太不可然、早任宣下之旨、可存知之由、可令下知給者、依 御氣色、執達如件、
(建治元年) 六月廿二日 在御判

謹上 兵部卿殿
(藤原隆親)

762 『入』

當國天滿宮國分寺等造營間事

院宣并重解狀案如此、且爲先例、且爲神事、任申請旨、早可被其沙汰者、依國宣、執達如件、
(建治元年) 九月八日 左衛門尉 (藤原カ)

薩摩國在廳官人御中

763 『入』

薩摩國天滿宮國分寺造營事、可被其沙汰旨、加下知了、且可令得御意給候哉之由、所候也、恐々、
(建治元年) 九月十日 前参河守奉

764 『載于山田譜三代宗久伝』

ゆつりわたしたてまつるもちまろのうちすいてんいぢやうにたん、あさなはらたかいもとの事、
「用九」
「原田垣本」

みき、くたんのてんちへ、ふつけうさうてんのところなり、しかるにはつる御せん「初稿前」に、したいせうもんらをあいそへて、ゑいたいをかきてゆつりわたしたてまつるところ
しちなり、たのさまたけなくりやうちあるへく候、よて
こ日のために、せうもん「雜目判」のしやうくたんのことし、

けんちくわんねん十月三日 ふつけう在判
(花押)

765 『岸良氏文書』

讓渡

大隅國肝付郡内岸良村弁濟使職事

右、於彼所職者、重代相傳知行地也、仍相副親父阿佛狀、所讓渡子息得益也、仍於四至堺者、悉被載早、然早任讓

狀旨、致沙汰、向後無他妨、可令領知之狀如件、

建治元年十月十八日

左近將監伴兼基(花押)

766 『國分寺文書』

左弁官下大宰府

應令管薩摩國造進當國天滿宮并國分寺事

右、得彼宮寺所司等去月日奏狀備、當宮者天滿大自在天神御寶殿、嚴重無雙之御廟也、國分寺者大聖觀世音菩薩佛閣清淨□法地也、故自往昔以來、爲國衙之沙汰、至少破者加修理、及大破者令造營者先例也、建保二年雖被注損色、或依國司得替、或依時代推移、無造營沙汰之間、以所司神官等之私力、雖加修理、星霜久積、風雨相侵、已大破欲令顛倒之間、雖令申子細、代代國司無其沙汰、空送年月、所司神官等傷嗟無極、幸今興行佛神事、被行德政之由風聞、故捧解狀、賜安樂寺別當法印并前膏宰相家學狀、經奏聞之處、忝被下兩度院宣於國司之間、國司領狀、請文分明也、粗訪鎮西神社造營例、宇佐宮者九州被宛之、正八幡宮者被宛三箇國、香椎宮者被准宇佐宮例、宮崎宮者被寄役國之上、猶宛國中庄公催之、千栗宮又以同前、

天滿天神御廟觀世音佛閣、何可有相違哉、且又先例也、

早被下宣旨、令言上子細於關東、欲致其沙汰者也、所奉

敬天滿天神者、觀音化身、大聖觀世音又大自在天神御本

躰也、然者云天滿宮、云國分寺、不可不被造營欵、就中

蒙古凶賊等來着于鎮西、雖令致合戰、神風荒吹、異賊失

命、乘船或沈海底、或寄以浦、是則非靈神之征伐、觀音

之加護哉、向後巢惡之輩永絕、顯天下安穩泰平之條、不

可有疑欵、望請官裁、且任先例、且准傍例、依院宣并國

司領狀、當國天滿宮并國分寺以下可令造營之由、被下宣

旨者、弥仰政道之貴、將致公家武家御祈禱之忠勤者、權

中納言藤原朝臣資宣、奉勅、依請者、府宜承知、依

宣行之、

建治元年十二月三日

大史小槻宿禰在判

右少弁平朝臣御判

767 『池端氏文書』

建部清綱辭

讓与庶子厩房丸田園等事

一園伍ヶ所内

西本園三ヶ所内 當作藤太園 勢三郎園 見平太園

四至 西限松山矢太郎之道見平太垣根也 南限太圍
東限大河、ハタ 北限宮山峯

君澤津園壹所 東限綾弥次郎 西限中尾
南限宮田際 北限尾

弥藤大殿園壹所 東限堀 南限堀
西限路 北限草宇五郎南垣

一水田捌段内

葛蒲田參段 東限宮田許 南限島田
西限温宮許 北限路

島田五段 東限小宮田 南限右多田北許
西限右多田溝 北限葛蒲田中溝

右、件田園等、所讓与庶子厩房丸也、然御公事分御佃被入田米貳斗、府御領物肆疋可弁之也、次國ヶ初任之時使入部之時者、黒米陸升官力得可弁郡方、縱使雖被經數日、此分(至于)自余雜事傳夫馬等者、令停止了、凡彼田園等御公事配分如此、就中社國并關東御方臨時課役雜公事者、一向留于本名早、仍爲永代讓狀如件、

建治元年十二月廿二日

建部清綱在判

『國分寺文書』

下 薩摩國雜掌

可早任 宣旨狀令當國造進天滿宮并國分寺事

右、去年十一月三日 宣旨今年正月廿二日到來、應令管薩摩國造進天滿宮并國分寺事、右、得彼宮所司等五月日奏狀稱、當宮者天滿宮大自在天神御寶殿、嚴重無雙之御廟也、

國分寺者大聖觀世音菩薩佛閣清淨之法地也、故自往昔以來、爲國衙之沙汰、至少破者加修理、及大破者令造營者先例也、建保二年雖被注損色、或依國司得替、或依時代推移、無造營沙汰之間、以所司神官等之私力、雖加修理、星霜久積、風雨相侵、已大破欲令顛倒之間、雖令申子細、代代國司無其沙汰、空送年月、所司神官等傷嗟無極、幸今興行佛神事、被行德政之由風聞、故捧解狀、賜安樂寺別當法印并前菅宰相家舉狀、經奏聞之處、忝被下兩度院宣於國司之間、國司領狀請文分明也、粗訪鎮西神社造營例、宇佐宮者九州被宛之、正八幡宮者被宛三箇國、香椎宮者被准宇佐宮例、宮崎宮者被寄役國之上、猶宛國中庄公催之、千葉宮又以同前、天滿天神御廟觀世音佛閣、何可有相違哉、且又先例也、早被下宣旨、令言上子細於關東、欲致其沙汰者也、所奉敬天滿天神者、觀音御化身、大聖觀世音又大自在天神御本跡也、然者云天滿宮、云國分寺、不可不被造營欵、就中蒙古凶賊等來着于鎮西、雖令致合戰、神風荒吹、異賊失命、乘船或沈海底、或寄江浦、是則非靈神之征伐、觀音之加護哉、向後臬惡之輩永絕、顯天下安穩泰平之条、不可有疑欵、望請官裁、且任先例、且准傍例、依宣并國司領狀、當國天滿宮并國分寺

以下、可令造營之由、被下宣旨者、弥仰政道之貴、將致公家武家御祈禱之忠勤者、權中納言藤原朝臣資宣、奉勅、依請者、府宜承知、依宣行之者、早任 宣旨之狀、可令造進天滿宮并國分寺狀、所仰如件、

建治二年正月 日

執行藤原朝臣

權大監大中臣朝臣在判

少監惟宗朝臣

大監惟宗朝臣在判

權少監惟宗朝臣在判

大監惟宗朝臣在判

大監大中臣朝臣

少監惟宗朝臣

大監惟宗朝臣在判

大監惟宗朝臣在判

監代平朝臣在判

監代平朝臣

監代文屋眞人在判

監代中原朝臣在判

監代平在判

769

『町田元祖常陸介忠經譜中』

建治二年丙子閏三月、奉 久經公之旨、從征高麗之役、

按、此時征伐高麗無明文、此世所謂蒙古高麗之軍事也、

先是蒙古主於西土、令外國朝貢者千餘國、而惟皇國獨立

宇宙之間、未嘗有一介通好者、文永八年九月、蒙古使其

大夫趙良弼奉書求聘好、高麗附牒狀、朝議草答書、相模

守北條時宗抑而不遣、却其使、文永十一年十月五日、蒙

古來寇對馬、守護代右馬允藤原國助死之、同月十四日、

寇壹岐、建治元年四月、蒙古號國曰元、使其臣杜世忠・

何文著・都魯丁等、九月七日、北條時宗斬杜世忠・何文

著等五人于鎌倉、減省公私用費、罷京師大番兵、挺武幹

士分遣鎮西諸國、以備元寇、拋大日本史蒙古以高麗嚮導、侵掠

壹岐・對馬及緣海郡邑、於是北條時宗將伐高麗、傳令於

西國、而忠經奉征討之旨者、特挺當其選也、此時宗族從

少典上野

權大典上野

權大典上野在判

權大典上野

權大典紀在判

一行忠經云、

770 『忠經譜中』「見ハス」

爲高麗征伐被遣武士候、同可罷渡之由、被仰下候也、恐

々謹言、

建治二年後三月五日

久時御判

大隅五郎殿

771 「忠經公御譜」

「雜抄」

爲高麗征伐被遣武士候、同可罷渡之由、被仰下候也、恐

々謹言、

建治二年後三月五日

久時御判

吉富次郎殿

772 『調所氏譜恒伝』

建治二年丙子、先是執權北條時宗斬元使杜世忠等於鎌倉、

命大宰府及緣海郡國、各々飭守備、為前年九月事、至是八月 幕

府惟康親王教書命諸御家人等、算其領地、築館舍於宮崎、受

功段別各寸、令限本月、皆竣其功、時祐恒爲調所職、乃

借守護代左兵衛尉兼當・大介兼稅所某等、承旨遍詢部
兼頼
下令以徵之、

773 小河院

上小河三十五丁

下小河二十五丁

上井二十五丁

敷根十二丁

廻六丁

加礼河六丁

市成六丁

恒吉六丁并築瀨名八丁

平房六丁

曾小河十二丁

名ゆう十二丁

湊八丁

功德丸六丁

平名五丁

弟子丸名六丁

元行三丁

恒見三丁

曾於郡

郡田名十三丁

下河俣五丁

重久名十三丁

田口八丁

大窪六丁

用松十五丁

川北五丁

重富名(ト)

百八十丁以上

桑東郷

宮永十二丁

長加領六丁

法樂寺一丁五反一尺五寸

源八入道光佛

上三臺堂六丁

下三臺堂六丁

咲限寺三反三寸

知性房

世戸口名十三丁

松永名十二丁

正福寺反一寸

石鉢藤太郎八郎

武安三丁

上西郷六丁

朝日寺三反

修理檢校兼順

東郷六丁

則貞三丁

新三昧三丁三反

奉行權惣檢校房

西光寺

木之房名三丁

長壽堂一丁一反一尺二寸

權執印法橋永圓

上久満五丁

中山寺三反三寸

同人

桑西郷

内村三十丁

内山田五十丁

石水寺一反

御家人修理所檢校丸

尖尻五十五丁

小濱六丁

西明寺三反三寸

權執印法橋永圓

山之路二十五丁

新講免七十五丁

文殊山半五反

主神可祐恒

中之新講十三丁

油新講十八丁

九鉢堂十丁一丈

預所雅樂左衛門入道

つる山野島地

池袋

最勝寺新堂五丁内五尺

正宮所司修理執行覺順

野口村

二丁五段二尺五寸

同弥勒寺執當慶弁

細工所給田三丁五反三尺五寸

弥勒寺上座

二丁五段二尺五寸

同弥勒寺執當慶弁

田守寺田三十七丁八段半

五師房

小神用四丁四反

西郷郡司則継

百堂(カ)一丁六反一尺六寸

權執印法橋永圓

邊世加利二反

長乘房

最勝寺一丁五反一尺五寸

御家人田所宗久

牟留々木二反三寸

石上一反二寸

御家人修理所檢校丸

滿福寺五反五寸

宮田所永兼

早鈴三反三寸

御前別當兼禪

藥師堂一反二寸

宮田所永兼

早鈴三反三寸

御前別當兼禪

青山崎三反三寸

弥勒寺執當慶弁

米丸二丁六反半内二尺六寸五分

廳法橋圓眞

加礼河七段内七寸

二反半同人
二反半修理執行兼禪

二丁二尺

臺明寺成仙房

溝部六反六寸

御家人諸太郎末房

六反半六寸五分

留守刑部左衛門尉

在河七反七寸

綾太夫宗助領

當得二丁六反二尺六寸

霧嶋座主慶範

皆尾二反三寸

佛成房明慶

大樂六反六寸

前執行房并智光房

竹師七反七寸

預所雅樂左衛門入道

常樂一丁七段一尺七寸

佛成房明慶

夜久高七反七寸

御家人税所介義祐

乃樂一丁一尺

佛成房明慶

鹿兒嶋社一丁七段一尺七寸

源太夫

加治木郷百四十五丁五段除貢進田五丁
定百四十五段半

佛成房明慶

御服所六丁六反六尺五寸(五カ)

預所卿法眼

公田百九丁二段半除貢進田五段
定百一十二反半二尺二寸五分

府社一丁内一尺

大府御領□

永用百六十丁一反半除貢進田五丁
定百一十二反半二尺二寸五分

大穴持新田五反五寸

神主大宮司御家人姫(木カ)□
太夫篤季

本名永用五十丁五丈

御家人郡司氏平(兼カ)

中目五段内五寸

宮司分田御家人姫木太夫篤季

久永廿丁二丈

御家人木田三郎探通平(兼カ)

三反三寸

御家人別府二郎長光

永富廿丁二反一丈二寸五分

御家人又二郎俊平

料田一反二寸

御家人又二郎俊平

吉原十丁一丈

御家人又二郎俊平

神主惣大宮司同人

鍋倉三丁三丈

大輔法橋勝印

小大宮司主神司祐恒

宮永崎守八丁八尺

御家人修理所檢校丸

經講田九丁二反半

本名用丸五丁三尺加惠定

御家人修理所檢校丸

愛力一反二寸

守山

永谷三丁三尺

勢得一反二寸

善田房

万得五丁三反内

久樂二反三寸

經官永祐

郡本一丁二反内

二段八寸

御家人郡司氏平

五段五寸

臺明寺學頭榮源

邊河四丁四尺

弁濟使平左近入道西佛

寺田二十丁

九躰堂十五丁一丈五尺

預所伊与寺主

法樂寺一丁一尺

源八入道光佛

新三昧一丁一尺

奉行權惣檢校

肥喜寺三丁三尺

阿闍梨良幸

若宮田三丁三尺

大輔法橋勝印

帖佐西郷二百四十丁九段三百步除實進田五丁定二百卅七丁五段大

公田百四十三丁五段加官吉五丁并福田寺田定除實進田五丁

大山十一丁九段大加神田寺田定除實進田五段正宮留守刑部左衛門殿眞用

定田十一丁四反一丈一尺四寸六分

深見七丁九段同 同人領

定七丁四反七尺四寸

中河良九丁反同 同人領

定八反八尺六寸

山崎八丁三反小同 同人領

定七丁八段小七尺六寸四分

寺師十丁七反加神田寺田宮吉定除實進田五反 同人領

定九丁反小九尺一寸四分

中津乃十二丁五反大加神田寺田宮吉定除實進田五段

定十二丁大二尺六寸

永世七丁七反小加神田定除實進田五反 越前檢校覺禪

定七丁二反小七尺四分

住吉十三丁九段半加神田宮吉定除實進田五反 弁濟使平左近入道圓佛

定十三丁四反半一丈三尺四寸五分

船津十四丁反三百步加神田寺田定除實進田一丁 臺明寺住侶葉心房

餅田廿七丁四反小加神田寺田定除實進田一丁 御家人稅所義祐

定廿六丁四反小二丈六尺四寸四分

神河九丁五反加神田寺田宮吉定九尺五寸 權政所助道領

松武一丁五反一尺五寸 郡司榮繼領

恒見七丁七尺 留守刑部左衛門尉眞用領

万得七十五丁半加神田寺田定

平山卅一丁八段半加神田定三丈一尺八寸五分 同領

千本十丁七段六十同 弁濟使紀四郎右馬允貞能

豐富十一丁九段小一丈一尺九寸同 留守刑部左衛門尉眞用

柴島二丁六反之加尺二尺二寸宮吉定 美濃阿闍梨

寺田十五丁四段

法樂寺三丁三尺 源八入道光佛

百堂九丁四反九尺四寸

新三昧一丁一尺

最勝寺領龜二丁二尺

蒲生院百四十二丁三百步除實進田五丁定
百卅七丁五反大

留守刑部左衛門尉眞用
弁濟使左衛門入道法智

公田百十九丁五段小

末丸九十七丁七段加神田寺田万得定
除實進田九反

定田十六丁八反一丈六尺八寸

久得七十二丁反小加神用万得定
除實進田二丁六反

定六十九丁五反小六丈九尺五寸四分

本名久得

久富

久松

久末

法師丸二丁三反加神田定
二尺三寸八分

武支三丁七反半(支力)
三尺七寸五分

今富十一丁七反小加神田定
除實進田五反

定十一丁一反一丈一尺二寸四分

脇本十一丁九段小加神田万得定
除實進田一丁

弁濟使兼名主三郎太夫吉本

定十丁九段小一丈九寸四分

恒見十丁小一丈四分

府社中目二尺二寸大府御領

寺田十三丁

帖多守五丁五尺

尺迦堂八丁八尺

吉田院廿丁九段除實進田一丁
定十九丁九反

公田十五丁内除實進田一丁
定十四丁一丈四尺

万得七反七寸

寺田七反七寸

本名十丁三反一丈三寸

中納四丁八段四尺八寸

宮浦四丁八段四尺八寸

衾寝南侯四十一丁五段内除實進田二丁
定卅九丁五反三丈九尺五寸

郡本廿一丁五段内除實進田定
廿丁六反二丈六寸

佐多十丁除實進田六反九尺四寸
定九丁四反

本名六丁九段半六尺九寸
五分

元行五段半五寸五分

安行五段半五寸

名主孫太郎清持

御家人姬木太夫篤季

弁濟使阿波房成幸

預所卿法眼

經田一丁一尺

小神田三丁五反三尺五寸

正宮御供所清弘領

長太夫幸道領

二郎太夫清持領

御家人田代七郎助友

御家人弥三郎太夫親房

御家人四郎親綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

御家人郡司清綱

一丁四反一尺四寸

御家人九郎宗親跡

財部院百丁十丈

田代十丁除實新田五反
(雄九) 定九丁五反

御家人七郎助友

多祢島五百丁五十丈

栗野院七十四丁内除實新田三丁
(雄九) 定七丁十反

寄郡七百五十八段一丈

南里四十丁除實進田一丁五反
定卅八丁五反

預所卿法眼

横川院卅九丁五段二丈三丈九尺五寸四分

米永十六丁七段半一丈六尺七寸
五分

郡司貞高

菱刈郡百三十八丁一段十三丈八尺一寸

恒次重武恒山十二丁一段三百步一丈二尺一寸八分

串良院九十丁三段二丈九丈三寸四分

御家人大新太夫人道西善

鹿屋院八十五丁九段八丈五尺九寸

在次九丁六段大九尺六寸
六分

名主長三郎太夫助直

肝付郡百卅丁二反三丈十三丈二寸七分

北里卅四丁除實進田一丁五段
定卅二丁五段

弁濟使阿波房成幸
名主丹後房

柵寝北俣四十丁五段四丁四丈五寸八分

鹿屋恒見八尺

正宮修理檢校兼順

下大隅郡九十五丁九段九丈五尺九寸

始良庄五十丁五尺
(丈九)

始良西俣廿四丁六段二丈四尺六寸四分

得丸廿丁内二丈

曾野永利十一丁一反大内

本名十七丁一丈七尺

名主神一丸

用松二丁四反二尺四寸 名主御家人諸二郎兵衛尉重祐

三丁三尺

名主六郎兵衛尉助元

弁濟使分三丁六反三尺六寸

末枝廿丁二丈

名主御家人諸二郎極高友
(雄九)

加治屋五丁二反大五尺二寸六分

末次八丁八尺

名主平太夫入道

小河永利十二丁六段四丈一丈二尺六寸八分

同中限二丁二尺

名主六郎兵衛尉助元

同百引村十三丁四丈一丈三尺八分

嶋津御庄領家近衛殿
地頭尾張守殿

筒羽野村四十八丁五段一丈四丈八尺五寸二分

新庄七百五十五丁七十五丈

入山廿丁二丈

深川院百五十五丁十五丈

右、件石築地役、任関東御教書并少貳殿御施行之旨、以

八月中、可終其功之狀如件、

建治二年八月 日

調所藤原在判

書生藤原在判

惣官大藏

大介兼税所藤原在判

守護代左兵衛尉藤原在判

御恩御下文一通令進之候、御拜領之条、悦存候、恐々謹

言、

(建治二年)

八月廿八日

(安達兼盛) 秋田城介(花押)

謹上 大隅修理亮殿

(久盛)

776 『公』

伊作庄并日置庄御拜領之条、御面目之至、悦存候、故如

此仰給候之条、尤本意候、恐々謹言、

(建治二年)

十二月十日

秋田城介(花押)

謹上 大隅修理亮殿御返事

〔右ノ三通、旧御番所御文書ニ番箱中御宝蓋三帖之内ニ正文アリ〕

774 「久經公御譜中」

『正文在官庫』

將軍家政所下

可令早大隅修理亮久時、^(久盛)領知薩摩國伊作庄日置庄地頭

職等事、

右人、爲彼職、守先例、可致沙汰之狀、所仰如件、以

下、

建治二年八月廿七日

案主菅野

知家事

令左衛門少尉藤原 別當相模守平朝臣(花押)

武藏守平朝臣^{【義政】}

775 『公』

777

『正文在山田氏載于宗久伝』

ゆつりわたすたにやまのこほりのうちやまたのむらなら
ひにきたのへふにをきてへ、二郎にえいたいをかきてゆ
つりわたすところしち也、こ日のためにせうもくたんの^(ん脱)
ことし、

けんち二年九月十三日

忠真在判

〔三代忠真ノ子宗久、初二郎九ト云〕
二郎に

778

『山田文書』

ゆつりわたすたにやまのこほりのうちうすくのこう「字宿」ニを

きては、三郎ニえいたいをかきて、ゆつりわたすところ

しち也、たゞしせいちやうのほとへ、こけのさたたるへ

し、よてこ日のために、そももんくたんのことし、

けんち二年九月十三日

山田家二代大隅守忠貞

忠貞在判

三郎「山田式部藤三郎直久事也、初三郎ト云」

779

『蒲生主人山内某家蔵文書』

薩摩郡内平礼石寺内事、任故大隅入道殿御免除狀、停止

方々使者之濫妨、土民等可守先例之由、加下知候之狀件（如説之）

建治二年十月 日

稱忍房

「按ルニ、故大隅入道ハ御二代忠時公ノ事ナラン」

780

『比志嶋氏文書』

宮崎役所築地事、滿家院内比志嶋・西俣・河田・前田、

以上四ヶ名分、伍丈壹尺肆寸被勤仕了、仍之狀如件、

「建治三年」

正月廿七日

三代久經公ノ初御名也

久時（花押）

比志嶋太郎殿

781の1

建治三年二月十三日、三郎太夫息長助直、以先祖所傳曾野郡智乃名内水田字堤田肆段、沽渡安部中子、

『臺明寺文書』

「若（於子也）彼田、令申違乱有子息等者、更不可有助直之

子孫之儀之狀如件、

（助直）
（花押）」

散位息長助直謹辭

奉沽渡智乃名内水田字堤田肆段事

在曾野郡二条五里

副進本證文等肆通

右、件田者、助直先祖相傳所領也、雖然依有要用、直米

拾肆石仁限永年、安部中子仁奉沽渡事實也、但於万難公

事者、自本無之、至于四至者、本證文等仁明白也、若付

于彼田違乱出來之時者、爲助直之沙汰、可明申也、仍爲

後日沽券之狀如件、

建治三年二月十三日

散位息長助直（花押）

「口裏ニ」
「三郎太夫殿」

782

『案文在官庫』

敬白 天判起請文事

奉爲 本所不可有不忠条之事

一於庄務事者、爲先公事不可有私事、

一奉爲領家抽忠節、不可同心地頭儀事、

一領家御事於于事不存疎略、可相計公平事、

一乍帶御下文致不忠之時者、可被召所職事、

一御年貢并御公事等不可有懈怠事、

一奉違背領家、寄事於御家人、不可訴申閑東事、

右、於日置庄下司職者、弘純爲相傳之所帶處、帶收納

使之私任補狀之上、弘純致不忠之由、有純掠申之間、

旁依相貽御不審、雖奉被改易所職候、捧相傳之證文、

不誤之由依陳申、如元還補當職候上者、以前全以無不

忠之儀候、又向後事一切不可存不忠腹黒之儀候、若如

此乍令申候、上件条之事爲申上候者、

奉爲始上梵王帝釋 王城鎮守八幡大菩薩 賀茂下上等十

八大明神 祇園 北野等 春日 稻荷 住吉 山王七社

王子眷屬、殊日本第一大靈驗能野三所權現、惣日本六十

餘州大小神祇神罰冥罰、可蒙平弘純之身中八万四千毛穴

仁候、仍所申請起請文狀如右、

建治三年七月 日

平弘純在判

「此文書写、御文庫二番箱他家文書一卷中ニ在リ、忠宗公御譜中ニ載置カル」

783 「写御文庫二番箱他家文書中」

寺家政所符

補任 正八幡宮政所職事

藤原義祐

右人、補任彼職如件、符到奉行、故符、

建治三年八月 日

檢校兼石清水權別當法印大和尚位在御判

784 「全」

在御判

寺家公文所下 餅田村

補任 預所職事

藤原義祐

右以人、爲彼職、令執行所務、御年貢以下雜物等、任先

例、無懈怠、可致其沙汰之狀、依長吏仰、下知如件、

建治三年八月 日

左衛門尉源在判
前權寺(主カ)大法師在判

785 「写在御文庫二番箱他家文書中」

法橋上人位在判

下 正宮公文所

可早任本家御補任狀、以藤原義祐、爲政所職事、
右人、爲彼職、任先例、可致其沙汰之狀如件、

建治三年八月十九日

執印法橋上人位在判

786 「全」

下 正宮公文所

可早任本家御下知旨、以藤原義祐、爲餅田村預所職事、
右人、任御下知之旨、可致其沙汰之狀如件、

建治三年八月十九日

執印法橋上人位在判

787 「久經公御譜中」

『比志島氏文書』

走湯山造營事、莫祢兵衛入道・市來入道・谷山郡司等致
對捍云々、早可令催沙汰、依仰執達如件、

788 『正本在水引權執印』

建治三年九月七日

(時宗)
相模守御判

『三代久經公ナラン』
大隅修理亮殿

新田宮造營事、領家半分御勤不可事行欵、以社領九十余
丁、引募長日朝家御祈禱講經供祈以下神事立用之事、以
彼祈田内、如形假神殿年々加修理候、而四十余丁國衙与九
十余丁神領、御造營等輩御勤不便次第候欵、但五ヶ年内
造營事、國司御領狀候者、社家又於涯分勤者、不可有子
細候、若猶國司被對捍申候者、如天滿宮、被寄附所望要
郡五ヶ所於當社、可致本功候、以此趣、可有御披露候、
恐惶謹言、

「建治二」
十一月七日

雜掌上